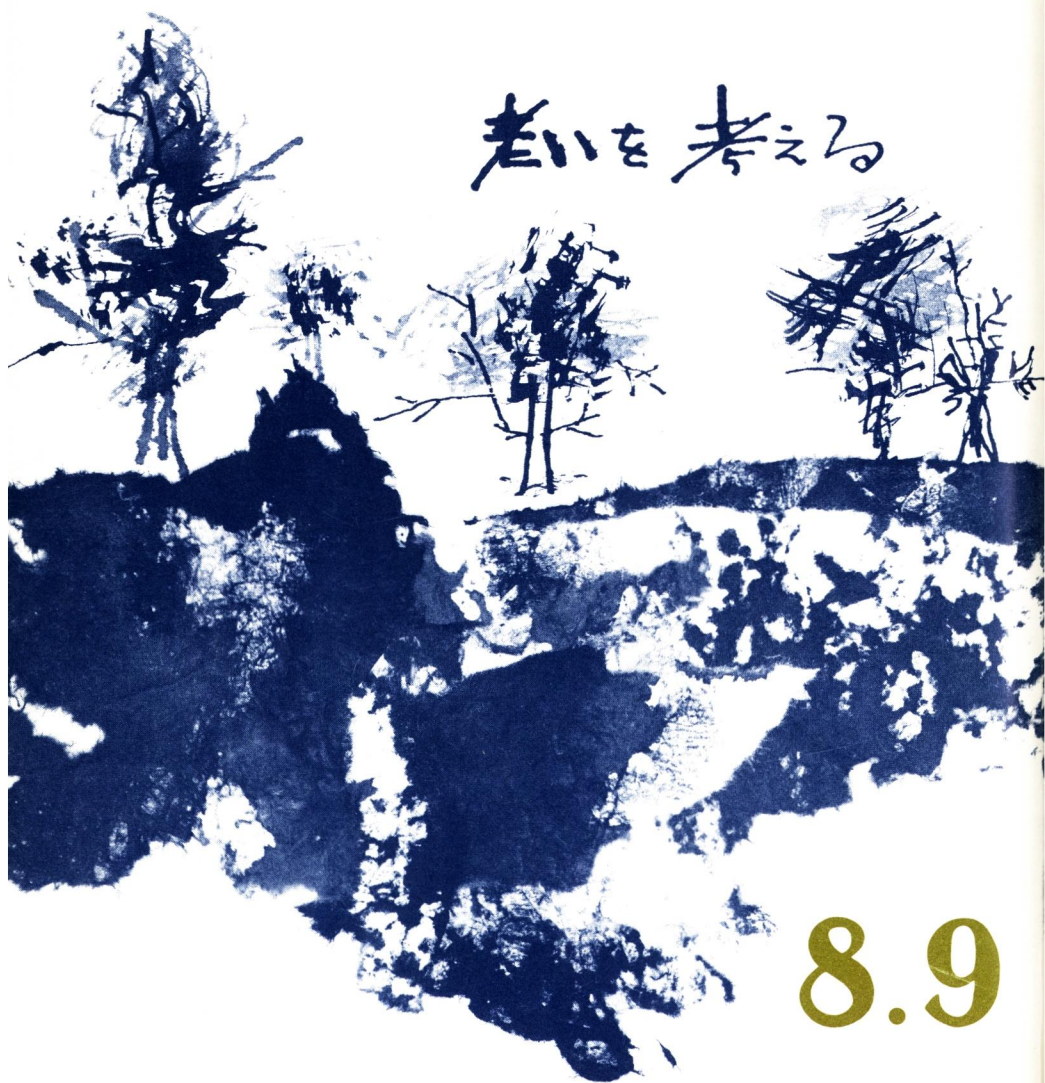


新しい家庭科

ウイ

老いを考える



8.9

経済的資源にとばしいスエーデンが、世界にさきがけて国民所得の高い高齢化社会になったのは、この国が百年にわたって他国と戦わず歴史上の罪を背負わなかったからである。

中国やアジア諸国の歴史に罪を背負った日本は、戦後もすでに終わり、若者を再び戦場に奪われる心配はなくなつたかにみえる。だが人間の自然がもつ生命の尊さが地球よりも重いという実感のもてる高齢化社会は果たして到来したのだろうか。

被爆、戦災そして戦後の飢餓体験を通して、四十年後の今日でもなお心身に後遺症をもつ高齢者は決して少なくないはずだ。思春期に結婚を願いつつも、ついに平和な家庭をもてず、老境に入っても苦楽を分かちあえる伴侶のいない五十代後半から六十代前半の独身婦人が五〇万人以上もいるというではないか。戦後はまだ終わっていないのだ。

自分の生活史に引きよせて、平和と生命の尊さを語りうるのは今日の高齢者である。

昨秋、民話の豊富な岩手県盛岡市で日本老年社会科学会を開催したとき、老人ホームの若いケース・ワーカーが老人と対面しながら、食べものとセックスを話題にした民話を方言で語りかけたら、笑いや悲しみの表情が現れはじめ、ボケの症状が回復してきた事例を紹介していた。この場合、老人が子どものころになじんでいた民話を通して、他者の語りべとしての役割と同一化することによって、脳の神経細胞が正常に機能しはじめたのである。

私はいまでも人は年をとると平和主義者になれるものだと思っている。平和を熱く語れるのは、死を受容する老人のもつ情熱そのものだから。旧約聖書にも「夕べになりてさらに明るし」とあるように。平和の大切なことを後世に伝え、生命の尊厳をさりげなく語る役割は、明日を期待する高齢者に与えてくれた今日の役割である。

(日本老年社会科学会会長)



# 野の花をたずねて やまぼうし



逐次刊行物

昭 58.7.20 和

国立婦人教育会館  
情報図書室

私の家より十分ほど東へ歩いた所に、平塚神社があり、その境内には、うつそうとしたイチヨウやケヤキが四季折々にその姿を変え、人々の心を慰めていきます。この神社への途中、ハナミズキを植えている家があり、それをながめるのが楽しみでした。冬の花芽も多く、花はもちろん大変美しいし、紅葉は何にも増して捨て難い風情があり、一年を通して美しい木はそうざらにはないとさえ思っていました。ところがある日そこを通って愕然としました。木がないのです。どんな事情があつたのか知るすべもありませんが、突然親しい友人を失つたような空しさを覚えました。常々ハナミズキによく似たヤマボウシには、強い愛着を持っていましたが、なかなか機会に恵まれず高嶺の花とあきらめていました。

ところが、とうとう今年、忘賀で描くことができ、うれしさを押えることができませんでした。

近くでみるヤマボウシの美しさは、長年慕っていただけのことがありました。やわらかく波打つ濃緑色の葉と、のびやかに開いた白い花（花びらに見えるのは総苞だそうです）は清らかで美しく、山法師という名もさわやかで、この花にはふさわしいと命名者のセンスの良さに感心していると、微かな葉ずれの音がしました。書く手を止めて、じっと聞き入ると、葉の陰に潜んでいたのでしょう、長い触角を振りながら、セスジツムシが、そっと顔を出しました。（大室君子）

新しい家庭科



1983年 8.9月号

老いを考える

〈巻頭言〉高齢化社会と平和の語りべ……………那須 宗一

\*老いを考える\*

高齢化社会がやってくる……………金谷千都子

歳のとりかた 母 近藤真柄を想う……………近藤 千浪

データにみる老後……………嶋田 道子

“老い”を支える経済―年金に強くなろう……………羽山 孝子

呆け老人と「ストローク」……………敷島 妙子

✓「まず、自分は何ができるか」ボランティア10年……………河 周子

\*新しい家庭科を創るために\*

✓小学校では 食品添加物問題と仮説実験授業……………福田三津夫

中学校では 糸から衣までの学習……………大森 嘉子

高等学校では ホームプロジェクトと学校家庭クラブ

入江 一恵、青木 郁子、町田 道子

大学では「家庭科好き」と言われる先生を……………佐藤 慶子

✓〈実践報告〉男女共修を目ざした「保育」の授業と考察(2)

……………梶原 公子

\*発言\*

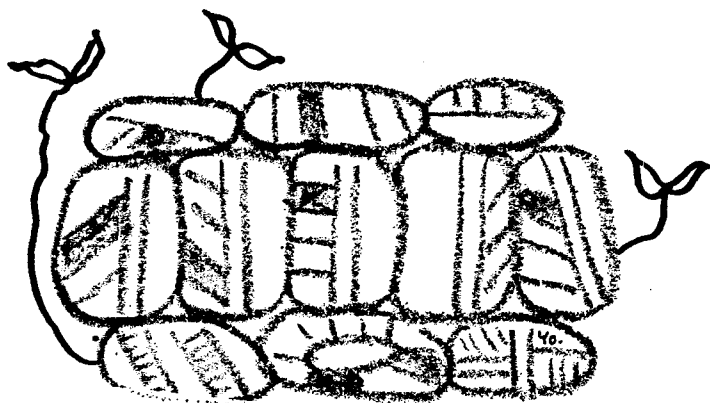
学習の主人公たち 小・中学生の創作コトワザ〈老人〉……………

私として “いま”を楽しむ……………飯野 こう

62 59 50 46 40 34 28 26 22 18 12 8 4

○Weになんでも言おう なんでも聞こう 70 ○ワイド版Weの会だより 80

○わたくしからあなたに 84



＊連 載＊

家族と老い……………村岡 洋子 64  
 “老い”をどう迎える—私の場合…山香 雅子 66  
 親も言いたい 子供の生活から制服を考える……………大隈 明美 68

野の花をたずねて やまぼうし……………大室 君子 1

視点 〈不条理とたたかう知恵〉……………長谷川 孝 54

靈通信 家の中の教室……………武田 秀夫 56

ねえ、きいて 家族を変えないとどうしようもない……………宮 淑子 58

つがるいろはがらた ②どんじさ めぐすり……………藤田 健次 72

銀輪のうた 死ぬまでの賭け……………栗原 実抄 73

団地の風景 ぶたもおだてりや木にのぼるウ……………遠藤 和枝 74

Weの読書室 わかり合うための努力……………横山 雅子 75

テレビ残像 女の目でみた中国……………野村 康子 76

ぼくのシネマガイド 『家族ゲーム』……………名取 弘文 76

○波 老いを考える—「楢山節考」から—半田たつ子 78

○新刊紹介 17 ○ひと 69

表紙デザイン 加藤由美子

目次イラスト 馬場洋子 本文イラスト 中野敬子／半田たつ子

老いを考える

## 高齢化社会がやってくる

金谷千都子



間違ひなくやってくるであろう高齢化社会——、身の回りを見渡しただけでも納得がいく。昔に比べて、何と皆長生きになったことか。それに反し、生む子ども数は少なく、一人っ子、二人っ子がざらである。この状態が続くと、三十年後の日本は、六五歳以上の老人が五人に一人ぐらいの勘定になり、これを生産年齢人口（一五〜六四歳）と比較すると、三人に対して老人一人の割合になるという。この点を個人の立場でみると、七五年か八〇年の生涯のうち、働いて稼げるのはせいぜい四五年間、その間に残りの三〇〜三五年の生活費を稼ぎ出さねばならないことになる。

はじめから、このような仕組みになっていればさほど大騒ぎする必要はないかもしれない。が、そうでないところに問題がある。また、これは世界中の特に先進国に共通する課題だといふものの、日本特有の問題が少なからずあることに注目したい。

それは、日本では高齢化社会がものすごいスピードでやってくるという点に集約されよう。近代化されて間なしのため、この施策も社会的蓄積も未完成であり、社会も個人も全力をあげて対策を急がないと間に合わないということ。加えて、日本社会にまだ根強く

残る「前近代性」が、この準備を妨げ、複雑にしそうなことである。つまり、家制度のもとで培われ、定着した社会の仕組みや人々の意識がいつこうに変革されないうちに、近代社会機構から生まれた人口高齢化の波が押し寄せてくる結果、問題を拡大しかねない状態になったのだ。

農業をはじめ、家内産業で成り立っていたかつての社会では、生産や消費など生活上のあらゆる機能が家庭にゆだねられ、老人介護や保健の機能も当然そこに含まれていた。「檜山節考」のような実態もあったが、一般にはそれが行えるだけの機能が家庭にも地域社会にもあったわけだし、何より経験豊かな老人の存在は、家や地域に必要なものとして尊重されもしただろう。

しかし、近代産業の発達、生産手段をもたない勤労者を生み出し、都市に人口が集まり、家庭のあり方、地域社会の仕組みを変えてしまった。核化した勤労者の家庭にはかつてのような生活上のさまざまな機能はなくなり、それらは社会的に分業されるにいたったわけである。労働の場と生活の場が切り離された現在、乳幼児や病人、老人の世話のすべてを家族が背負うのは不可能となってきた。

このように産業構造が変わり、社会の仕組みが変わっているのに、人々の意識がそれについていけない点に問題がある。老人のみとりは家族に帰する、それが望ましいという考えが根強い。しかも家族に帰するということの実態は、ひとえに女の肩に負わせるものだという点は、あえて述べるまでもないことだ。家制度のもとではぐくまれた男女の不平等、性別役割分業の図式が解消されていない現在、家庭の中の老いをみとるのは女の仕事とされる。そのため、女は三度老いを生きるといわれる。親をみとり、夫を介護し、そして、自らの長い老いを生きるのだ。

こんな話をするまでもなく、今や一人一人が自分の老いを思っ不安な気持ちにかられているのは確かである。その不安とは、老後が長くなったことによる。予測できない生活、何をよりどころに、何を楽しみに生きるかという精神的不安、そして深刻な経済問題、さらにいざ倒れたらだれが世話をしてくれるのか、という不安。この三つが多くの人に共通した不安要素であろう。

今迎えようとしている高齢化社会の問題点は、この不安が示している。平均寿命が延びたために老後が長くなったこと。定年後しばらくは再就職や趣味を生かして生活できる第一次老後があり、次はそれもままならなくなる第二次老後が訪れる。この「老後に老後がある」ということこそ、これからの高齢化社会の特徴といえよう。しかも、その老後はだれもがはじめて経験することだから、どうなるのか全くの予測によるしかないというのも厄介なことなのである。

これらの個人的不安要素の根底に、前述のような日本社会の特色からくる問題があるわけで、しかも、それに対する社会的対策がす

すんでいないどころか、逆に後退しかねない動きに多くの人が危機感を敏感に読みとっているのではないだろうか。

その点は、昨年九月に開かれた「女性による老人問題シンポジウム」の盛況ぶりが実証したと思う。参加申込みが定員数をはるかに上まわり、当日は、老いに対する数々の問題を抱えた女たちが、全国から続々とつめかけ、会場をその熱気で包んでしまった。

このシンポジウムは「家庭の中の老い」「老いを支える地域づくり」「なぜに貧しい女の老後」の三分科会と「女の自立と老い」を考える総合シンポジウムから成っていたが、それぞれのテーマごとに、その実態と問題点が浮き彫りにされた。たとえば、長年の介護の経験から、家庭で老人をみとるには三人の介護者が必要だとか、社会的な援助を受けたくても、実際に今必要だというときに間に合わない。あるいは、日本国民の多数を占める中間所得層は社会福祉の恩恵に浴せず、といって自費で介護者を求めることもできない。老人に対する日本社会のあり方の根底には、弱者切り捨ての思想がうかがえる、などなどである。

ここに参加した女たちの多くが、親をはじめ家族のだれかをみとった経験を持ち、そこからほと走り出る生の声は、まさにまもなくやってくる高齢化社会をいかに迎えるかの心がまえ、施策のもとになるものであった。「自分は精一杯介護した。しかし、個人の力には限界がある。今の状態では共倒れになってしまふ」「親をみるのが嫌なのではない。できないことがいっぱいある、そのことを確認し合いたい」という切々たる訴え、「自分は苦勞したことを悔いなが、この苦勞を娘や嫁には絶対させたくない。次代の女に同じ轍を踏ませたくない」という思いが、集まった女たちに共通のものだ

った。

ところで、このように女たちが訴える中に何人かの男性もまじっていたのだが、彼らからは切実な声がありません。数が少ないこともあったろうが、「老い」をわが身のこととしてどれほど感じているのか疑いたくなるほど熱意に欠けていた。この傾向は同様の場面でいつも感じることであり、男と女とは同じ「老い」の問題でもとらえ方が違うのではなからうかと思う。男はもっぱら自分の年金、老後資金に関心をもち、老いのみとりや自分の老後生活に対しては客観的な見地からしか、ものをいわない。

この女性によって開かれたシンポジウムをきっかけとして、ここに集まった女の思いをさらに発展させていくため、今年三月「高齢化社会をよくする女性の会」が誕生した。この会は高齢化社会における問題を調査研究し、情報提供、交換などをしながらより望ましい高齢化社会を提案、実現していこうとするものである。「老い」により多くかわる女の立場からの提言、行動に期待したい。

ともあれ、前述のように社会体質が改善されないまま高齢化社会を迎えようとしているとき、なさねばならないことは山ほどある。が、とにかく、自分自身の老いをどう迎えるか、その解決策を考えてみよう。

人はだれもが死を迎えるその瞬間まで、自由な精神を持ち続け、自らの生を自らの意思と力で選びとっていくことが幸せな生涯だと考える。老人が自由に生きられる環境、自主性を失わずに生を全うできる世の中こそ望むべき社会ではなからうか。しかし、現実の、とりわけ日本の現状は、効率主義が主流をなし、働けない老人、生産力となり得ない老人は弱者として位置づけ、社会のお荷物にさえ

しかねない。その証拠に、老人のリハビリテーションを積極的に受け入れてくれる施設が少ない。ましてそれが女の老人ならなおのこと、本人が家庭復帰のため、訓練を望んでも「むりをさせてはおばあさんがかわいそう」と体よく門前払いをする。「老人は家族がみてあげるのがいちばん」というやさしい言葉の裏には、お荷物はなるべく社会的機関から遠ざけ、個人にゆだねようとする生産性第一主義の思想が読みとれる。自民党政府がすすめるようにしている家庭基盤充実政策はその最たる例で、社会福祉の後退部分を家庭に押しつけるものである。この政策をすすめるのに家族制度時代の意識の残存が大いに手助けしている点は見逃がせない。

社会的施策、方針の上で解決すべき点も数々あり、年金をはじめ公的施設、ヘルパーなどの公的サービスの増加、充実がまずあげられるが、その考え方の基本には、人は生まれて後未成年時代を過ごし、成人となって社会を担う時代を経験、その後また生産の場から離れてやがて一生を終る。これだけの期間を通して人間の一生といえるのだから、老後まで含めた生涯を同じ重さで考える姿勢がほしい。老後はおまけではなく、あるべき姿として同価値にとらえるのが本来のあり方と思う。

とすれば、自力で生活しにくくなった老人を、家族内の問題として処理することが不可能な現状に合わせ、それを個人的な問題としてではなく、社会全体の問題、責任としてとらえ解決しなくてはいけないと認識すべきである。なかならず、女の犠牲の上に成り立つ解決法は真の解決にはならない。この点については、個人の意識を変える必要がある。福祉サービスを受けることに後めたさを感じないよう、公的サービスなどの利用が市民権をもつようにならねばと



思う。

次に、老後の暮らしを自由に選択し、自主的に生きるために、個人としてしておかねばならない点を整理してみよう。老後を豊かに、自らの力で選べる人生にするには、三つの条件を必要とする。

一つは健康の維持、二つには経済的自立、三つには精神の自立である。この三つが備わってはじめて、心豊かな楽しい老後が保証されるのだから、これが「老い」への準備であり、不安の解消となる。

第一の健康維持に関しては、特に男性に心してもらいたい。性別役割分業の中で生きてきた男性は、独りになったとき、自らの生命を維持する能力に欠ける。インスタントラーマンの食べ方がわからず、ポリポリかじっていたというおじいさん、缶詰があるのに栄養失調で死んでしまったなど、ウソのような本当の話がある。これは笑えない事実であり、妻に先立たれた男性は長生きしないというあわれなデータもある。長年犠牲を強いられた女の怨念といえなくもないが、これはあまりにもみじめではないか。人は自らの健康を管理し維持する能力くらい、若いときから心がけるべきで、女たちも男を早死にさせたくなかったら、みじめな老後を送らせたくなかったら、日ごろから炊事・洗たく・掃除の習慣を身につけさせるのが、真の愛情というものだろう。

二番目の経済的自立に関しては、逆に女の方が特に心がけなければならぬ。収入が少なく、ということは年金も少ない女たちが、老後自ら生きたいように生きるだけの経済力をもつのは大へんだが、ぜひこれは若いときから心がけて準備しておきたい。少しでも多い年金の確保、自分名義の資産を着々と築き、老後生活費を自力で作ってほしい。そうすれば、だれはばかることなく自分の生き方

を選択することができよう。

最後に精神的自立だが、これは男女ともに心がけてほしい問題だ。自立とは人に頼らず生きること、それは人に何かしてあげられる、あるいは人に頼られることで可能となる。それは生きがいの維持といっているかもしれない。仕事人間や教育ママなどは、職場を離れたら、子どもが独立したとたんに、生きがいを失くして急に老いこんでしまう。

そうならないためには、老いても自分が社会の中でこれだけ役に立っている、人のためになっている、と思える何かをもつことではないだろうか。自分も年をとったが、さらに目の弱い人のために新聞を読んで聞かせたり、話相手になるとか、幼児の相手をしたり、子どもに自分の特技とする英会話を教えたり、といったことで、自分の存在を自分自身が納得できるような何かをもつことが大切である。よく趣味があるから大丈夫という人がいるが、その趣味が社会的に価値を生むとか、役に立つものでないかぎり、やがてむなしなものになってしまうだろう。

以上三つの条件整備は、老いを目前にしてからではすでに小さい。おそくとも中期からの生活のありようが、やがて老いたときの生きがいを作り、経済的自立につながるはずである。老いからツケが回ってこないよう、日々、長い将来を自立して歩き続けられるよう心して生きていきたい。そして、個人の力の限度を超えるものは社会的に整備し、個人の努力を無にしてしまうような要因は排除するなど、社会のあり方にも目を光らせ、提言していくことが必要であろう。

（「高齢化社会をよくする女性の会」理事）

老いを考える

## 歳のとりかた

— 母 近藤真柄を想う —

近藤千浪



身内のことを書くのは、少々気のひけるものである。

自慢話にとられるのはいやだが、少しはいいところもみせたい気がする。親の欲目という言葉があるのだから、娘の欲目というのがあるのもいいだろう。多少ひいき目もあるだろうが、ひきだおしにならないように、母のことを書いてみたいと思う。

×

近藤真柄といってもご存知の方はそう多くはあるまい。だからまず大ざっぱなところの母の「経歴」を紹介することにしよう。

母は明治三十六年—一九〇三年、社会主義者堺利彦の娘として生まれた。

この年、母の父親は、日露戦争に抗して非戦論を唱え、勤めていた「万朝報」社を、幸徳秋水、内村鑑三氏とともに、紙上に退社の辞をのせて去った。母は病弱なその母親の死後親戚や知人の手に預けられ、その後、再婚した父のもとで育った。

明治四三年—一九一〇年、母が八歳の時、世にいう「大逆事件」が起る。

「東京四谷南寺町の父の家の床の間に、小じんまりした白い風呂敷

包みが五つ六つ並んでいた」と母は書いている。これが大逆事件に連座し殺された人たちの遺骨、遺品である。

『オーイまぐろ』と男の子が追っかけてきた。まがらなんておかしな名は魚と一緒にされるわけだが、年長の男の子に『お前んとこじゃ、天皇陛下を殺そうとしたんだぞ』とこずかれた。私はわからないままに、大それたことが自分の親の周囲で起こったことを感じた。殺すという言葉に刺激されて、私まで大悪党のかたわれのような気になって、大いに肩身せまく思っスゴスゴ家に引きかえしてきた」と当時を回想している。

母の幼児期の生活環境が想像できるであろう。

そして大正一〇年—一九二一年、母一八歳。日本で社会主義思想を標榜しての初の婦人団体「赤蘭会」を結成。「私どもは、私ども兄弟姉妹を無知と窮乏と隷属に沈淪せしめたる一切の圧制に断乎として反対するものであります」という綱領は母の書いたものだというから、ずいぶん元氣な血氣盛んな青春時代であったのであろう。同会は同年五月、第二回メーデーに女の団体として初めて参加、全員検束、拘留された。

母は「赤瀾会は短い寿命で、ろくな仕事も残さず、会員も未熟であつたし、批判される点も少なくないでしょうが、貧しく乏しい境遇から手を握りあつて起ち上り、今日では考えられない蔑視と迫害に耐えた人たちであることと、そうした事実を残したというだけで、『苦勞さまでした』と言葉をおくつていいと思います」と記している。

その後も軍隊赤化事件、出版法違反等で検束、獄中生活も体験している。

大正末期から昭和初期は無産婦人運動へと入り、市川房枝氏等の婦人参政権運動にも参画、昭和一〇年―一九三五年、大杉栄氏等の流れをくむ無政府主義者近藤憲二と結婚、三女の母となつた。

戦後はおもに日本婦人有権者同盟の会員としてその活動に加わつた。

X

ある人は、母のことを日本の社会主義運動の申し子とか、非戦・反戦平和の落とし子とかいう。母自身は、「父の運動にひきずられ、父のしてきたことは間違いないと思ひ、親の考えにさからわなひ、孝行娘」として運動に入った」といつている（孝行娘といへば、母の名前は、戸籍上マガラ。父親の訳した本の中の明るい家庭の、やさしい親思いのマーガレットという娘にちなんでつけたという）。

一九八三年のことし三月、八〇年の生を閉じるまで、母は堺利彦の娘であつた。本人は父親の年を超えてまでなお「娘」と呼ばれたことが時には重荷となり、時には反発もしたのであらう。「堺利彦の」とつけなければ通用しない半人前の人間で、「豚女・悪妻・愚母」の連続の女と言つていたが、「娘」であることを、恥じたことはな

かつたと私は思っている。

X

私は両親の年をとつてからの子供である。いわゆる世間でいう「恥かき子」の部類に入るのかもしれない。

だから、自分は早く結婚して、若い母親になりたいと考えたこともある。小学校のPTAで、母だけ年をとつていて、和服を着ていて、お婆さんくさくさいやだなあと思つていた。

戦後の母は、しばらく子育てを主としていた。

疎開先を引き上げて、父の友人が見つけてくれた小さなアパートの部屋には、家族と父の友人たち、言葉はわるいが「居候」のような人がいたり、入れかわりたちかわり人の出入りの多い家で、雑居家族であつた。

私共、娘たちに手がかからなくなつてから、ポツポツと、市川房枝先生や、藤田たき先生の日本婦人有権者同盟などの活動に参加をしていった。

私たちの教育には、両親ともうるさくなかつた。家庭では季節感を大切にしてきた。料理には旬のものをとり入れ、彼岸のおぼぎ、月見のだんご、しょうぶ湯、ゆず湯といった節目を大事にしてきた。礼儀作法もうるさくはなかつたが、人様にめいわくをかけるなとか、聞き苦しい、耳ざわりな言葉はたしなめられた。

母はまめな人であつた。自分が明日着たいと思つた着物は、夜なべをして縫ひ上げた。人様からみれば乱暴な仕立て上がりかもしれないが、結構本人は満足していた。私たちの子供のころもスカート程度はつくつてくれた。これもかわいい出来上りで、私たちもよろこんだ。

×

そんなわけで、私は自分の家庭が「主義者」の家であることなど、ほとんど知らずに育った。自分の祖父の存在を知ったのは小学校の教科書である。

まったくぼんやりしていたのにあきれるが、「今日、おじいちゃんの名前を先生がいつてたわよ」と母に言った覚えがある。

母は、おじいちゃんや、おばあちゃんの話はしたが、特にそれが社会主義とか運動とかいうものではなく、生活の中で話であり、母がそうであったように、私たちもそれがごく自然に生活のなかに入ってしまったようだ。ことに昔のような弾圧などがない時代だからごくあたりまえの家庭であったのだ。

それでも、時には父や母の話や家に入出入する人の会話を聞きかじり、門前の小僧が習わぬ経を読むように、私もなまいきに、政府や、政治の批判をしたようだ。

だから父親は、私を呼ぶときに、「おい、社会党！」とからかった(蛇足ながら言うておくが、今の社会党ではなく、私の子供のころの社会党であり、反体制の代称としての社会党なのだ)。私は小バナをふくらませて、自慢げな顔をした。

×

昭和三〇年代のはじめから四〇年代の前半は、母の養母、私たちのおばあちゃんの「ボケ」と死、父が脳溢血で倒れ、十二年程の療養生活からの死と相次いだ。母は二人の看病のあいまにも、有権者同盟の活動にも参加していた。戦後の母の苦しい時期であった。

母は「老いと病気は自分で選べるものでないから仕方がない」といいつつ、自分が寝たきり老人になることをおそれて、安楽死協会

の会員になったりしていた。

×

父の死のあとは、私どもも一応社会に出たし、姉二人も結婚したので、ある程度の自由を得て、お芝居を楽しみ、よく旅もし、食歩きもした。

しかし、やっぱり長い間の先輩や友人を想う気持は強く、いやそれが少し長く生きた者のつとめと想っていたのであろう。「大逆事件の真相を明らかにする会」や、大杉栄氏とともに殺された「橘宗一少年の墓碑保存」のための努力、赤瀬会の同志緒方貞代さんとの五〇年ぶりの対面、かつての同志の墓参や有権者同盟の旧い会員で病床におられる方々を見舞いなどに時間を使っていた。ひざをいため杖をつき、自分にも付添いがあるような身体なのによく出掛けた。

×

母の死後、早や三ヵ月。母の雑物を整理していたら、新聞の折込みチラシ広告のうらにこんなことが書いてあるのをみつけた。

「全く瞬く間にといていいほどの間に、歳をとってしまった。

いや年が経ってしまったのである。と同時に高齢化社会になっていわれ、またそれを聞いたたびに、申しわけのなさに居たたまれない昨今である。ことに盛年六人の肩に、老人一人の負担がかかっているというので、自分の子供三人と、その連れ合いをふくめても、なお不足で、人様にオンブしなくてはならないのだから、誠に申しわけのない一語につきるのである。安楽死が法律上認められるか、『檜山節考』が復元されれば現在の悲惨事は減少するであらうと考えつつ、一方先輩がいられて元気で訓えて頂いてい

ると、敬服しつつ、頼りすごることが出来て、安心出来るのであった。自己中心の甘えであらうか。

一昨年からの矢次ぎ早やの先輩の死に直面すると、当惑呆然としてしまふ。悲しみ、寂しさだけでなく、生きて行く綱が、みるみる細り、擦り切れんとするさまを目前にみるのだから、深刻である。一時代の終りというなかに、無為無能なすなし能わざる残骸を徒らにさらすのは、壮年者にはお解りになるまいと思う。

故郷を持つ人は望郷の念をお持ちだが、精神的望郷は、先輩友人であり、その死である……。」

もう一つ

「誕生日を迎えた日に書いておこうと思ひつきました。ながながお世話になりました。健康に氣をつけて、健全に生きて下さい。

私は余り上手でない、早くいえば下手な暮らし方をしましたから、見習ったら困ったことになるでしょう。不勉強で怠け者で妙に氣取って、世の中の為とか、社会豪華の為とか、婦人の解放とか思つて、力不足は知りつつ出来るだけ、それに向つて邁進しようと氣負つたところがありました。それだけは、純粹、ひた向き、一途という氣持ではありましたが、その力は十分あるわけではなかったのです。それだけは、その当時は懸命にやつたというか安心というか喜びでありましたが、それはあくまで自己満足であつたと思ひます。結局それに甘えて凡てが中途半端でありました。

職業というべきものがなくて、一芸に秀いすることなく、常識もアンバランスであり、考え方はいく分進歩的でありながら、趣味は古風であるなど。

これであるから楽しみもあり、楽でもあつたのでありますが、

それだからこそ、謂ゆるモノにならなかつたといえます。

一つの形、前車の撤として、考えて生活して下さい。」

前文は、山川菊栄、市川房枝両氏に続いて荒畑寒村氏が亡くなられたときの追悼のはしがきであらう。後文は二、三年前に私たち子供に書き残そうとしたもののようだ。

死の一年半程前、母は脳こうそくという病名で発病し、私の姉の家で寝たりおきたりの生活をしていた。発病するぎりぎりまで母は外出をつづけていた。姉の家では孫たちにかこまれて、静かな幸せな生活であつたが、本人はそれを感謝しつつも、世話になることを困つたな、失敗したなと思つていたようだ。

ことし三月、母は八〇歳で逝つた。

すいこまれるような静かな死であつた。

大きく花を咲かせる人生もあるだろうが、母は、母なりの、母にふさわしい死であつたと思つてゐる。

通夜の夜、「こういう時に僕はこんなことしか出来なくて……」と、弔問にきて下さつた方々にひびきをそろえてお茶を出していた、小学校卒業を前にした孫。黙々と玄關のくつをそろえていた孫娘。おばあちゃん「精神」はうけつがれてゐるなと思つた。

「捨て石・埋め草」たらんとした母の一生に「ご苦労の多いことでした。報われることの少ない一生でした。でも決してふしあわせではなかつたですよ。ね。お母さん。」

多くを語らなかつた母に思ふことしばしばである。

「歳のとりかた」——本人が下手な生き方といつてゐるのだから、それ以上言うこともないのだが、一人の女の生きてきた道、何かのご参考になれば幸いである。

老いを考える

# データにみる老後

嶋田道子



表 1 世界でも有数の平均寿命 — 国際比較

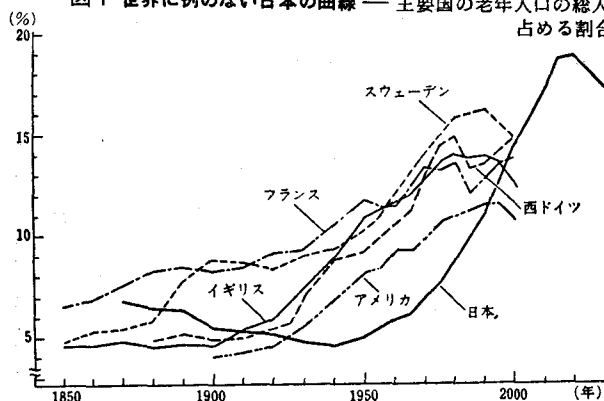
国名	年次	女	男
日本	1978 年	78.33 年	72.97 年
アイスランド	1977—78	79.3	73.4
スウェーデン	1977	78.50	72.37
オランダ	1977	78.4	72.0
ノルウェー	1975—76	78.12	71.85
フランス	1977	77.85	69.73
アメリカ(白人)	1976	77.3	69.7
イングランド・ウェールズ	1974—76	75.8	69.6
ドイツ民主共和国	1969—70	74.19	68.85
ソ連	1971—72	74	64

資料出所 厚生省統計情報部「昭和53年簡易生命表」、アイスランド統計局

◆猛スピードをすすむ日本の高齢化  
65歳以上の老年人口の総人口に占める割合は、日本はまだ中位にあるが、今後猛スピードで増えつづける、二〇二〇年には、世界一の

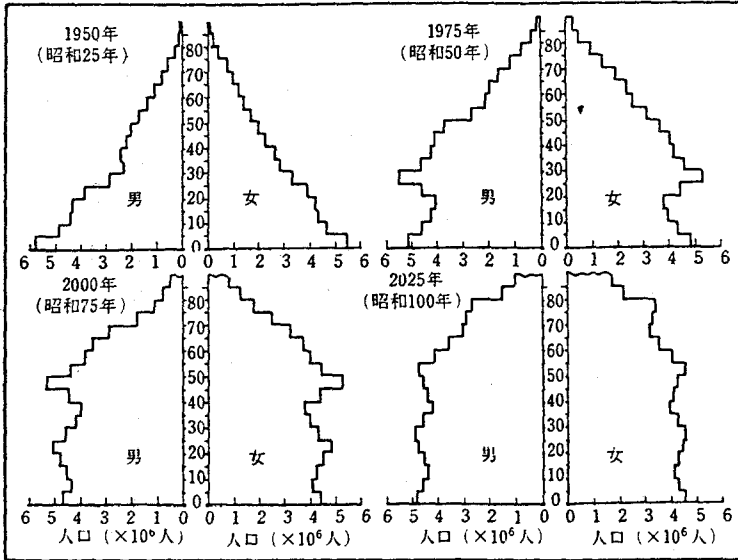
老人国になる(表1・図1)。  
◆21世紀はおばあさんの世紀  
図2は五歳段階で区切った人口構成図。昭和七十五年から一〇〇年にかけては、おばあさん人口の方がおじいさん人口より多い。現在でも、八〇歳以上になると、おばあさんはおじいさんの二倍である(表2)。

図 1 世界に例のない日本の曲線 — 主要国の老年人口の総人口に占める割合の推移



資料 年金制度基本構想懇談会「報告(54.4)」参考資料より引用。

図 2



◆増加している高齢者単独世帯  
行政や銀行では「三世代同居」のキャンペーンを張っているが、

現実は一

老人だけの世帯、老人のひとり暮らしが増している(表3)。

表 2 我が国の65歳以上人口

		総人口	う ち 65 歳 以 上 人 口					
			65歳以上	70歳以上	75歳以上	80歳以上	85歳以上	
人 口 (万人)	男女計	11,692	1,058	664	364	162	53	
	女	5,943	611	390	221	103	36	
	男	5,749	447	274	143	59	17	
総人口に対する割合(%)		男女計	100	9.0	5.7	3.1	1.4	0.5
性 比 (女 100 人 当 たり 男 の 数)			96.7	73.2	70.3	64.7	57.3	47.2

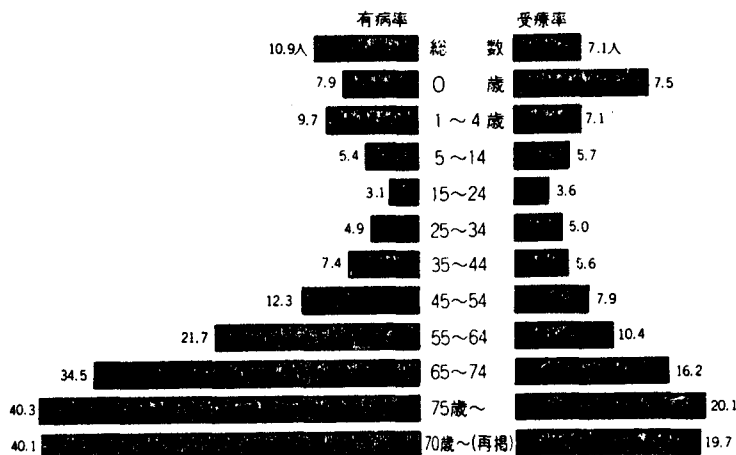
資料 「国勢調査」昭和55年

表 3 高齢者の子との同別居推移

		(65歳以上男女計)				(%)
昭和		35年	40年	45年	50年	35年→50年
65歳以上人口		100.0	100.0	100.0	100.0	—
子らと同居		87.3	84.8	79.9	75.5	- 11.8
子 夫婦のみ と 非親族と 別 単独世帯 居 準 世 帯		7.0	8.5	11.7	13.9	+ 6.9
		0.2	0.3	0.3	0.4	+ 0.2
		3.8	4.3	5.3	6.8	+ 3.0
		1.7	2.1	2.8	3.4	+ 1.7

(出所) 総理府「国勢調査」

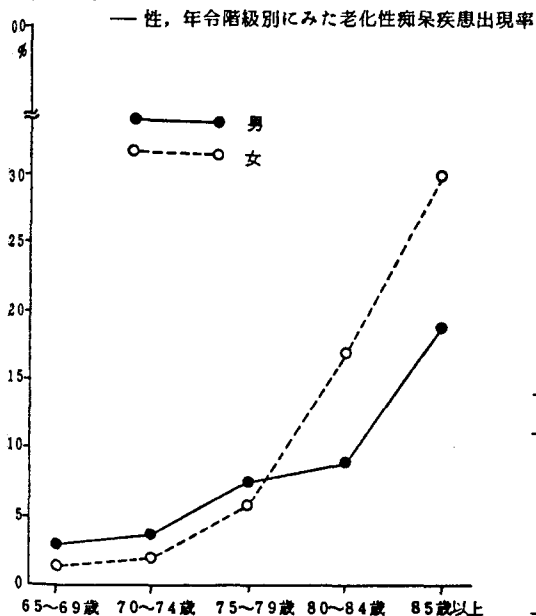
図3 年とともに増える病気 —  
年齢階級別有病率と受療率（100人当たり）



資料 「国民健康調査」昭和54年、「患者調査」昭和54年

◆老人のひとり暮らしは、おばあさんが圧倒的に多い（表4）。  
◆老いと健康  
いくら健康に気をつけていても、年齢とともに身体は弱くなる。  
60歳以上の老人の三人に一人は傷病を訴えている（図3）。

図4 女が多いボケ老人



◆いとしきは老い？  
ボケ老人は推定四〇万人。それも女性が多い。いつまでもボケないためには、なるべく現役人生を送ることだ（図4）。  
◆ねたきり老人は五〇万  
そのうち三〇万は家庭で女性たちに介護されている。この数字をきいて外国の福祉関係者は驚くそうだ。

表4 65歳以上人口の配偶者の有無別割合  
(単位：%)

		有配偶	死別	離別	未婚
女	65歳以上	35.7	60.1	2.4	1.3
	65～69歳	51.7	43.2	3.0	1.7
	70～74	38.1	57.8	2.2	1.3
	75～79	24.5	71.9	2.1	0.9
	80～84	12.8	84.1	1.6	0.8
	85歳以上	5.4	91.4	1.7	0.8

資料 林玉子「老人福祉施設と住居」

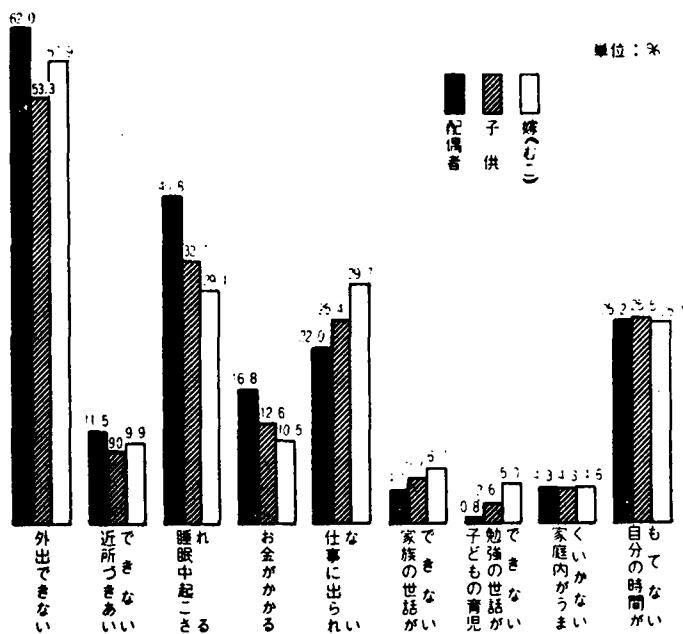


表5 わたきり老人の性別と介護者の続柄

介護者の続柄 わたきり 老人の性別	配偶者	子 供	嫁・むこ	孫	親 族	その他
男	61.0	10.8	21.7	0.8	1.0	1.5
女	11.4	27.7	50.4	2.7	2.2	2.8

資料 「老人介護の実態」

図5 時間のないのがなやみ — 介護者の続柄別にみた生活上の影響



資料 全国社会福祉協議会全民児協「老人介護の実態」昭和54年3月

◆高年女性の経済実態、頼みの綱は子ども  
総理府老人対策室の調査でみると、65歳以上の女子で収入のない人が四割以上を占めている。収入のある人はその過半が公的年金によるものである。女子老人世帯の最多収入者は、子という人が最も多い。  
(婦人の現状と施策 昭55)

◆女は老後を三回生きる  
介護は家事責任を負う女の肩にのしかかる。舅姑、自分の親、つぎに夫、そして自分の老後と、女は老後を三回生きる(表5)。

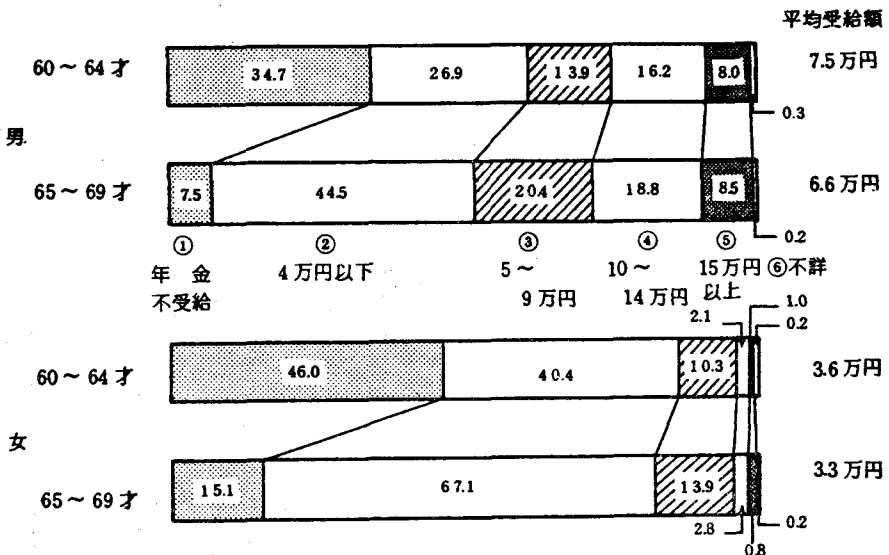
◆介護者の悩み  
「女がみとるのが当然」という社会風潮が女の心や自立を貧しいものにしていく(図5)。

表6 年金受給額の実態

項 目	5 6		5 7	
	7.8%		4.0%	
	年 額	月 額	年 額	月 額
〔厚生年金〕	円	円	円	円
平均年金額	1,296,000	108,000	1,340,400	111,700
55年改正時モデル年金 (30年加入・夫婦)	1,745,900 (基本1,565,900 加給180,000)	145,492	1,809,800 (基本1,629,800 加給180,000)	150,817
障害年金・遺族年金 (最低保障額)	540,700	45,058	562,800	46,900
遺族年金 (2子・最低保障額)	870,700 基本540,700 寡婦210,000 加給120,000	72,558	892,800 基本562,800 寡婦210,000 加給120,000	74,400
〔国民年金〕				
10年年金	343,500	28,625	357,500	29,792
5年年金	292,400	24,367	304,300	25,358
25年加入(単身)	543,300	45,275	565,500	47,125
障害年金(1級)	675,900	56,325	703,500	58,625
(2級)	540,700	45,058	562,800	46,900
母子年金	720,700 母子540,700 母子加算180,000	60,058	742,800 母子562,800 母子加算180,000	61,900

② 56年9月末の全受給権者の年金額の平均額(相当額)を受給している夫婦を想定し、これをスライドしたものである。

図6 性・年齢階層・年金受給及び受給年金額別構成比



資料：労働省：「高年齢者就業等実態調査」（昭和55年12月）

図 7 仕事をしている者の性・年齢

性	男		女			
	71. 2		28. 8			
( 1, 456 )						
年齢	65 ～ 69 歳		70 ～ 74 歳		75 ～ 79 歳	80 歳以上
	54. 5		28. 4		11. 7	5. 4
( 1, 456 )						

◆老後とお金

厚生年金のモデル年金は勤務時の約四〇％。我が国の年金制度はその成立基盤から八つに分かれており、年金額も開始年齢も格差が大きすぎるということが問題（表 6）。

◆貧しい老後

モデル年金は高いが、現実の受給実態は男性六万五千円、女性三万三千円（65歳以上）。厚生年金受給だけに限ると、男性約一四万円、女性九万八千円（図 6）。

◆男の老人の年収は平均二九八万、女九〇万（東京都の場合）

◆男の老人の収入源は多角的だが、女の老後は年金が中心。財産設計は若いうちから多角的に始めることが肝要。

◆老いても仕事をしているのは男性。それも高学歴の人ほど多い（図 7）。



★『非戦を生きる アレシヤ』 高良とみ自伝

ドメス出版 価一七〇〇円

戦後初めて鉄のカーテンをくぐり、竹のカーテンの向こうを見てきた婦人議員として知られる高良とみ氏は、今八十七歳。地の底からの平和を願い、今でも必要とあればレーガン大統領であろうと、中曽根首相であろうとどんな批判の手紙を書く。平和のために一国の首相とけんかをしていると思うと愉快ですらある、という。「私が尊敬する人は、ガンジールとタゴール、親友はネールと李徳全女史」と語るけた外れのスケールの大きさ。平塚らいてうは女子大の先輩だが、男性と問題を起こされたりして、どうも性に合わない。いまだにあの人のどこがよいのかわからないという卒直さ。

アメリカ帰りの鉄道技師を父に、群馬の豪農の娘で婦人運動家でもあった人を母に、日本女子大からアメリカ留学。博士号を得て帰国後は九州帝大助手を経て日本女子大教授に、戦後は参議院議員——類いまれなエリートコースを歩んだ人の、その行動力と、思想の根幹がこの本で明らかにされた。柘植恭子氏は「恵まれた境遇と恵まれた体力とによる楽観主義に裏づけられた、素朴とも言える人間への信頼と愛」と解説する。公人としての高良氏の輝かしい活動の源泉をここに見た柘植恭子氏に共感する。

また次女である詩人高良留美子氏の「妻として母として」——内側から見た高良とみは味わい深い名文で、ほほ笑ましいエピソードと共に、限りなく惹きつけられた。

（半田）

老いを考える

## “老い”を支える経済

羽山孝子



老後の経済保障を語ろうとするとき、いつも、少しばかりとまどってしまいます。それは、まさにいま老後に入ろうとしている人と、十年ぐらいい先の人と、二、三十年先の人では、ずい分状況が違ってくるのが予測されているからです。

年金の中心になるのは公的年金ですが、国民のすべてが公的年金の恩恵に浴せるようになったのは、昭和三十年代からです。したがって、老齢年金にしてもまともに受け取れる人が非常に少なかったのです。厚生年金も国民年金も、様々な例外規定を設けて、ある年齢になったらだれでも年金がもらえるように制度が作られました。

そしてその後給付額は五年ごとに見直され、経済の高度成長などもありましたので、物価スライド制なども取り入れられました。そのため、年金の給付水準（モデル年金）は欧米の先進諸国なみになると、一部専門家たちの鼻を高めたものです。

それはそれでよかったと思います。たとえば、いま七十代以上の人たちの中には、ほとんど掛け金を払うことなく、年金をもらっている人もたくさんいます。もっとも額はごくわずかですが、もらわないよりよいでしょう。また、厚生年金の遺族年金は、夫が老齢年

金をもらうようになっていけば、その五割。在職中の死亡の場合は、六ヵ月以上加入していれば、二十年加入していたものとみなして計算し、その五割が妻子に支給されるようになっていきます。

この五割という給付額も決して多いものではありません。しかし、最低限度額が設けられていて、この限度額も引き上げられてきましたので、現在では平均すると七割給付ぐらいになっています。

もちろん、いま年金を受けている人のすべてが、十分な額を受けているとは思っていないでしょう。もっともっと充実してほしい点もたくさんあります。ところが、規定通りに公的年金の受給資格を満たして年金を受け取る人が増えるにつれて、年金財政はひっばくしてパンクしてしまうことになったから大変です。

ここには、経済の低成長、高齢化社会の問題などがありますが、受給する側から簡単に言ってしまうえば、行政のお粗末という以外のなものでもありません。したがって私たちとしてはその点も究明しなければならぬのですが、ここではまず「このままではパンクする」という現実からスタートしたいと思います。

このままではパンクするのですから、パンクさせないためには、

受給年齢の引き上げ、給付水準の引き下げ、保険料のアップなどが考えられています。すると、あと数年後に老齢年金受給予定の人には、受給年齢の引き上げなどしないでほしい、年金額を減らすなどもつてのほかと考えるでしょう。一方、いま働き盛りの人たちは、保険料の負担増について、とんでもないと考えます。

これは、いわば世代間の対立とでもいうような問題で、これをスムーズに解決し、“年金”を世代を越えて共通のものにするにはどうすればよいか、ということは公的年金の大きな問題点です。

わが国の公的年金にはあと二つの大きな問題点があります。一つは、いわゆる官民格差といわれる制度間の不公平、もう一つは、制度によって世帯単位になっているものと個人単位になっているものがあること。とくに世帯単位は、夫（男）が一家の働き手として考えられているしくみだということです。

前者については、詳しい解説や問題提起はしませんが、有利な共済年金には手をつけず（国鉄共済の問題がありますが）、厚生年金と国民年金の総合から始めようとしている国の態度は、多くの国民には納得しがたいものがあります。公的年金の全加入者の約八割が、厚生年金か国民年金の加入者なですから、この問題についてもっと関心を持ち、行方を注目しなければならいでしょう。

公的年金がもっとも矛盾に満ちているのは、後者の問題です。

たとえば、先ほど述べた厚生年金の遺族年金の給付は、残されたのが妻子である場合、条件はありませんが、夫子の場合は、夫が六十五歳以上であるか高度障害者であることという条件がついています。たしかに、これは日本の実情に合った規定かもしれせん。しかし、夫であれ妻であれ、既婚者であれ独身者であれ、一人一人が

自分の年金をもち、老後や、万一障害者になった場合公平に保障されるというのが、本来のあるべき姿ではないでしょうか。

また、厚生年金は世帯単位なので、夫が厚生年金などに加入しているサラリーマンの妻（専業主婦の場合）は、公的年金に加入しなくてもよいことになっています。しかし、このような制度のもとでは、離婚した妻は公的年金から見離される恐れがあります。

そこで、サラリーマンの妻は個人単位で構成されている国民年金に任意加入できることになっています。つまり、入りたいなら入りなさいというわけです。そうすれば自分の年金が持っているので離婚しても大丈夫だし、仲良く老後を迎えれば、夫婦二人で三分の年金がもらえるというわけです。

事実、サラリーマンの妻の国民年金の任意加入はメリットが多く、一時期盛んにPRされましたので、その約八割が国民年金に任意加入しているといわれます。

たとえば、厚生年金の遺族年金は、厚生年金に加入していた人（ただし夫だけ）が死亡した場合に出る年金ですから、妻の年金には関係なく出ます。一方、国民年金には遺族年金はありませんが母子年金というのがあります。これは夫が死亡したとき、妻が国民年金に入っていて、扶養中の子どもがいるときに出る年金です。

したがって、サラリーマンの妻が国民年金に加入していると、万一夫が死亡したときには、夫の厚生年金から遺族年金が出て、自分の国民年金からは母子年金が出るのですから、加入する方が得というのも当然です。

しかし、これでは同じ公的年金でありながら、夫婦ともに国民年金で母子年金しかもられない世帯との差が大きすぎるというので、

もともと両方もらう場合は、母子年金が一部カットされていましたが、前回の年金改定のときから、母子年金だけの場合は一定額が加算されるようになりました。このような改定は当然といえはいえ、かもしれませんが、非常に場当たり的といえないでしょうか。

同じ国民でありながら、妻となった女性は、夫が自営業などで国民年金加入者の場合は、国民年金の強制加入者となるが、それ以外は、厚生年金や共済年金に適用されている組織で働いていれば、自動的にそれらの年金加入者になるが、そうでなければ無年金でもない、といったあいまいで宙ぶらりんの場にあるということです。

また、働いている妻は、自分の老後の年金は確保できるが、万一途中で死んでしまった場合は、夫の場合とは違って自分の子どものために益することもなく、掛け捨てになるという不公平な場に立たされているわけです。

このような女性の年金権の不公平・不合理な点は、今後の年金財政の問題とともに検討され、改定されていくことは間違いありません。たとえば

①すべての女性が年金を持てるようにする

②若い妻、子どものいない妻に遺族年金を支給しない、あるいは一部カットする。反対に高齢の妻、未成年の子を扶養中の母子には年金を厚くする

といった方向での検討がいまなされているようです。

①については当然でしょう。②については多くの問題を含んでいます。たとえば、ただ単に夫が死亡した場合の遺族年金を厚くするというのでは、役割分担の強調になりますし、一方、遺族年金をカットするには、女性の働く場の問題があります。したがって、遺族

年金の将来あるべき姿をはっきりさせ、そこへもっていくための段階的措置をどのようにしたらよいのかということを、女たちが考え、女たちが発言していかなければならないでしょう。

なお、これは巷間に流れる話にすぎないと思いますが、夫も妻も働いて、両方がそれぞれの老齢年金をもらうようになったら、どちらかの年金をカットする、といったような話があります。

まさかこのような決まりはつくらないと思いますが、働く女性が年金問題に無関心でいると、まさかと思うことも、まさかでないこともありうるかもしれません。

以上は、公的年金がいまかかえている問題点を簡単に要約してみました。公的年金にはさまざまな規定がありますので、それをよく知って、損をしないハウ・トウも大事ですが、制度としては未熟で、矛盾点の多いものですから、それを是正していくことも大変重要なことです。

では最後に、まもなく老後を迎える人のために、老齢年金の受給資格や条件について必要なことをいくつか述べておきましょう。

#### 老齢年金受給に必要な加入期間

##### ●厚生年金だけの場合Ⅱ二十年以上

ただし二十年未満でも、男子では四十歳以後の加入期間が十五年以上あるとき、女子では三十五歳以降の加入期間が十五年以上あるときは特例として認められます。

どういふことかという点、これまで勤めたこともなく、またサラリーマンと結婚したので、何の公的年金にも加入していなかったが、三十四歳から近くの工場にパートに出て、初めて厚生年金に加入し、五十一歳まで働いたとします。この場合、厚生年金の加入期

間は十七年で、二十年には足りませんが、三十五歳以降の加入期間が十五年以上になるので、受給資格があるということになります。

●国民年金だけの場合Ⅱ六十歳までに二十五年以上

ただし、国民年金では昭和六十一年にならなければ、国民年金だけで資格を満たす人は出ません。したがって現在はずべて加入期間短縮の特例でもらっているわけですが、それに適用される人は次のような人です。

昭和四年四月二日から五年四月一日までに生まれた人は、加入期間は二十四年でよい。それより前に生まれた人は、四月二日から翌年の四月一日までを単位として、加入期間が一年ずつ短かくなっています。

たとえば、国民年金は六十五歳からもらえますが、今年の四月二日から来年の四月一日までに六十五歳になる人は、大正七年四月二日から八年四月一日までに生まれた人です。この人たちは加入期間が十年あればよいということです。

●厚生年金と国民年金を合算する場合Ⅱ二十五年以上

公的年金に加入していないサラリーマンの妻は、その婚姻期間を国民年金に加入していたものとして認められます。ただし保険料を払っているわけではないので、これを「カラ期間」といいます。そして、たとえば結婚や出産前まで勤めていて厚生年金に数年加入していた場合、その年数とサラリーマンとの婚姻期間（カラ期間）を合わせて二十五年以上あれば、厚生年金の分の受給資格ができます。

年金は受給資格があっても請求しなくてはダメ

年金は受給資格があっても請求しなければなりません。

厚生年金は、住所地または最後に勤務した事業所を管轄する社会

保険事務所所定の手続きをします。国民年金は市区町村役場で

す。

厚生年金は資格期間が足りなければ任意継続できる。

たとえば五十五歳で退職することになったが、これまでの加入期間が十九年しかなかったという場合、退職後六ヵ月以内に、本人の住んでいる住所地の社会保険事務所に任意継続の手続きをすれば、足りない一年分だけ継続することができます。この場合は、保険料は全額本人負担になります。

国民年金の繰上げ支給は長い目で見ると損

国民年金の受給年齢は六十五歳からです。しかし、希望すれば六十歳からもらえますが、この場合は支給率が次のようにカットされます。

六十歳では年金支給率五八％、六十一歳Ⅱ六五％、六十二歳Ⅱ七二％、六十三歳Ⅱ八〇％、六十四歳Ⅱ八九％。

そのカット率は生涯続きます。したがって、たとえばいま六十歳の人の平均余命は約二十二年となっていますが、その間ずっと自分もらえるべき年金額の約半分しかもらえないということになります。

計算によれば、六十歳からもらった場合、七十二歳までは、六十五歳からもうより得だが、それを過ぎると、どんどん開きが出てきます。長い老後を少しでも豊かにするには、繰り上げ支給は損ということになるでしょう。繰り下げ支給もあり、この場合はもちろん支給額は一〇〇％を越えます。

(フリーライター)

老いを考える

## 呆け老人と「ストローク」

敷島 妙子



私は「呆けを看とって」という題で、以前半田さんが編集されていた『家庭科教育』の80年九月号に書かせていただいたことがありますが、それは私が呆けた舅の介護記録を世に出してから三年たち、「呆け老人を抱える家族の会」という全国組織が生れた年でもありました。

当時は行政や福祉だけでなく、医療の面でさえ、呆けに対しては何も手をつけられていない状態でしたから。家族は全く孤立無縁のまま塗炭の苦しみを味わっていました。

医学の進歩が目覚ましい中で、なぜ呆けへの対応だけがこんなに立ち遅れていたのでしょうか。素人判断ではありませんが、精神科の専門の先生方も、脳器質の萎縮や変質、それに極度の老化など、病理学的生理学的な要因だけが呆けのすべてのように解釈され、この二つともが現代医学では治療困難な、ほとんど絶望的なものと考えておられたのではないかと思います。中にはほんの極く一部の先生方は、この一次的要因の他に、環境や人間関係の影響を受けて重症化することに気づいて、その要因の改善があれば、かなり軽くなることを説いておられる方もあったのですが、それが大勢を占めるには

ほど遠い状況でした。

私はたまたま幸いなことに、呆けた舅をひきとって一ヵ月たったころ、この極く一部の先生の主張を信奉する新聞記者の連載記事に接するという機会を得ました。

もちろん舅を引きとった直後は、全く五里霧中の状態でしたが、元氣なころの舅とはあまりにも変わり果てて、廃人のようになっただけありさまを見た瞬間、直感的に感じるものがありました。

光のない目に淀んだ孤独感。長い人生の間に培い保って来た機能や記憶を失っていく喪失感、家族の仲間に入れてもらえないための疎外感、そして誇りを傷つけられ、厄介者として扱われることになった絶望感や劣等感、そういうもろもろの感情が、極度のうつ状態にのめりこませているのではないかと思われたのです。

この直感は当たっており、後になってわかったことです。が、要するに呆けの症状の中には先ほどの一次要因と二次要因が一人一人さまざまな割合で混在していて、どうやら二次要因によって重症化した部分が、かなり多いように考えられるのです。つまりこれは心理学の分野に類する問題で、どちらかと言えば医療よりは介



護の問題であったのだと思います。だからこそ、一日中患者の心の動きを見つめる立場にない医師にとって、「呆け」を深く識り考えることが立ち遅れたとしてもいたし方がなかったのだとうなずけました。

私はこのような直感から、せめて人間らしい笑顔くらいは呼びもどせぬかという願いをこめて、話しかけ、スキンシップなどにつとめてみたのです。それが思いもかけぬほどの素晴らしい効果を見せ、十日目ごろまでに、笑顔も言葉ももどり、嚙下障害や歩行困難なども治り、一番困っていた失禁までが、毎日五、六回以上十回という状態から、五、六日に一回というほどにまで遠のいていったのです。呆けについて無知であった私たちはそれを奇跡のようにさえ思ったものでした。

こんな喜びの中で、先にのべた新聞連載、「呆けが治る」を読んだのですから、これ以上のタイミングはありませんでした。もし呆け症状にふり回されて疲れ果てているような時でしたら、「そんなバカな！」と思って容易には信じられなかったかも知れません。

でも私は自分の手さぐりでの奇跡に喜んでいるその時でしたから、「やっぱりそうだったのか」と大きくうなずくことが出来、お墨付きをいただいたようなうれしさでした。

そしてその後の介護生活の中で、一人の呆けの中に、たしかに治せる部分と治せない部分があることもはっきりわかって来ました。我が家の舅の場合は、失語失認無為などのうつ状態や、衣服の着脱、歩行、入浴などに介助を必要としたこと、それに失禁や失禁時の乱暴などはうまく治ってくれましたが、物忘れや新しいことを覚え込む能力は回復できませんでした。一年後余病で亡くなるまで、

私のことをどうしても認識できないままであり、我家の間取りも覚え込むことが出来ず、繰返しトイレをさがして歩くことが続きました。これはおそらく脳軟化症のため本当に脳細胞がやられてしまった部分なのではないかと思っています。

こんな体験をした私は、それがたとえたった一つのケースではあるにしても、あまりに強烈な印象をうけたために、「呆けの中には治し得る部分が大なり小なりあるに違いない」という考えを捨てることができませんでした。

でも「家族の会」を組織した当初は、先生方でもまだ疑問に思われる方々もあって、総会の席などではしばしば論争がおきました。

呆けが治るなどとは考えられない。いたずらに家族に希望をもたせるのはかえって罪悪ではないか。それより重要な社会問題として行政に訴えるべきだ

。人が老いるためには避けられない老化現象であるから、そのまま受容して温かく人生の最期を看取ってあげるべきだ

。いや完全治癒は望めなくとも、正しい介護によって、症状を緩和したり、進行を食いとめるよう希望をもって当たるべきだ

というような考え方に大別されるのでした。もちろん私は第三の考え方を支持し、老人を心理的に解放し、幸せを感じてもらおうよう努力して、ついでに介護者もお世話がし易くなり、介護のはりあいも生まれるこの道を選んだ方が賢明ではないかと主張しました。

実際、絶望的な気分でイライラしながら失禁の後始末などするより、優しく言葉をかけたり、残っている力を引き出して褒めそやしたりしながら、お互にニコニコ暮らす方がずっと幸せであるように

思えたのでした。

それでも第一の考えも、社会に訴えるという点では大切だと考え、厚生省に押しかけたり、支部活動の中でも、活発に県や市に働きかけております。

それは呆けの中には、非常に難しい重症の呆けもあるわけですし、家庭の事情などから、どうしても社会的な援助の欠かせない場合もあるからです。それに家庭で看る場合も、一時的に支障の起こることもあれば、疲労の重なることもあり、そうした場合は、やはり何らかの手を打っていただかねばなりません。

それにいざという時に、社会的受皿があるとはいえず、普段の介護の心に大きな差が生まれます。介護に重要な意味をもつ呆けについては、介護者の心理も又重要に考えねばならないからです。

会の結成以来三年余り、社会的施策も除々に実現されはじめましたが、何よりうれしいのは、身近な会員の中に、私と同じような喜ばしいケースが出始めたことです。そして医学界もこの事実注目し、本腰で考えてくださる機運が見えて来ました。

残りの紙数も少なくなりました。一番書きたかった本題に入らねばなりません。

昨年初、私は「ストローク」という育児用語に出会いました。あの晩寝床に入って、いつもの習慣でラジオのスイッチを入れました。するとどなたかの講演が今終わるところでした。「……こういうわけで、しっかりした自立のできる円満な人格形成のためには幼児期のストロークが非常に大切なのです。どうか皆さんストロークを大切に」。

そこで聴衆の拍手が起こり講演は終わりました。「ストロークつ

てスポーツ用語かと思ってたけど、一体何のことだろう」と思わず飛びおきて英和辞典をひきました。

実は、私はこの十年ほど幼児教育の仕事にはんの少しかかわっておりまして、幼児の円満な成長と自立には欠かせないという言葉は聞き捨てにできないのでした。

辞書にはやはりスポーツ用語の他に育児用語という項目がありました。「なでる さする 抱きしめる 見つめる 話しかける ほめるなど、相手に存在感を与えるすべての行為を言う」と書いてありました。

「ああ、そうだったのか」と私は思わず大声で叫び、その辞書をしつかり抱きしめてしまいました。随分大げさな納得の仕方ですが、実は講演内容に対してではなく、そのころ何となく胸に抱いていた謎がとけた思いがしたからでした。

私が呆けた舅にして上げたことの意味が、その時はっきり説明でき、納得できたのです。なでる さする 話しかける ほめる、それらはすべて私たち家族が舅にして来たことです。だとすれば私たちは舅に自己存在感を与えていたことになるわけです。

考えてみれば呆けた老人ほど、存在感とは程遠い境地にいる人はいないのかも知れません。長年培い保ってきた記憶や機能を失い、自分の立場や誇りも失い、過去の功績も無視されて衰えた現状だけで評価され、家族からの尊敬や信頼や愛さえも失い、迷惑がられて疎外を受け、それは自己喪失のまったなかにいる状態だとしか考えられませんか。

幼児がゼロの状態で生まれてきても、家族からのたえまないストロークによって、自分が他から愛され認められているのだという自

覚を持ち、「生きている自分」という存在感を確認し、それによって心が安定し、自立していくのだと言うのです。それならば仮に存在感を失っている呆け老人に対して、ストロークが効果のなかるはずがありません。

心理学など深くは知らない私は、舅の上に現れた目覚しいほどの変わりようにただ驚くばかりで、この現象を存在感という言葉で説明できることを知らず、人間はやはり幸福感に充たされていることが、心身の健康のために大切なのではないか、という程度の理屈で片付けていたわけでした。

それでも何とはないモヤモヤした疑問のようなものがあって、はつきり納得したい思いをもっていました。

それは「家族の会」の世話役として老人問題にのめりこんでいくうちに、児童問題青少年問題とどこかに共通項があり、教育に関する論文や新聞記事など読んでみると、青少年を呆け老人に置きかえても少しもおかしくなくびったりとつじつまの合うことに気づき始めていたからです。

例えば家庭内暴力、校内暴力、非行、それから神経性の食欲不振症とかチックなどという疾病など、その原因や心理過程は呆けの場合と殆んど同じであり、自主的な勉強のさせ方、自立のさせ方などという問題にも、実に面白いほど共通点があるのです。

これから社会に出る成長過程の子供たちと、もうすぐ死を迎えなければならぬ老人、年齢の開きは、六十歳以上もあります。生きた時代や考え方から見れば、異人種とも思える程の違いがあります。とても同一に論じられるようなことではないように思えますが、やはり人間の心を持った同じ人であることに変わりはありません。

のだと今にして深く納得できました。人は他に愛され、自分の存在を他から正しく認めてもらうことによって初めて心の安定を得て、しっかりと自立する力が生まれるのだと思います。

これも最近ラジオで聞いたのですが、ある有名な野球選手が、アウンサーのインタビューを受けていました。

「あなたのあのすごいピッチング、あの原動力は何だと思いますか」  
「そうですね——監督の僕をじっと見ていてくれる目ではないですか。あの信頼してくれている、きびしいけれど温かい目、あの目に見つめられると、何か安心して投げられる気がしますね」

「ああストロークだ」と私はすぐ思いました。スタープレーヤーであるこの選手、はたから見れば自信満々であらうと思われるこれほどの名選手でさえ、監督からのストロークが心の支え腕の支えになるのです。考えてみれば育児用語のジャンルに入っけても、全ての人間が人間らしくちゃんと生きて行くための大切な意味をもつ言葉なのだと思います。

もちろんこれから伸びる人たち、社会でバリバリと活躍している現役の人たち、そして人生の終りを迎える人たちとは、ストロークの形や支え方には、自ら違いがあるだろうし、又違いがなければいけないと思いますが、いずれにしても人間関係の中で非常に大切なものであることには違いないと思います。

呆け老人の異常な行動に、もはや常人には理解のできぬ存在と考えがちですが、その行動のかけに隠れた人間の原点に目を向けなければ、とつくづく思っております。

## 老いを考える

### 「まず自分は何ができるのか」

#### ボランティア十年

#### 河 周 子

当時、私はガンの姑の介護にのめりこんでいました。十六年間、いっしょに暮らしましたが、しっくりいっていたわけではありません。が、ガンの宣告をされても、それを知らないで苦しんでいるのを見て、できるだけのことをしてあげたいと思いました。

四人兄弟のたったひとり残った三男の嫁です。手代わりを頼める人はありません。それなのに夫や子供に積極的に手助けを頼むことも考えず、また忙しさに追われて福祉サービスの有無に目を向けるゆとりがありませんでした。

沖藤典子さんが老人の介護を「密室のあがき」と表現されましたが、その通りでした。手術後の痛みと不安も、担当医の「大丈夫ですよ」の一言でなごみます。そのためにタクシーに乗って病院に日参もしました。外側からみれば、おかしいと思うようなことでも姑に頼まれれば続けたりもしました。

今思うと、私が勝手に悔いのない介護をしようと力んでいただけで、主観的でゆとりのない介護は、姑からみれば不満なことも多かったことでしょう。姑を見送って疲れて、茫然としていたころ、Sさんの呼びかけが耳にとびこんできました。

三十歳代後半のSさんは、脳卒中二度目の発作で、重症のお舅さんを病院でつきっきりの看病するかわら、家でもパーキンソン氏病の母と二人の子供の世話もしなければなりません。病院と家を往ききし、汚物の山の中で悪戦苦闘を続けました。

今まで、どうにか保たれていた家庭の平和が音もなく崩れていくのを感じたと後に語っていますが、そのような日々の中で、「老人問題を個人の犠牲や努力にまかせきりにしてもよいものだろうか」という思いを深くしていったのだそうです。

そのやむにやまれぬ思いを、友人や知人に語ったことから、「老人もお世話する人もどちらも犠牲にならず、人間らしい日々を過ごすためにはどうしたらよいか」の答えを求めて、杉並・老後を良くする会が発足することになりました。

一九七二年六月、同じような介護の体験者や老人問題の将来を案じていた九〇人が、垣根をこえて協力すれば道は開けると信じて。

大波にゆられる笹舟のような舟出でしたが、十二年度を迎えた現在、会員も二十代から八十代まで四五〇名にふえて、停年退職後の男性も交えて約二割の人々が日常的にボランティアを続けています。東京二十三区の西端にある杉並区のほぼ中央の、松の木・成田東地区の小学校二・三校区を中心にして日常生活圏の活動です。

発足当時、実態を把握するために見回した百メートル四方に、身障者の孫と七十をこえた祖母の二人暮らしとか、病身の妻をお世話する年老いた夫など、見過ごしにできない方々が八人もおられたことから、自然発生的にボランティアが始まりました。

「身近な自分のできることから」が第一歩でしたが、さまざまな問題を抱えた老人にケースバイケースにきこまかにと心を配り、食

事を届け、話し相手や相談相手となり、通帳を預けられて銀行へのお使い、洗濯、おしもの世話など、十年間にお手伝いしてきた方は百名をこえています。

長い人生の最後を温かな友人に見守られて静かに旅立たれた方、私たちのお手伝いをとて喜んで下さった方、たくさん思い出があります。一方で隣人としての助け合いでは解決しないことも数多くあることを知りました。国や自治体の福祉サービスが年々充実してきたとはいっても、利用する老人の側からみると、拡一的であったり、選択の自由がないなど個別の問題に適応しないのです。

そんな問題をどうするかを相談する実態調査会の話の中から、私たちの住む地域に、小規模でよいから特別養護老人ホームと病院の機能を持ち、その入浴、給食、リハビリなどのサービスを地域でも利用し、住民も参加できるような施設があれば、困難な状況にあえていける老人や家族も、よりよい日々が過ごせるのではないかという声がでてきました。

これを小規模多目的施設と名づけ、用地の確保を願う諸願や陳情を区に行ったり、素人の主婦としては初体験のその経過をのしした『老いへの挑戦』を出版して世論に訴える結果ともなりました。

このような対外的な運動も地道な日々の活動と実践を土台にしてこそ成り立つことで、小さな事務所を拠点に、ボランティア相談等各種相談、生きがいを求める手芸、病後の体の不自由な方の機能回復をはかるデイケア、行政の制度に協力しての給食サービスなどがボランティアの手で続けられています。これらの十年間の努力を、行政の側も最近になって認めるようにはなりましたが、用地難財政難に組まれて、小規模多目的施設を基盤として、地域福祉サービス

の実現はほど遠いようです。それなのに、最近の老人をとりまく福祉状況はますます厳しくなってきました。

福祉見直し、老人保健法の実施と続く中で、在宅ケアのすすめが叫ばれています。私たちが十年間訴えてきたことは、できうる限り在宅で老人をお世話するために、訪問看護やショートステイ、デイホスピタルなどの在宅福祉サービスを充実させてほしいということでした。地域の切実な要望なのでした。これらのサービスが充実しないのに、在宅ケアをおすすめすると、どういうことになるのでしょうか。十数年前のSさんと私一家のような、あるいはもっと深刻な悩みが、老人人口の増加に伴ってふえていくのです。

会に入る相談も日ふえてきました。電話の向こうで、有料ヘルパー制度が発足しても該当しないと嘆く若い嫁の声、痴呆の夫とねたきりの老妻から、今すぐの助けを求める声をききながら、今日も何かよい方法はないかと考える毎日です。

でも私たちは諦めていません。家に病人がでた時はのめりこむ前に、よりよい介護をするための客観的判断できる個を育てて自衛しながら、外にむけては、行政の安上り福祉の下請けではない地道な実践を積み重ね、私たちの杉並に必要な福祉サービスは何か、訴え、協働の場を求めていきたいと思えます。最終的にはいつも女の肩に重い介護というものを、子供たちにはもっとよりよいものにして手渡していきたいと思っています。

そして最後にひとこと。その子供たちが、弱い人々を暖かな目で見、共に生きる社会を築いていくってくれるように、社会科や家庭科の教育の中に、福祉をもっととり上げていただきたいをお願いしたいのです。

(杉並・老後を良くする会)

## 新しい家庭科を創るために

\* 小学校では \*

福田三津夫

### 食品添加物問題と

#### 仮説実験授業

(一) 食品添加物と教科書  
「11添加物を認める、食品衛生調査会が答申」という最近の新聞報道に怒りを感じた読者が圧倒的ではないかと思う。

——厚相の諮問機関「食品衛生調査会」（委員長＝館正知・岐阜大学学長）は十七日、新しい食品添加物十一品目の使用を認める答申をし、酸化防止剤「BHA」（ブチルヒドロキシアニソール）の規制延期も了承した。これで、厚生省が打ち出していた添加物の大幅緩和が本決まりとなった。

——これで四十七年の国会決議以来、守られてきた抑制策が事実上撤回され、日本で使用できる指定添加物数は計三百四十七品目にふえる（朝日新聞、八三・五・一八朝刊）。

なぜこうした添加物が認められたのか、認められなければならないのか。それは、「十一品目の大部分は、貿易摩擦解消のため米国が市場開放を要求してきた添加物」だからである。昨年の教科

書問題で露呈された政府の基本的態度（国内の教科書執筆者、学者、教師、一般市民の誠意には強圧的に立ち向い、中国、韓国、東南アジア諸国の抗議には体面を取り繕う）が「同盟国」の要求とあっては、強まることはあっても弱まることはいささかもないことを示している。

こうした日本政府の対米政策のしわ寄せをもちにかぶるのが我々一般市民であることは、間違いないところである。当然消費者はこれら一連の動きに対して抗議の声を挙げなければならないし、また、自衛策を講じなければならない。

食品添加物問題は教育の場においても、社会科で、理科、保健体育、そして無論家庭科でカリキュラム化されなければならないことである。とりわけ家庭科では、食品公害教育という観点から、さらに消費者教育としてもいていねいに扱わなければならないはずである。

ところが現在の小学校家庭科教科書は、かならずしも積極的にこの問題を重視し、果敢に取り組もうという姿勢はないようである。

この原稿を書いている五月三十一日の朝刊は、各紙とも一面で教科書採択の広域化を報じている。第十三回中教委の教科書小委員会がまとめたところによると、その骨子は、教科書をまず県教委が選定し、検定は原則非公開で、統制色の濃い内容になるという。さらに文部省はこの報告の趣旨を踏まえて「国を愛する心」を強調する内容を検定基準に加えたいとしている。これで教科書会社の寡占化

が進行し、検定から国定教科書へ一歩も二歩もつき進むことになる。  
ところがすでに、家庭科教科書では小中とも二社しか出版されて  
ないということで、他教科に先がけて国定化が進行していると言え  
る。

さて、ここで食品添加物に関する記述がどうなっているか見てみ  
よう。

■開隆堂 「魚や野菜は、出さかりのもので、新せんなものを選ぶ。  
加工食品は便利であるが、長持ちさせるためや、色やにおいをよ  
くするために、食品でん加物が使われていることが多い。自然の  
食品に比べて色やにおいがちがいがすぎるのは、さげるようにす  
る。買う場合には、品質表示に注意して、製造年月日の新しいも  
のを選ぶようにする」。

（六年、「食品の選び方」九頁）  
※「加工食品の品質表示の例」が示され、JASマークの説明が  
ある。

■東京書籍 「わたしたちの食事には、ソーセージ、かんづめ、カ  
ップにはいっためん類などのように、加熱や味つけをすませて売  
られている食品が、いろいろ使われている」。

★毎日の食事のなかで、どんな加工食品が使われているか、調べ  
てみよう。

加工食品には、色やかおりをつけたり、くさらせないで長く保存  
したりするために、食品以外のもの（注、食品でんか物という）  
がいろいろ加えてあることが多い。これらのものは、長いあいだ  
にはからだの中にとまって、害をおよぼすこともあるので、でき  
るだけ使っていないものを選ぶようにする（注、このほかに、田  
畑や川、海などが工場の廃水などでよごされたために、そこから

とれる米や魚に、有害な成分がふくまれているという問題もあ  
る」。

（六年「食事と加工食品」二十二頁）  
※やはり、「加工食品の品質表示の例」が図示されている。巻  
末に「食品に使われている着色料」の観察例として、着色料入り  
の水がしとみかんの比較がカラー写真で掲載されている。

授業としてはいずれも一〜二時間という割合簡単な扱いのよう  
である。私はここを重要な問題と考え、内容をかなりふくらませるこ  
とにしている。

#### （二）家庭科と仮説実験授業

板倉聖宣氏の提唱された仮説実験授業については、多くの説明を  
必要としないであろう。私が好んで家庭科の授業に多くこれを取り  
あげるのは、その気があり準備さえ怠らなければ、ごく普通の教師  
が一定の楽しい、わかる授業ができるということである。過去四年  
間を通じて教科書教材にさし変えた授業書には次のようなものがあ  
る。

・公害一般 「たべものとうんこ」

・食品添加物 「食べもの・飲みもの、なんの色？」 「コカ・コーラ  
の授業」 「味の話」

・合成洗剤 「洗剤を洗う」 「もう、毎日が洗たく日！」

・その他 「ゴミドン」 広島市のゴミから考える 「東京（23区）の  
ゴミ」 「にわとり」

これらの授業書のはほとんどは、広島大学の城雄二氏と曉星小学校  
の吉村七郎氏の作成されたものである。特に吉村氏は、「ひと塾」  
の初期の頃からの講師、助言者として活躍されていた。深刻になり

がちな公害教育の実践を实におもしろく楽しく報告してくれるのであった。「この毛糸の染色は今朝のホテルの食卓のつけものですよ」などと、にこやかに語ってくれた。我家から車で数分のお宅に夫婦でうかがい、直接貴重な話題を提供していただいたこともあった。

①「食べもの・飲みもの、なんの色？」

この授業は、仮説実験授業のトップバッターとして、五年の二期に扱うことが多い。堀江晴美氏の実践報告は充分刺激的であった（『ひと』七五年二月号、「みかけじゃないよ、中身だよ」。「ファンタ染め」として有名となったこの授業が各地で行われるようになる（私もその一人）、ファンタの売れゆきが落ちてしまい、企業は合成着色料から天然着色料へと切り変えたのだった。この授業報告があった時にはすでに残念ながら「ファンタ染め」はできなかったのである。

ところが「ジュース染め」に不自由することは現在までまったくない。ファンタからミリンダへ、ミリンダが天然に変えられるとパヤリースオレンジを「愛用」することになる。パヤリースの時代が一番長かったが、一〜二年前にこれも変えられ「落胆」していたら、子どもたちがマウンテンデュー（なんと果汁1%と表示がある）を探し出してきてくれた。これで当分は困らないで済むというものだ。

具体的な授業の流れは、『ひと』七九年十月号「食べもの・飲み物、なんの色？」（吉村七郎執筆）を参照していただきたい。五年生であれば六時間もあれば、東京都消費者センターなどから借りた映画を二本ぐらいいは見せられると思う。「見なおそう、わが子のおやつ」「化学公害——発ガン物質を追求する」（ともに東映）など。

この授業はいつも大変賑やかなうちに進行していく。馴じみのあ

る数種のジュース（ジュースと表示できるのは百分だけだが）が教卓の上に順次取り出されると、みんな鵜の目鷹の目である。各種ジュースをろ過した時、みかんの絞り汁が無色になるのには全員がびっくりするようである。

「毛糸染めのために合成着色料が含まれていそうなジュース、菓子、漬け物など家から学校に持ってくる日は、他教科はそわそわとして身が入らないらしい。実験中摘み食いをしすぎたり、あとで食べたがためにケチったりで、絶対量が少なく、合成着色料含有と書かれていながら少ししか染まらないということも多い。「センセー、これ家で漬けたんだよ」などと言われると、「どれ一つ食べてみて胃袋が染まるかどうか調べてみよう」とつい手を伸ばしてしまふ。普段おいしい手作りの漬け物など我家ではまったく食べられないので、この時とばかり摘みまくる。

この実験結果を班毎に画用紙に貼り出すのだが、色がつかなかったからといって安心は禁物である。天然着色料について『暮しの赤信号』（パート1、山田博士著、亜紀書房）などのデータをノートに書かせることにしている。しその葉（梅干し）くちなしの果実（たくあん、飲料）、緑茶（アイスクリーム、ういろろ、あめ、ようかん、せんべい）など植物を使用するものと、ラックカイガララムシ（清涼飲料、トマトケチャップ、ハム、タラコ、漬けもの、ジャム、菓子）、エンジムのめす（ケチャップ、洋酒、キャンデー、いちごジャム、飲料、ソーセージ）など昆虫からとる物とがあるのだ。子どもたちは一斉に「ゲェーッ」などと発声するが、日常の生活の中では当然のように使い続けるのだと思う。

②「コカ・コーラの授業」



やはり『ひと』（八一年、四月号）に「スカッとさわやか、命ぢめます」という竹田美紀子氏の授業記録がある。授業書は森下雅江氏（蒲郡市立南部小学校）という方が作成されたところ。

二時間ぐらいで完結する授業なので、私としては卒業製作としてアルバムの表紙のクロスステッチしゅうでみんなが力を出し切った次の時間あたりに、息ぬきのつもりでやってみることが多い。

ファンタやコーラが授業に登場すると急に子どもたちは賑やかになり、生き生きしてくるよう感じるのにはなぜだろう。学校には原則として食べ物は持って来てはいけないことになっている。何かのはずみであめ一個カバンに入っていたというので子どもたちには大問題になったりすることもある。現物を前に公然と食べ物のことを話題にできるということがうれしいのかもしれない。それに東久留米のコカ・コーラ工場は歩いても行ける距離にある。地区子ども会の夏の催し物で、ここの工場見学に行き、コカ・コーラを飲ませてもらい、映画を見せられ、おみやげまでもらうこともあるのである。その上、テレビなどマスコミで一流のスターを登場させた大宣伝——みんなの熱気にシラけるのは私一人だけである。

この授業の一つの山は、コーラの中に十円玉、一円玉、歯などを入れるとどうなるかという問題である。一時間足らずで十円玉がピカピカになってしまふのはなぜか、感動的でさえある。一円玉は十円玉と一緒に幾枚か投入しておいたら、茶色っぽくなってしまったのは、十円玉にメッキされたのであろうか。単独でやらなかったため結果がはっきりしなかったのは残念である。

〔問題6〕コカ・コーラに歯を入れると、どんな変化がみられ

ると思いますか。

ア、ピカピカになる イ、色が茶色っぽくなる ウ、C<sub>60</sub>ぐらいの穴があく エ、そのほか

この問題はクラスでかなりの子が母親などから聞いていたようである。

「確かお母さんの話だと、虫歯のように大きな穴があくと言ったので（ウ）だと思う」。

「コーラは骨を溶かすって聞いたことがあるので（イ）じゃないかな」。なんのことはない、ほとんどの子はコーラは体に悪いと知っているのかかわらず、飲み続けているのである。一ℓビンや〇・五ℓビンを冷蔵庫に入れている家庭も多く、毎日百八十ml一本飲んでいる子もいるようだ。

「それでは正解を発表します。ジャジャジャジャーン！」と言って、本屋の袋をおもむろに本棚から取り出して来る。

「実は私の家でつい最近この実験をやってみました。ハイ、これが一年生の息子の自由帳です。この中にコーラに自分の抜けた歯を入れた時の様子が書かれているのです。その時、妹の奈々子の切った爪も一緒に入れてみたんだ。じゃ、なんて書いてあるか読んでみるからね」。

判読が難しいのだが次のように書かれている。

・12月26日、土ようび、ななこのつめがななこ、こうらのなかに、ぼくのはと、ななこちゃんをつめをいれました。

さんじごろ入れて、六じごろには、四ほんしかありませんでした。そして、こっぶおうごかしたら、うかんだしずんだり

しました。

。12月27日、日ようび、さいしょにみたとき、つめがいっこしか、ありませんでした。そして、こつぶをうごかすと、いっこでてきました。あわせて、2こになりました。

。一月六日、水ようび、きょう、みたらなんにもありません。

そして、したをみたらありました。

。一月一五日、金ようび、まだしずんでいる。

「ようするに、啓の乳歯一本と、奈々子の爪七つを切ってコーラにしばらく入れておいたんだ。そしたら爪の方は結局溶けてなくならないで、ハイ、このとおり」と言って、紙に包んでおいた爪をみんなに見せて回った。少し小さくなったかなと思うぐらいだが、茶色に変化している。みんな気持ち悪いといった顔付き。

「さて、それでは本命の歯にうつります。コーラの中の歯をよく見ていたら回りにぬるぬるしたのがとり囲んでいたんだ。三週間位して取り出したらこのとおり」。

子どもたち「ウェー」とか、「キモチワリイ」とか口々に言っていた。明らかに前よりもはるかに小さくなって茶色というより黒ずんでいた。

こうした結果を見た後の五分休憩の時間、子どもたちは、教卓の上の缶入りコーラの罫りにやってきて、

「センセー、飲ませて!」

と言うのである。ワカッチャイルケド、ヤメラレナイのか?

さて、もう一つの山場は値段の問題。店頭販売で一本三十五円の頃、原液の原価は三円以下であり、それが日本のコカ・コーラポト

リング会社に十円で売られ、工場で砂糖や炭酸ガス、水を混ぜて販売店に二十八円でおろしていたという。

ナルホド、これだけの利益があるなら、あの大量宣伝は可能だし、工場見学者にサービスするくらいはわけないのである。コーラは中国にもソ連にも進出した。中国人もロシア人もスカッとさわやかにになったのかな?

### (三) 授業「味の話」

この授業書は城雄二氏が作られたのだが、私はこれを吉村七郎氏からいただいた。最近の子どもが食べる菓子類は、材料の不良をカバーするためにかなり甘ったるかったり、しょっぱかったり、そしてたつぷりと添加物でくるんである。そんなことを考えている時この授業書に出会い、さっそく授業にかけてみたくなった。

へあまくてちょびりにがい」という副題があり、①塩、②砂糖とサッカリンに大別される。③化学調味料は「続く予定」となっている。紙数の関係で概略を紹介しておく。

#### ①塩

〔質問1〕一九七〇年ごろまで日本で売られていた食塩と今あなたが食べている食塩をくらべてみますと、一九七〇年ごろまでの食塩には、塩化ナトリウム九一%と書いてありました。塩化ナトリウムとは食塩の主な成分です。実験にも使います。では今売られている食塩は塩化ナトリウムが何%含まれていると思いますか。

( ) %

一九七〇年ごろまで売られていた食塩にはあと( ) %ほど塩化ナトリウム以外のものが入っていることになります。それは次のどれだと思いますか。

〈予想〉ア、水分 イ、ゴミ ウ、塩化ナトリウムがこげたもの  
エ、塩化ナトリウム以外の塩化マグネシウムやカルシウムなど

※ヒント(略)

塩化ナトリウムはそれだけを熱しても、こげたりすることはありません。塩田法でつくられた食塩に色がついているのは、その中に九〇程度、海水中に含まれていた塩化カルシウムや塩化マグネシウム、ヨウ化カリウムなど塩化ナトリウム以外のミネラルとよばれるものがあるからです。その食塩のことを自然塩とかあら塩ともよんでいます。

〔質問2〕人が食塩を食べる時、九〇のミネラルを含む九一％塩化ナトリウムの食塩と、九九％以上が塩化ナトリウムの食塩とくらべて、どちらがより体にとっていいのか話しあってみましょう。

〈予想〉ア、「九一％食塩」の方がよい。イ、「九九％食塩」の方がよい。ウ、どちらも同じ。

〔ひとの進化と塩〕(略)

②砂糖とサッカリン

〔問題1〕ここに( ) (炭酸飲料水)があります。この中にさとうはどのくらい入っていると思いますか。

〈予想〉ア、入っていない。イ、五gぐらい ウ、二〇〜三〇g  
実際にさとうを紙の上にはかかってのせて考えてみましょう。

〔問題2〕牛乳にはどのくらいさとうが入っていると思いますか。  
コーヒー牛乳はどうでしょう。

〈予想〉ア、入っていない イ、五gぐらい ウ、二〇〜三〇g  
〔二〇〇ml中の砂糖の量〕(略)

〔問題3〕カルピスなどの乳酸飲料には何gぐらいさとうが入って

いると思いますか。

〈予想〉ア、原液には五gぐらいさとうが入っている イ、二〇gぐらい ウ、五〇gぐらい エ、入っていない

〔問題4〕〔問題5〕〔さとうに囲まれて〕(以上、略)

四〜五時間かけた授業の感想文を次の様にまとめた子がいる。

――ぼくはこの授業を受けてから、なるべく塩分をとるのをひかえようと心がけてきました。塩分や糖分をとりすぎると、いろいろな病気になることがわかったからです。この前の授業でならった「洗剤を洗う」でもそうだったのですが、ぼくの母はプリントをどこかで見たのか、「へーこれは、ためになるわ!」といままでとはちがった味つけをするようになりました。けっして味はよくなったわけではありませんが、それでもその方が体にいいのだと思って食事をしています。それから、この授業でありがでてきましたが、やはりはどうしてふつうの砂糖とサッカリンの害をみわけることができるのでしょうか。またその実験を、こんど自分でやってみるつもりです。そこで質問ですが、サッカリンとはいったいどこでうっているのですか。(宮越正徳)

※「味の話」は舌足らずの紹介になってしまいました。もし全文を知りたい方には送ります。次の所へ御連絡下さい。但し郵送料は負担願います。

〒二〇四 東京都清瀬市中里一ノ七 一三ノ四五

福田 三津夫

## 新しい家庭科を創るために

\* 中学校では \*

大森 嘉子

### 糸から衣までの学習

一、今、衣生活はどうなっている  
私たちの衣生活は、科学や技術の進歩で、大きな変化をしてきた。大量生産による既製品の氾濫は、自分のほしいと思う衣服が、すぐ手に入るの、不用になれば捨ててしまうという使い捨て時代をもたらしている。資本の利潤追求のために作り出された流行を追いつめ、店に売っているものを無条件にとり入れる人たちが多い。そして、十代の少女少女に仕かけられているはてしない商法は、目に余るものがある。

生徒たちは、学校では、管理のために標準服を着せられ、帰れば、町に氾濫する似たような衣服を着せられている。没個性そのものだ。生徒たちの衣生活は、衣服本来の機能を考えたり、自分にあった正しい感覚を育てる主体的なものにはほど遠い。

衣服を購入する際、色や形ばかりに気をとられ、布地の材質まで注意して買うものは少ない。もちろん数多い布地の知識を得るのは困難ではあるが……。また、被服製作でも、デザインばかり凝って

その被服の目的や機能を忘れていくことが多い。

このような生徒たちが主体的な衣生活ができる基本的な力をつけるために、被服教材で、何を、どのように学ばせるのか。

現行の教科書では、「被服製作」に大半の時間がさかれてしまう。不十分な施設で、多くの生徒を相手に行き届いた実習指導も、満足にいかない。指導書にある時間内では到底できない。それも既製の型紙を使って、被服の構造がわからないまま、スモックや、ジャマの製作のための製作に追われる。その上、材料学習も不十分で、現在の衣生活のゆがみや問題点まで突っ込んだ学習には及ばない。はたしてこれでいいのだろうか。

衣服そのものを理解させるには、衣服の歴史、衣服材料、着方、衣服管理、衣服の構造などの学習があると思うが、これらをどのような教材を使い、どう組み立てていけば、主体的な衣生活を送るための基本的な力になり得るか、試行錯誤している段階である。ここでは、材料学習における一つの試みを報告する。

被服材料を学習する必要性は二つある。

#### 二、材料学習の必要性

一つは、人間の歴史の中で、自然に働きかけ「繊維」を作り出し、「糸」にして「布」を作り出した人間の知恵、労働、技術のすばらしさ、尊さを、被服の文化遺産として伝達すること。自然物を人間に有用なものに作りかえていく生産の過程を教材化する必要で

【資料 1 学習計画（被服分野のプラン）】

項 目	作 業（技能）	学習のポイント	材料・道具	製 作 例	時間	学年
1 燃る	・手で燃りをつける	・燃りあわせることで短いせんいが、長くなることがわかる。 ・紡ぐことを理解	綿・つむ(紡錘) (ふとんわた) 脱脂綿 糸車 羊毛 まゆ	・糸をつくる ・まゆを煮て糸をとる	2	1 年 (2 年)
2 織る	・縦糸と横糸を組み合わせる (簡単な織機をつくる)	・簡単な道具によって織ることができる ・織布の原理、原則を理解する ・織機の基本的しくみを知る	毛糸 麻ひも さき布 織機	・花びん敷 ・小物入れ ・コースター (織機を木工で作ってもよい)	6	1 年 (2 年)
3 繊維の種類と性質	・せんいの実物を観察 ・せんいの特徴を実験で知る (燃焼実験) ・布の性質を実験で確かめる (布の観察吸水実験)	・せんいのなりたち、種類を知る ・布の性質を知り特性をいかした活用ができる	綿 まゆ 羊毛 化学せんい	・綿の栽培 (栽培領域クラブ、学級)	4	1 年
4 精 練 漂白 染色	・洗う ・漂白 ・布、糸を染める	・布を衣材料として適するために精練、漂白、染色されることを理解し、その技法を知る	脱脂綿 未漂白布 せっけん 漂白剤 染料	・糸染め ・ろけつ染め ・しぼり染め ・藍の栽培	8	3 年
5 縫 製	・型紙選び（作り） ・裁断 ・手ぬい ・ミシンぬい	・立体的で動きのある体をおおう衣の型紙を理解する ・織布の特性を知って裁断 ・手ぬい、ミシンぬいができる (部位の性質に応じたぬい方)	はさみ ミシン 物さし アイロン ヘラ チャコ 針	・スモック（貫頭衣）（袖なし） ・スカートかパンツ ・パジャマ	20 〜 30	1 年 2 年 3 年
6 衣服の歴史		・布の生産と服装の変化 ・社会経済的な変化と生産、衣の変化			4	3 年

問題点 ※ 1,2 の間に結ぶ、編むを入れる必要がある（編むと織るとのちがいが）

※縫製の時間が長いので、これを削って、被服の入手、衣料公害などを採り入れたい

ある。

明治以後百年といえば、人間の三世代ということになるが、この間に衣生活革命が完了した。衣食住のうち最もはやく、その生産が社会化し、インスタント化したものが衣服である。手作りの衣生活を経験している老人が孫・ひ孫たちに作業の様子を話して聞かせても、想像することも、理解することもできないばかりか、興味を持つこともできない。糸を作る道具も、機を織る技術もきれいに片づけられ忘れられてしまっている。老人の記憶の中で、かすかに残っているにすぎない。いや、もうその老人たちも、ほとんどいないのである。

町田は八王子から横浜への絹の道の途中に位置し、養蚕農家は多く、かいこを飼い、糸とりの作業、機械の作業も明治中頃まで続けられていたのである。今はもはや見るものもないが、できるだけ実物の材料や道具を使って、糸を

紡ぎ、布を織る作業を、自分の体を使ってやってみる中で、先人の知恵、技術のすばらしさを、労働の大変さを、実感としてとらえさせたい。

もう一つは、被服製作に際して、縫合技術と布材料は密接な関係にあること。その布が、何で、どのように作られているか、その性能を知った上で、縫製工程に入った方が効果的である。

たとえば、衣服製作で裁断をする時、「布の基準方向」が必要である。「織布工程」を体験させると、縦糸が横糸より伸びにくいのは、織り上がるまで、縦糸がひっぱり耐えていたからであること、被服の強さの必要性から「布の基準方向」が必要であることが実証される。布にはどうして耳ができるのか。また斜めの方向がよくのびること、バイアスの利用のしかたなど、自分の織った布で確かめることができる。また同じ織り方でも繊維によって風合いが違う。逆に、同じ繊維でも織り方を変えれば、また感じが違ってくる。色糸の組み合わせで、縞や格子模様を作ることができるなど……、繊維から糸、布作りまでの工程を、自分の手で確かめることが、次の布の選び方や縫合技術につながっていく。

### 三、糸から布へ

まず、小さな布をほぐすことにより、縦糸と横糸の組み合わせによって布ができていること、一本の糸の撚りをもとすことにより、短い繊維が撚られて糸になっていることを確かめていく。

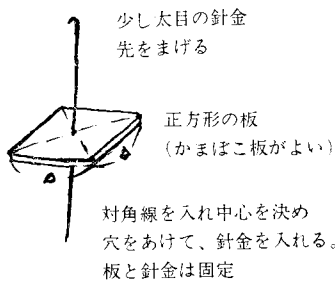
「布がバラバラになってしまった」「糸を分解したら綿みたいになっちゃった」「糸ってこうやってできているのか」。生徒たちは、あたりまえのことに驚いている。そして、逆に、繊維から糸を作り、糸を組み合わせる布にしていく過程を実際にやってみるのである。

こちらは一朝一夕にはいかない。

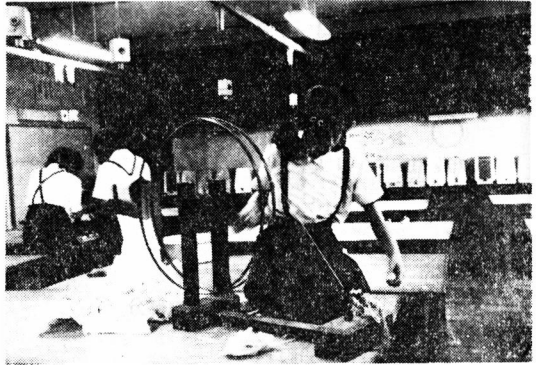
「手で撚っても、なかなか強い糸にならない」「昔はどんな道具を使っていたのか」「今も作っている道具はあるのか」……

インディオの子どもたちが糸を紡いでいる写真を見せたり、弥生時代から古墳時代にかけて使われていたであろう紡錘の出土についての話や、絵、写真を見せたりして、紡錘による糸つむぎの存在を知らせる。カマボコ板と針金でつむらしきものを作って糸を紡ぐ（図1）、右手でつむを回し、左手で綿（脱脂綿・ふとん綿を使用）を持って引き出して糸にしていく。最初はなかなかうまくいかない。すぐ切れる、太くなってしまふ。慣れてくるとカマボコ板がコマのように回り、長いかなり強い糸ができる（コマは、子どもたちがつむを回して遊んでいたのが始まりと聞いている）。うまくいった者は、おもしろくて、やめられないようである。

図1 紡錘作り



そこで、次に近年まで使われていた糸車をおもむろに出してきて、糸を紡いで見せる（高山に行った時、古道具屋で見つけ買ったものである）。生徒の前でみごとに糸を作ってみせるには、かなりの練習がいるが、つむより速く強い糸ができる。そして、かなり細い糸まで紡げる。大きな車の回転は、小さな糸で撚りを多くかけることができ、強い糸にな



るのである。人間の知恵が、すばらしい道具を作り出したことを、道具を実際に使ってみて、実感としてとらえていくであろう。

次に、いよいよ織布工程を考える。包帯をほぐして、糸がどのように組み合わされてできているかがわかったら、逆に、手だけでもとの布を織らせる。縦糸をびーんと張り固定させ、横糸を交互に入れていく方法。さらに発展させ縦糸を


一つおきに上下させる方法を考えていく。スマートラ式織機、中南米やインドネシアのいざり機、日本のいざり機、高機などの絵や写真を見ながら、布を織る方法が、世界中で昔から工夫されていたことを学ぶ。

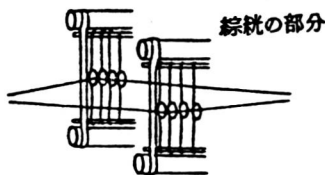
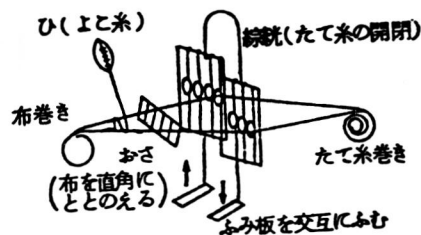
生徒たちは、簡単な織機を作って（資料2参照）織ってみる。とじ針で一本おきに横糸を通したり、ものさしを使って縦糸を上下させたり、一本おきに糸を割りばしにつり上げ、縦糸を上下させるなど、いろいろ工夫している。縦糸の上下のしかたによって、平織、綾織など、いろいろな織り方ができることに、発展させる。

生徒たちの声から――

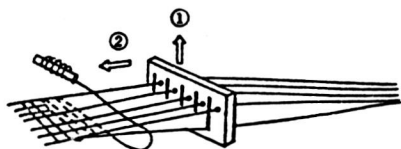
。脱脂綿で糸ができるなんて。手で糸を紡ぐのは大変だ。すぐ切

## 資料2 布づくり

指導項目	学習内容	指導上の留意点
1. 布を織る方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ノートの組織図を見て布を織る方法を考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平織りの組織を理解させる</li> <li>・縦糸をはって横糸をとおしていく方法</li> <li>・ヒを作る工夫</li> <li>・縦糸を一つおきに上げ下げする方法を考えさせる</li> </ul>
2. 布を織る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単な織機を作る</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・木わく（板）の両はしに釘を5mm間かくに打たせる</li> <li>・厚紙の両はしに5mm間かくで切りこみを入れる</li> <li>・下じきや厚紙でヒを作り、横糸をまきつける</li> <li>・縦糸を上げ下げして、横糸をとおす（綜統のしくみ）</li> </ul>
3. 布の性質	<ul style="list-style-type: none"> <li>・横糸を通して布を織る</li> <li>・できあがった布の縦、横、ななめをひっぱってみる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縦糸を上げ下げして、横糸をとおす（綜統のしくみ）</li> <li>・ななめ（バイアス）が一番のびることを知る</li> <li>・布の幅、みみ、ほつれなどを理解させる</li> </ul>
4. 布の三原組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>・組織図を見て綾織を織って見る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな織り方を知る</li> </ul>



スマトラの織機のしくみ



板は綜統①と、おさ②の動きをする。上下に動かしながら、横糸をとおしていく。

生徒たちの中には「木綿」が読めないもの、読めても綿とつながらないものが多い。もちろん、綿の木を見たことのある者は少ない。コットンボールからふき出す白い繊維を見せたい。できるだけ実物を、それも

。糸車を初めて使って、糸を紡ぐたいへんさがよくわかった。こういうのを作る人たちがどんなに苦労していたか。やってみてわか

れたり、太さがそろわない。でも、つむでやれば、強い糸ができる。ちょっとした工夫がものを言うのだなあ。糸づくり、なかなかむずかしい。でもおもしろい。つむの先に、ふわふわした綿が一本の糸になってつながっていく。一方方向に燃る力が糸をつくるということがよくわかった。

った。ちょっと昔の人になった気分。織る時、縦糸をわかせるのが、なかなかわからなかった。後で織機を見て、なるほどうまくできていると思った(図2)。人間の知恵のすばらしさ、労働の大変さを、少し膚で感じたようだ。

#### 四、繊維の実物にふれさせる

化学繊維の出現は、繊維の種類を豊富にし既製服の発達に貢献したことは言うまでもない。軽くてしわにならない、ノーアイロンの化学繊維の中には、汗をかければ冷たく膚にくっつい

り、湿疹ができたり、熱に弱く、思わぬ事故のもとになったり、健康面や安全面から考えれば難点のあるものが多い。

こういう化学時代だからこそ、もう一度、自然の力と先人の知恵が生み出したすばらしい天然繊維に、膚でふれさせたいと思う。

生徒たちの中には「木綿」が読めないもの、読めても綿とつながらないものが多い。もちろん、綿の木を見たことのある者は少ない。コットンボールからふき出す白い繊維を見せたい。できるだけ実物を、それも



できるだけ、とかちで、見せたいと願った。

綿は四年前から、小さな花だんに種をまくことから始めている。一昨年は、クラスに栽培係をつくり、昨年、今年は、機械部が世話をしている。技家の栽培の分野の教材としてもよいと思うが、学校事情で、その実践は、まだできていない。授業の中では、特に芽がでた時、花が咲いた時、実ができた時など、観察させる。

五月中旬に種をまき、七、九月初に花が咲き、十月、十一月にコットンボールをつける。成長は、種の良し悪しや気候に大きく左右され、昨年は冷夏と台風のため、全滅してしまった（綿の栽培から綿織物まで、一貫した昔ながらの工程を試みている静岡県磐田郡の綿畑に行ってみたが、そこも昨年は例年の1/4の生産であった）。

綿の実がはじけて、白い、せいの、がふき出しているのを初めて見る生徒は、「これが綿なの？ ふとんの中と同じ？ 脱脂綿も、これから作るの」。さわってみて、「わあ、種が入っている。植えたら芽がでるかな」。驚きの声があがる。

綿は、神奈川県産業セクターからさなぎを乾燥させた「まゆ」を1kgぐらいわけてもらった。六、七年前までは町田の農協でもわけてくれた。「まゆ」を見たことのある生徒は多いが、どのようにして糸を取り出すのか知らない。そこで、まゆを煮て、座ぐり（まゆから糸を取る道具、町田南地区の農家からもらった）で糸を巻き取る。糸口を見つけるのに、少し手間どるが、みつければ、どんどん出てくる。一個のまゆから900m〜1500mは取れる。巻き取られた糸は、光沢があり、たいへん強い。「かい、こってすこいなあ」と感激している。

羊毛は、原毛を購入している。さわって、風合いをみたり、紡い

で純毛の手糸を作ってみる。先日、宮崎大学の福原先生から、原毛を送っていただき、良い教材が手に入って喜んでいいる。

麻は、100%の布と、ラミーやリネンの麻糸を見たり、さわったりして、麻の感融を味わう。また糸の撚りをもとめて、綿に比べ長い繊維であることを知る（古代、植物の繊維を見つけ、つないで糸にした―麻布、藤布など）。いつか、麻の栽培もしてみたい。実物にふれること、糸取りや糸紡ぎ、織布などの実際の作業を通して、繊維や布の持つ性能をより確かに学習させたい。

## 五、「材料学習」からの発展

繊維から布までの学習の後、染色、縫製、衣服の歴史と学習を進めている。前段の材料学習を、次の教材の中で、どう発展させていくか、実践の中で、検討しようとしている最中である。

衣服の歴史の中で、八〇〜九〇年前までは、糸を紡ぎ、染め、織り、縫うといった衣服を整える作業は、綿々と女の手で、続けられてきた。また、明治、大正、昭和と、紡績工業や製糸工業の女工の犠牲の上に、日本経済があったことを、歴史の事実として話しておきたいのである。

また縫製については、一年〜三年まで全学年で製作を入れているので、どうしても時間がかかりすぎる。生徒たちの縫製技術が低いので、充分やらせたい気持もあり、被服製作で何を取り上げるか、悩んでいるしだいだ。できれば、縫製の時間を削って、「材料学習」の発展として、被服、被服材料の入手や衣料公害などを取り入れたいと思っている。

（東京都町田市立町田第三中学校）



## 〈葦合高校では〉

### 夏休みの課題学習としてホームプロジェクト

六月は年間を通して最も授業の欠けない月、即授業の充実する月といいたい所だが、生徒は、学校生活に変化を求める。本校では毎年この時期に音楽コンクールが催される。学年毎の予選を通過して、決勝は六月末になる。梅雨空に美しい混声合唱のハーモニーが流れてくる。また、この月は家庭科ではホームプロジェクトのテーマと実施計画の提出時期でもある。四月にオリエンテーションで予告し六月に提出、以後夏休みまでの短期間にグループ毎に、また個人別に担当教師との話し合いをもつ。夏休み前には、福祉施設や公的機関への訪問についての問合わせ、あるいは実験器具の貸し出し申し込みなどについての問合わせでゴタ返す。しかし、この時ばかりは、「先生」「先生」といわれてふりまわされるほどうれしい。

「騒音計を借りられますか」

「昨年、洗剤について××油脂を見学しました。今年は洗剤パートⅡをやりたいのです。主婦を対象に実態調査と滋賀県の条例を直接調べたいのです。琵琶湖を見て、ついでに泳いでこようかな」

「どちらが主目的なの？」と私もやり返す。一年生は、初めてでマゴマゴしているが、さすが二年生は心得ている。一年の時の研究を深める者、一年と同じグループでやる者、ふだんはとてもやれないからこの機会を利用して日ごろから興味をもっていたことをじっくりやろうとあえて個人研究を選ぶ者など。夏休み前にホームルーム担任のK先生がクラスでこの夏休みをいかに過ごすか、計画と抱負を尋ねた所、家庭科のホームプロジェクトをやることを第一にあげた者が三名いたそうである。生徒のこのことにかかる意欲がうかが

えてうれしい。

夏休みに校外に出て、自分たちの計画で、グループで学習することとは苦しいけれど楽しいようである。しかし、トラブルを生じることもある。そこで、次のようなマナーと心得を事前におさえておく。

①学習の内容によって他所へ訪問する場合必ず前もって電話をして訪問の目的を告げ、相手方の都合を確かめておくこと（学校長名の「おねがい」の文書を持参する必要がある者は休みまでに申し出ること）

②前もって資料を集め研究し、質問事項や見学事項をまとめておくこと

③どんな方法でまとめるか、まとめ方も話し合せて、写真、スライド、録音、映画など、必要に応じて準備しておくこと

九月には、クラス発表、相互評価、文化祭で展示、一年生はクラスで推薦された者が更に十月の校内発表会で発表する。この会は全校クラブの時間を使って一学年関係教師、男生徒を含めた一年全員によってもたれている。

### 話題を投げかける一年生校内発表会

この形が定着するまでにはいろいろあった。私の前任校は商業高校であったため、三年で家庭一般を履修、男子は「商品」をやっていた。商業科担当のS先生と話し合い「商品」でも自由研究をとりたい。九月にクラス単位の男女で発表会をもった。男子は旅行、流通機構工場見学などが多く、女子は家庭問題が多かった。綿密な計画をたててやったものの発表の時だけのドッキングは何か不自然で、共に学ぶことの意義がしみじみわかった。

現任校で男子にも発表を聞かせるのは今年で四年目、女子だけの

発表会を開きに來られたN先生の提案「ありやおもしろいで、男子に聞かせても結構耐えられる。男子も知っといたらええことや」の一言で決まったが、その後徐々に共感を呼び、九月ともなれば「今年はどうなテーマがですか」と尋ねられたりして、一応校内に話題を提供している。発表会の終了後、ホームルームで発表の感想を話し合ったり、家庭科の男女共修問題を生徒と討論した先生もおられる。昨年は、中学校への葺高生活の紹介のハミリフィルムの一コマにもなった。発表会での学校長の講評は、「家庭は男女で築くもの、男子は家庭科の授業こそ受けていないが家庭生活は毎日送っている。女子の発表に関心をもつて聞くことにより、これからの家庭生活に役立ててほしい」というような内容で、ホームプロジェクトファンの一人、しきりに文化祭のステージ発表に組み入れたらといわれるが私の方が逡巡している。

発表の準備に男子が手伝っている風景も目にするが、現段階ではやはりお客様、名実共に一年全体の発表会が企画されるにはやはり共学が母体にならなければならない。ホームプロジェクトと標題を掲げながら、私の実践は自由研究指導の色彩が濃い。この学習をできるだけ自らやろうとする意欲をかきたてられることにより進めてほしい。家庭科の宿題というとならえ方はできるだけきたい。また社会とのつながりでとらえさせ、競争社会の中であえて高校生に、友人との協力である事を成し遂げるそんな実感を味わわせたい。このような視点から生活につながるテーマは何でもよいということですすめている。

「音楽が人の心に何を与えるか」

「現代人にとって電話はどんな役割を果たしているか」等のテーマ

57年度のテーマ分類

領域	1年	2年	その他・部活動に関するテーマ
保健体育	8	14	部屋のくつ箱とかさ立て 試合にもっていくカバン スポーツドリンク ・とうふづくり・お漬物をつくる・廃油から石けんを
被服	4	18	
住居	4	27	
食物	6	46	
消費者問題	24		
資源のリサイクル	10		
ゴミ処理	19		
家族	3		
老人問題	4		
福祉・障害者問題	8		

を設けた者もいるが、昨年の例は表1のとおりである。

〈兵庫商業高校では〉

揺れ動く

家庭クラブ

昭和55年に第28回

全国高等学校家庭ク

ラブ研究発表大会が

神戸市の文化ホール

で開催されたが、当

時たまたま兵庫県の

家庭部会の役員をし

ていた関係で、大会事務局として四年間にわたり綿密なる計画

と準備に携わった。おかげで今までほとんど知らなかったといえる

「家庭クラブ」にどっぷりつかることになった。立场上、本校の家

庭一般を履修する二、三年女子は全員、県連盟に加盟せざるを得な

くなり、即、加盟費の問題で壁にぶつかったが、幸い教員間の理解

を得て、さしたるトラブルもなく加盟することができた。しかし、

このように加盟の動機が不純であったため、私としては生徒への働

きかけが消極的になりがちであった。

ところが、開会式の来賓祝辞に「最近、朝食を食べてこない生徒

が多くなってきたし、お弁当を持ってこない生徒も多い」とあり、

会場係であった本校生が動かされた。私たちの学校はどうなんだろう。

他の学校では……と役員が集まり、実態調査を手はじめに予想

もしなかった活発な活動が始まった。「朝食を食べる運動をしよう」をキャッチフレーズに校内にはポスターがはられ、校内放送では朝食を抜くことによって生ずるさまざまな害についてアナウンスが始まった。一方、保護者によびかけるべく月一回発行される「育友会だより」にシリーズで活動を紹介した(資料1)。文化祭では、家庭クラブコーナーを設けて、朝食摂取状況の実態調査とこんな朝食いかが? の献立を展示、大会当日、県連盟として実施した商品鑑定のミニチュア版を公開し参会者に挑戦してもらった。

二年・三年目と卒業生の指導もあり、活動もほぼ定着していった。近くの施設の子どもたちのバジャマの製作や、クリスマスカード・プレゼント作り、ひとり暮らしの老人への年賀状などようやく軌道にのったかに見えた。だがこのような奉仕活動を、教師の側から作った大きな組織で全く生徒の自主活動に任せることは不可能に近い。受身にならされている昨今の生徒に勤労、愛情、創造、奉仕の基本精神が理解され、行動化することは容易ではない。教師にとつてかなりの負担になっている。今まで無我夢中で生徒を引張ってきた私は、他の市立高校の活動を見る余裕すらなかった。

昨年十月、突如として行革財政のあおりを受けて市・私立高への県補助金が打ち切られた。私は直ちに市教委の担当者へ活動内容を添えて補助金を再三お願いした。しかし、指導要領の中でいかに明確に位置づけられていてもわずかに二、三校しか加盟していないものに補助はできないというのが市当局の回答であった。「なぜ、本校だけがそんなにしんどい目を……」という校内家庭科教師の反発とも愚痴とも知れぬつばやきに、心を痛めながらも基本精神を何としてでも生徒に引継がねばという半ば使命感にいた気持で自らを励ま

資料1 あなたは今日、朝食を食べましたか (昭和55年9月調査)

神戸中部地区			兵庫商業高校		
(表1) 「は い」 「いいえ」			(表2) 「は い」 「いいえ」		
中3	91 %	9 %	1年	89 %	11 %
高1	91 %	9 %	2年	89 %	11 %
高2	90 %	10 %	3年	90.3 %	9.7 %
高3	88 %	12 %			

たべなかった理由 (昭和55年10月調査)

神戸中部地区

兵庫商業高校

(表3)

	「時間がない」	「食べたくない」	
中3	35 %	55 %	10 %
高1	49 %	36 %	5 %
高2	41 %	53 %	6 %
高3	76 %	24 %	

(表4)

	「時間がない」	「食べたくない」	
1年	53 %	35 %	12 %
2年	40 %	60 %	
3年	52 %	48 %	

している。しかし、それとはウラハラに脱退加盟人数減などの学校が出てきて私自身疲れ果てボロボロという所である。

「連盟に入らなくても各自の学校で活動をすればよいではないか」の意見も聞く。しかし、加盟しなければ他校との交流ができない。本校生徒の活動の多くは、全国大会や指導者養成講座で親しくなっ

他校生からの示唆によるものである。大きくふくれあがった全国大会の持ち方には種々問題点が指摘されている。しかし、あの活動自体は、今の若者に最も望まれていることではなからうか。三年目にして内外からの壁にぶち当たり、私自身、原点に立ちもどり今後の方角を探っているところである。

〈長田高校では〉

#### 私と家庭クラブとのかかわり

昭和30年代の始め、家庭課程が二クラスある前任校でのこと、具体的にどんな活動で、生徒会活動とどうかかわるか位置づけもわからないままクラブ総会を開いた。古びた剣道場は女生徒で一杯。生徒主体の民主的な運営に戸惑いながらも議事が進み「新しい組織」という映画を上映し、生徒も教師も興奮気味で大事業を成し遂げた充実感が今も脳裡に刻まれている。その後、普通科の現任校に赴任、ここではすでに昭和35年、兵庫県連盟結成校としての活動歴があったが、生徒会組織下の家庭部員で構成、家庭科履修者全員という形とはその趣きを異にしていた。しかし、少数なりに文化祭での展示、県・全国大会への参加などそれなりに動いてきたが、一昨年から家庭部員が急激に減り、部の存続が危まれるに至った。

#### 県連盟事務校を引き受けて

兵庫県では十数年前から五地区による輪番制をしている。未加盟校の多い本校の属する阪神明石地区は低調であり、事務校をひき受けることには不安もあったが、本校家庭部をもう一度活発化させたいという思いが先立ち学校長の理解を求め内諾を得た。58年度へ向けての準備は早速に始まった。年間活動費の三百円徴収を職員会議に提案するまでに各クラス役員の選出、会長候補が中心になっての

クラブ週間のカーネーション作りなど徐々に動き出した。会費及び加盟の件は、難なく職員会議で承認され、県連盟の会に参加することができた。その報告をクラブ新聞として発行、校内によい反響をもたらした。しかし、実際にクラブ員を動かすのは容易ではない。役員たちは趣向をこらしお菓子の講習会など度々開いては啓蒙した。更にクラブ員の意識を高揚するため研究発表に挑み、「不足しがちな食物繊維の摂取の工夫」と題して行った。はじめ生徒たちは、二ヵ月足らずでは時間的に絶対無理といていたが、私のねらいは研究成果ではなく組織づくりにあった。実態調査、工夫調理の実習、冊子作り、スライド製作に少しずつでもクラブ員がかかわることができ先ず成功したといえる。この研究は本年五月、生活科学

センターの消費者プラザにも展示した。

ひとつの事が終わり、やれやれと一息つくひまもなく次の問題に悩まされるこのごろであるが、前任の生徒会長が引退して新会長が決まらないまま58年度になだれこんだ。特に本校は五月初めに文化祭があり、家庭クラブはスタートから動きがとれなかった。五月十四日の代議員会を控えて私は眠れぬほど心配したが、この会の準備計画、冊子作りからリハーサルまで僅か一週間でやり遂げ、当日の会の進行も見事にやっていた。日頃の授業では見られない生徒たちの側面を見ることができ、共に仕事をする楽しさすがすがしいとさえ思えた。活動の機運が高まるにつれ、財政的な裏づけのないことは苦しい。この活動は、自分の意志でやりたくて入部する生徒会部活動と異なるため自己負担は軽減すべきであるし、組織の作り方も校内事情により異なるが、加盟することで一層の成果をあげようの呼びかけも裏づけがないと難色を示してくる。兵庫県では55年

の全国大会で加盟校は増えたが行革で補助費が見直され、今後の問題が案じられている。こうした各県の状況のもとに開かれているはずの全国大会が、会場県の大きな負担の上に開催されていることは周知の事実である。成功させたい気持ちがエスカレートしてといってしまうがそれまでだが、真剣に見直す時期がきているのではなかろうか。

昨年、広島大会で三〇周年記念誌を手にしたが、その中に初代事務局長、大和マサノ先生（当時白鷗高校）は次のように記されている。「私の脳裡をかけ巡ることは、与えられた紙数では到底書き現わすことができない。遠い記憶の中から忘れてはならないこと。書き遺しておきたいことをあげると、その一つに……白鷗高校の犠牲が余りにも大きかったこと。全国への文書の発送、送られてきた書類の山、事務員さんと私の二人での仕事は大変だった。始業前の一時間、放課後は夜間授業の終わる時刻まで、行事前には五日位の徹夜にも耐えた……」。三〇年を迎えた今、改めて創設当時を偲び、家庭クラブの意義を問い直し、地道な歩みをしたかった。

#### 家庭クラブに期待をかけて

本校が事務局を引き受けようと思った意図は、前述の県家庭クラブ連盟結成の歴史があること。進学校としての本校での家庭科の位置を守る責任を感じたこと。そして、家庭クラブ活動は、学校裁量のゆとりの時間の使い方への一つの示唆になり、職員、男子生徒にも無理なく理解されるのではなからうかと考えたためである。私の考えは甘いかも知れぬが、男女生徒で生活問題を考え実践する時間としての使い方が定着していけば、本校の家庭クラブも飛躍するであらう。また、共修の家庭一般の授業実現を外堀りから埋めていく

ことにはならないだろうか。

七月二十二日から二泊三日の県連盟の指導者養成講座にボランティア活動で活躍中の主婦の方を講師に招き、福祉関係の講演と手話の実技指導を受けることにしている。たまたま、世界コミュニケーション年、生徒の反応は早くすでに校内行事にも組み入れ、夏の受講を楽しみにしている。知・徳・体の調和的発達が本校の教育目標であるが、気づかなかったことに気づく心やさしさ、感謝の気持ちを育てていきたい。私事で恐縮であるが、あいにく昨年末より眼をわずらい日に日に視力が落ち、身体に限界を感じつつ周りの人に支えられて何とか頑張っている。

#### おわりに

勤労体験学習という名のもとに、本校（葺合）でもリフレッシュ、グリーン、クリーン活動が展開されている。クリーン活動の通学路の清掃に参加する者は喜々としてやっている。しかし、校舎内のゴミは一向にへらない。それどころか教室がやつのこと、廊下の清掃はそしらぬ顔、「偽善だ」との声もささやかれる。ホームプロジェクトや学校家庭クラブの活動がこのクリーン活動とは違うといえるだけのものはない。突出した部分だけで終わらない、日常生活に対する姿勢、生きざまに連綿とつながるものでなければならぬ。特に学校家庭クラブ活動については、地域と学校の実状に応じたとらえ方で、活動もひと味違ったものを出しているのではないか。それによって得るものと失われるものを曇りのない眼で正視したい。乞ひ批判。

（入江一恵―神戸市立葺合高等学校、青木郁子―神戸市立兵庫商業高等学校、町田道子―兵庫県立長田高等学校）

## 新しい家庭科を創るために

\* 大学では \*

佐藤 慶子

### 「家庭科大好き」と 言われる先生を

「家庭科教材研究」は本学（山形大学）ではⅠ（総論）二単位、Ⅱ（各論と演習）一単位を前・後期にそれぞれ履習することとしている。教員採用数の少ない県の現状から、中学校課程の学生も多数受講するこの授業は常に満パイである。受講生はおよそ三百名、Ⅰはこれを二組に、Ⅱは四・五組に編成して授業を行っている。

ところで、私は昨年から教材研究を担当している新米教官であるが、家庭科を客観的に研究している立場と、教師を養成する立場ではやはり視点が違うことが相当あると気づかされる日々である。

一、男女の履修差、やはり壁になる  
というのは、男女の中・高校での家庭科の履修の差がやはり多面的な問題を持っていることに改めて気づかされるのである。

私も、学生に「私の受けた家庭科教育」についてレポートを書か

せるが、男子学生の場合、家庭科は小学校五・六年次のみの履修で、はるか忘却の彼方に記憶が遠ざかっている。このことは、当時の授業が良からうと悪からうと、思い出して批判したり、検討したりする対象になり難いことと、初歩的な家庭科教育での認識もきわめて希薄なものになってしまっていることを示している。

たとえば、五大栄養素とその栄養素を多く含む食品名が混同としていて、栄養素のごく基本的な働きがわからない。もちろん、受験戦線を突破してきた学生たちだから、決して不勉強なわけではないだろうし、理科、家庭科、保健などで栄養の知識に何度かふれてきているに違いないのだが、定着した認識になっていないわけである。

家庭科の間口は、ある意味で主要教科以上に広い。衣・食・住や家庭経営についての基本的な認識と言っても、それは実のところ膨大な量である。小学校で扱う家庭科の教材がいくらか初歩的なものばかりとしても、教える側は、衣なら衣の、食なら食の教材論をそれなりに豊富に持っていなければならない。それは、大学の通年の教材研究のみで得られるもののだろうか、それが男子学生を見ての私の不安なのである。

この点は学生自身も自覚しているらしく、「家庭科関係の授業はほんとうにおもしろい。前の方で熱心に授業を聴いているのはどうも男子に多い気さえする。しかし、これまでの授業体験の少ない男



子学生が将来、家庭科を教えるためには、家庭科関係の授業をもっと豊富に学びたい」という感想も寄せられている。

せめて、中学校、高校で男子にもう少し家庭科を学ばせてくれれば、これが教材研究を担当しての切なる感想のひとつである。

## 二、女子学生の驚き

では、小・中・高と家庭科を学んできた女子学生はどうであろうか。実は女子学生は女子学生で別の感慨を持つようである。

教材研究Ⅰでは、家庭科教育の歴史について二・三回講義しているが、戦後の家庭科教育が、戦後の指令部の民主化政策の流れにかかわって、「技能教科でない、女子教科でない、家事・裁縫の合科でない」三否定の下に新生したことを話す時、女子学生が思わず、よめくのである。

その瞬間のことをある学生はこう書いている。「私はそのことを聞いた時、思わずあっと声をあげたのではないかと思う。私の受けた家庭科教育のほとんどは、技能学習であり、女子教科であり、その内容は料理・裁縫だったからである。家庭科はそういう教科であり、私もそういう家庭科を教える立場になるのかと思うと、実用的であるとは言え、積極的になれないこたわりがあった。ところが、そうではなかったのか、という驚き、それなら、どういう家庭科を教えればよいのかという疑問、私は、その時から思わず身を乗り出したのだ」。

女子学生の多くが、家庭科は今にして思えば役に立っている部分も多いし、何しろ調理実習は楽しかった、と評価している。しかし、日ごろ目にしなかった実践例などを教材研究の授業で見ると、

家庭科は学ぶ側の主体性を尊重し、また科学的成果を取り入れた楽しい授業がたくさんあることに改めて驚く。

そして、自分が教壇に立った時は、家庭科の授業をもっと工夫・研究してゆきたいと述べている。この意欲をどうか失わないで、と私はそれを読みながら思うのである。

## 三、楽しい授業のはき違い

しかし、学生が考えるところの「楽しい家庭科の授業」のイメージは、よく聞いてみるときわめて脆弱なのである。たとえば、ある学生は、授業を楽しくするために、野外に生徒を連れ出して、そこで芋煮(里いも)と牛肉の入った汁で、山形の郷土料理のひとつを試みてはどうかと書く。ある学生は、分量を適当に生徒に按配させて調理させ、試行錯誤的においしい料理法を見つけてはと書く。

このように、雰囲気を楽しめばよいのであろうか。答はいくらまでもなく「ノー」である。楽しいというのは、知識や技能の発見・理解・習得などによって、知性や感性が躍動するところにあるのである。そのために教師は生徒の認識の展開過程を研究し、周到な題材選定と授業計画をもって、生徒に発見のよろこび、達成の満足を得させるのである。

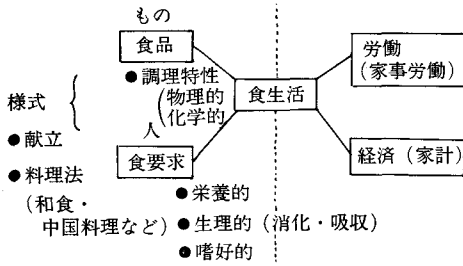
つまり、生徒が楽しいと思うまでには、教師の側に莫大な研究と努力が求められているわけである。

学生に自主的に研究させた模擬授業の計画は、やはり、ベテランの教師が集団的に研究した実践例とは比較にならない差があることが改めて認識された。

四、教材論は構造的に  
 では、生活(消費過程)における科学的認識を育成するために、私たちは教材のどのような点に着目していったらよいのであろうか。たとえば、食生活の領域について、私は次のような点をあげてい

る。  
 その基本は、食生活を形成している「もの」と「人」の対応関係から、まず次の点を抽出しているのである。図のように、食生活における「もの」とは「食品」であり、「人」においては「食要求」と見なすことができる。

「食品」について、私たちが注目するのは、主として食品の物理的、または化学的な調理特性である。一方、「食要求」においては、



栄養的要求・生理的要求・嗜好的要求があげられねばならない。

このような要素で、人間が食物としてきた主要な食品や料理に注目してみることとなる。

米・小麦などのでんぷん食品、魚・肉・卵などの動物性たんぱく質食品、大豆とその加工品よりなる植物性たんぱく質食品、ビタミンやミネラルの給源となるところの野菜・海藻・牛乳などは、一応ふれておかねばならない食品であらう。

この食品と食要求、つまりものと人、とが対応したところに、食事の

様式、料理の様式といったものが文化として形成されてくることになる。献立とか料理様式とかというものの性格をそうとらえさせることにしている。一汁一菜とか一汁三菜という様式の中に、食品の取り合わせ、食品の特性を生かす調理法、生ものと加熱調理の組み合わせ、汁と菜の区別などとして、食品の特性を食要求が巧みに組み合わせていることが理解される。

とくに、郷土料理といわれるものを例に取ると、気候・風土や産物、その地域・季節の労働状況と合わせ、食物がおいしく加工・調理された知恵が発見されて学生の理解を深めているようである。

さて、食生活が自給自足のな状態であった時は、ものと人との対応関係を単純化して考えることができる。が、食品のほとんどを購入している現在の生活様式のもとでは、食生活を構成する要素として労働(家事労働)や経済(家計)といった側面があることも知らせておかねばならない。

そこで、農業労働が中心であった時には、年間単位で家事が運営されており、山菜の採取や漬物づくり、みそづくりなどで集約的に家事労働が行なわれていたこと、雇用労働の下では、そのようなゆとりがないこと、そこでいきおい、既製品・加工品などの利用が普及するが、そこには安全性の問題が発生しやすいこと、その意味で、家族の参加や集団的な取り組みが食生活の健全と文化を守る上で欠かせないこと、などに着目させている。

五、技能はまずしくみを理解させることからしたがって、いくら、生産技術が消費技術を吸収するようになる

としても、消費過程のための知識・技能の必要性がなくなってしま  
うわけではない。

私は、技能が熟練できるまで学校教育で徹底できるゆとり  
は今のところないと思うが、理解できるまでには到達したいと  
考えている。

そこで、たとえば、衣生活の領域では、運針は熟達しなくても、  
縫い目を観察させて、針と布と糸の対応関係を十分頭の中で理解で  
きることを、刺しゅうやボタン・スナップつけ、返し縫いなどの時、  
用いる刺し目は、並縫の目とどう違っているのか、ミシンの縫い目  
ではどうか、針、指ぬき、指の関係をどう調整すると並縫ができ、  
二枚の布をしっかり縫合できるか、を理解させている。

今でなくても、技能のしくみが理解できそのイメージが描ける  
こと、それが技能を習得させる第一歩ではないか、と仮説を立てて  
いるのである。

#### 六、教材観を豊富に

さて、たとえば、算数の四則計算を教える際、その方法や教材観  
が何通りも出てくるということは考えられないが、こと家庭科につ  
いては、教材観には相当の幅があり、教え方も一通りではない。こ  
の家庭科の特性を生かして、私はたとえば炊飯学習ひとつをとって  
も、どこに主眼をおくか、何を教えるか、の多様さに気づかせる。  
ある班では炊飯方法の歴史や外国との比較に着目して、また、ある  
班は吸水実験に着目して、また、ある班は火加減を観察して、また、  
ある班は電気釜のしくみとナベ炊きを比較して、……という具合に、  
視点を少しずつずらせて観察・検討させると、教材の見方に幅が出

てくることが確かめられる。

#### 七、柔軟な心大切に

わずかな授業数で扱う教材研究は、現場での研究に比べれば所詮  
ままごとのようなものではある。しかし、家庭科をめぐる生活の  
認識や初歩的な生活技能に男女とも触れること、それは大学生の素  
養として画期的な刺激を与えるのではないかと思う。

今まで見落していた消費のための労働、豊かな生活といわれるも  
のの矛盾、男子学生の多くにとって、初めて気づく点が多いだけ  
に、彼らの価値感や生活行動に与える影響は少なくないようである。

とくに、終了後のレポートの多くに、家庭科の男女共学について  
触れたものが多く、家庭科のもつ教育的意義の深さを考えてみる  
と、せめて中学校・高校でもう少し家庭科の学習を深めたかったと  
思う、と述べているのが目立つ。

現場教師の多くが家庭科の中・高校における共学に尻ごみしてい  
る現状からして、若い心の持つ柔軟性は驚くばかりであり、そこに  
鉄を入れるよろこびは、やはりこの授業ならではのと思わせるものが  
あるのである。

(山形大学)

## 男女共修を目ざした

### 「保育」の授業と考察

(2)

梶原 公子

#### 五、「性」を社会科学的にとらえる

ここでは四の知識を基底に、性差別の歴史と現状を認識して、男女平等の根底は「男女が性的に平等であること」を考えさせたい。

性差別の歴史は、性の商品化の歴史でもある。それは現在でもなお様々な形で商品化され、社会に許容されている。授業前に、ディスカッションさせたところ、「他人に迷惑をかけなければ売春はやつても良い」「お金を稼ぐ点では、売春も他の労働と同じ」と言う者が多かった。そこで「売春」について班研究させると共に、私も性の商品化に関する資料を用意し授業をすすめた。

(1) 性はどんな形で商品化されるか

#### 〈例1 観光売春〉

生徒は観光買春の実態をほとんど知らない。そこでその実態と韓国、インドネシアの宗教団体から日本女性への抗議文を引用し、買春ツアーは「日本男性のアジア女性たちへの性の侵略。性の搾取」であることを指摘した。考えねばならないことは、買春男を育てた母親としての女と、買春夫と暮らす妻としての女の立場である。母親について言えば、日本の伝統的な母性観にとらえられていること、妻について言えば、経済的理由から離婚に踏み切れぬ立場の弱さと、利益本位の企業ゆえに夫を制止できないことがあげられる。

このような女の苦しい立場にフタをして、容認し続ける社会にも問題があると言わねばならない。一九五六年、売春防止法が制定された時、「赤線がなくなったら、青少年の性のはけ口がなくなり、性犯罪が増え、良家の子女が犯される」との反対論があがったこともそれを物語る。

#### 〈例2 からゆきさん〉

山崎朋子著『サンダカン八番娼館』を紹介し、内容を若干引用する。日本近代の東南アジアへの身売りは、一家の生計を女の性を代償にたてたことであると指摘する。

#### 〈例3 戦争における性〉

「お国のために」という美名のもとに、性を犠牲にさせられた従軍慰安婦の例、第二次大戦時の大陸での日本の侵略について話す。ここで教科書問題とからむ「侵略と進出」についても指摘する。更に沖繩での悲劇を真尾悦子著の『いくさ世を生きて』を紹介しながら話す。そして敗戦後の米兵相手の売春について、高校生にもよく読まれている森村誠一著『悪魔の飽食』の内容も紹介する。

#### 〈例4 纏足〉

池本義男『纏足考』（岸辺成雄編『革命の中の女性たち』所収）をプリントする。失神寸前の苦痛を伴って作った纏足は、女の歩く自

由を奪い、一生の負荷となり、女を家に縛りつけた。がこれは、朱子学からくる婦徳であり、柳腰の楚々たるものごしが女性美であったことに注目したい。生徒たちは「現在でも美しくなろうとして人工整形したりしているが、これは縄足とあまり変わらない」。「すばらしい縄足をしていることが、自分の地位（稼ぎ先）を決め、性的興奮の対象ともなった。だから失神寸前の苦痛に耐えてまでやったのだと思う」と感想を言う。

それから、中国封建社会には、買春結婚—童養娼・等郎娼—が行われていたこと（貧乏人は、嫁を買う費用がなかったので、息子のために女の子の赤ん坊を一歳につき、麦一石で買った。もっと貧乏な者は、男の子が産まれるのを見こして女の子を買っておいだ）。

## (2) 「高校生の売春」

これをテーマにした生徒たちは、警察に行き、高校生の売春に関する統計や話を報告した。現場を貸した人は罪になるが、本人は被害者となるので、高校生の数ははっきりわからない。しかし、性非行で補導される数は年々増加している。その動機は遊ぶ金が欲しくてというより好奇心からというのが多い。又、自らすすんでより、誘われてのほうが多いと言うことだった。そして、高校生から見た売春を取り上げた本の話をする。「売春でつかまった女子学生が『売春をしてなぜ悪い。自分の体で働いてお金をもらうのがなぜ悪い』と聞き直っても警察は説明できず、結局損得で話をしてしまうそう。私もあるのがきくと思う」とあったが、「自分の身体だから良いのか、好きだから良いのかを考えた。売春は損得を含めて、人間的な考え、行動、理性に反する、色々な例をあげたけど、私たちの班はやはりいけないことだという意見になった」と話した。

更に図書館などで「売春の歴史」を調べたものもいた。「性の商品化」に関し、全員に感想を書かせたところ、色々な意味でショックだったようだ。それらを総括すると二つに要約できる。

①「性」は売りものではない。女の身体の一部で女自身のものだ。売るのは女を人間でなく物扱いにしている。人間としての自覚をなくすものだ。

②女は長い間、男の支配下におかれ、その犠牲になってきた。これは女の地位を男より一つ低いところにおき、今もそれは続いている。

私はこの二点をふまえて、ここでのまとめとして、昔と現代の売春の違いを考えながら「現代売春考」を取り上げた。新憲法制定以前までは公娼制があり、国がこれを援助し、税金さえとっていた。男は結婚前も後も自由に遊べたが、女は結婚前は不良と言われ、後は姦通罪となった。女には自由がなく不平等だった。この事実は、エンゲルスの指摘するように一夫一婦制の単婚家族に端を発し、「娼妾制と姦通は社会制度」であり続けた。現代では、トルコ風呂やポルノが、そして氾濫するセックス産業が女郎屋の代わりをしている。

松田道雄は『恋愛なんかやめておけ』の中で次のように書いている。「男の子の善意悪意を越えて、いまの女の子は女郎の代わりをさせられる危険のあることを知らさねばなりません」。そしてフリーセックス、性解放と叫ばれ、好きなら良いと考える高校生に、「フリーは無料の意味ではない」と述べる。高校生は、トルコ風呂やポルノなど、女性の性を快楽の対象としてのみとらえる大人の社会を見て、自分たちの「性」を考えているのではないだろうか。

## 六、「高校生の愛と性」ひとつの結論

ここで今までの「性」に関するひとつのしめくりとして、女性の性は受け身で守られる性であるという一般的考えに挑戦する。

高校生も含め、人間にとって「愛と性」は不可欠なものである。その一つの結果として「結婚」という社会制度も存在する。故に、これらは一連のものであり、個々に切り離して考えたり存在するものではない一方、ある時は「性」や「結婚」のみが分離した形で存在したりする。だから、この件に関しては「結論」はあり得ず、ひとつの私見を述べるに過ぎない。

しかし、あえてひとつの結論を出したいのは、「愛と性」「恋愛と結婚」を「人間の生き方」という考えに置換し、性差別と解放されない女性の生き方を問いたいからである。又、現代の高校生に欠落しつつある生命の尊厳、産むことに対する軽い考えを問い直したいからである。その人のもつ「愛と性」の考え方が、その人の恋愛や結婚をどのようにするかを決定する一つの大きな要因となると思う。恋愛から結婚が派生するのか、恋愛の結果として結婚がなくてはならないものか、あるいは両者は別個なものとして存在し得るものか、という論議はもっと章を改めて成さるべきである。まだ結論は出ていないし、今後もし明解な答は出されず、もし出たとしても公式のように万人に向く答はあり得ない。更に「結婚」に関しては、一つの社会制度であるがゆえに、「個人の性の方向性」とは異質な、もっと社会的要素を含んだものである。又「家族」を形成してゆく点を考え合わせれば、歴史的な、現代の社会性や政治のあり方とも相関してゆくものと考えなければならない。

以上のことを踏まえて、ひとつの結論を生徒と共に考えたい。

「恋愛と性」についてレポートした班は、性に対する直接的な関心・欲求の違いとして、「女性は静止的・受身であるのに対して、男性は能動的・攻撃的である」と書いてきた。そして今の高校生にとって「性」は手をのばせば届くところに日常的にあるという。女性には「性」に関し、ロマンチックな恋を見、男は恋愛を抜きに「性」のみの関係に入っていくやすい。生徒は『愛と性の十字路』からのデータを引用し、「女性は精神的な意味での関心が先行し、男性は肉体的関心が先行する」と解説し、「みなさん、男のあまーい言葉なんゾにはゼッタイだまされないようにしましょう」と結論づけた。

松田道雄は「恋愛なんかやめておけ」で次のように述べている。「男ばかりが得をする世界で恋愛ばかりが平等だと思ふな」、「女性に性的に受身で、しかも妊娠・出産を負わされているから」と。

私自身も高校の保健で同様の訓戒を男教師から受けた記憶がある。女は受身だ、だから夜道をひとり歩きしたり、レイプされたりするのは十分氣をつけろ……と。「男は攻撃し、女はこれを感じて受ける」の図は多くの社会に容認された認識である。女の子すらこれを容認し、男にヘンな警戒心を持てと教育される。それが今の保健の性教育だ。そして男の一方的な攻撃的・能動的な性行動は、人々の意識や社会に易々と受け入れられている。「自分の性の衝動が御し切れなかった……」との言い訳で、女がその犠牲になったり、それにおびえて避け続けることが肯定されて良いのだろうか。「能動的・攻撃的」をタテにとって、男を正当化するとしたら、男の動物的「性本能」のみを是とし、これをコントロールしたり、制御したり、そうした行動を罰したりすることは否とされる。更に女の受身で従順な性行動を是とするなら、女の能動的な自由な生活

行為は否とされる。保健の授業で「女は受身、男は能動」の図式の教育は是非訂正してもらわねばならない。女の子の男へのヘンな警戒心をなくすためにも、レイプを恐れて夜道をひとり歩きできぬ不自由な女の生活を作らぬためにも、そして男と女の性に関して、あるいは性だけでなくあらゆる関係において、主従を作らぬためにも。これと同様な見方を中山千夏も『からだノート』の中で言っていると思う。「性交は人間にとって男女のコミュニケーションである……。そして性交と妊娠、出産を別の次元で考えることができる」。コミュニケーション……互いの意志の伝達をしあうのに男ばかりが情報を送り、女が一方的にそれを受けてばかりいる状態、これでは真のコミュニケーションは成り立たない。一方が意志を伝えれば、一方はこれを受け、それに対する返答なりを伝え返すものだ。性交に関しても男の一方的な攻撃や能動で成り立つものではなく、女との相互の関係によって成り立つものだ。

高群逸枝も『女性史研究』において述べている。「妻が男性の所有物ではない、このような時代には、女性性は性においても主体者であって、それは全く自然の摂理に基づいていた」。これは女を出産の主体者としてみると同様、性にあっても主体者としてとらえている。女が受け身となったのは、私有財産発生後の父権社会の所産であり、それが女の本質ではないことをはっきり認識するべきである。女を受身的立場にしておくことにより、男が優位に立ち、支配してきた社会的歴史的な意図を見のがすべきではない。

岡田秀子は『反結婚論』で、「現代の女の子は守られる性、受け身の性として自らを認めたがらない……。彼女らが傷つきながら模索していることは、彼女たちが男女関係で主体的でありたい、とい

うことだ」と述べている。これは高群逸枝の論と一致する。しかし、現実はおもも封建的な性意識がこれを阻んでいる。「男女関係で主体的であること」は、女は男にリードされるもの、女は男の言いなりになるもの、女は男の下うけの仕事をするもの、女は男より劣っているものという意識を捨てることである。女もひとりの自立した人間であること、である。岡田秀子は「性は男と女にとってはお互いに自立した人間同志のコミュニケーションをつくっていくもの」と述べている。しかし現実的には、女は社会で差別されている。人間として主体的であり続けるには、今後多くの問題が残される。この項の最後に、日本の女性解放史の中から、平塚らいてうをあげ、彼女の思想を述べることにし、彼女ら生徒のひとりひとりに女の生き方を問うことを課題としたい。

明治以前、儒教や「女大学」により、女は無知で人間並みではなかった。明治になり、はじめて安倍磯雄が「婦人は男子の不品行に極力抗すべし」と述べ、女が自立した人間として主体的に生きてゆく考えを示唆し、多くの女性解放論者が出た。が明治はまだ封建色の濃い家制度ががっちり女を縛っていた時代であった。その中で「女の自立」を堂々と唱え、エレン・ケイの思想を汲んだ母性保護を訴えた人に平塚らいてうがいる。「原始女性は太陽であった。真正の人であった。今女性は月である。他によって生き、他の光によって輝く、病人のように蒼白い顔の月である……」。

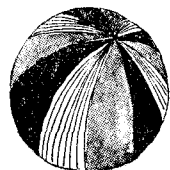
かといってもはや時代を原始にもどすことはできない。高群逸枝は、婦人問題解決の一端を次のように述べている。「共産制と母系型の族制を有する原始共同体の高次の復活においてしか究極の解決は期待されないのであろう」。(静岡県立御殿場高等学校)



## 視 点

〈不条理と  
たたかう知恵〉

長谷川 孝



《教師が不条理なことをしたら、その教師をぶんなぐったっていい。だけど、ぶんなぐるといふのは最後の手段だから、それをやらに使用してしまわなくてもいいように、もっと知恵をつける。不条理——人間として許せないこととたたかうためにこそ学ばなければ、自分の一生が不条理によってつぶされてしまう》

横浜市の寿町で開かれた、あの「浮浪者」襲撃事件をめぐるシンポジウム（'83.5.29）に参加して、ふとこんなことを考えていた。

この事件をめぐる議論していくと、どうしても差別——いじめの構造が不条理と言及せざるをえないのだが、この差別——いじめの構造が不条理としてどれほど意識的に認識されているかを考えると、子どもたちも教師たちも父母（労働者）たちも、あんたたる状況なのではないか。あの事件のあとの社会的風潮をみれば、学校や警察や市役所や一部の言論や街の人たちの行為はむしろ、少年たちの行いを追認していると思えない。「弱りめのやつをたたく」のは、不条理などではなく、健全な市民の権利でさえあるごとくだ。

強い者に対して、弱い者が手を結んだたかうという、歴史のなかで民衆が手にしてきた知恵と誇りは、今やなきがごとくになっている。弱い者が群になって、強い者に従属し、より弱い者を襲う。「連帯」とは「群になる」ことにすぎなくなっている。不条理を不

条理と思う感性がなえてしまい、弱いこと自体が「不条理」であるかのようだ。だから、強い者につながり（従属し）、より弱い者をいじめ差別するという不条理によって、自らの「不条理」（弱いことなど）を解消しえたと錯覚する（したい）のだろう。

考えてみると、一応強い者に弱い者が歯向かっている現象は、ツッパリ生徒による対教師暴力（反学校暴力）ぐらいしか、最近では見当たらないような気がするのだが、どうだろうか。どうも、教師への生徒の暴力行為は、こう理解しておく必要があるに思う。

しかし、連帯の心も知らず、たたかひの知恵もなく、という感はあるのしようもない。だから……、と冒頭に書いたようなことを考えたわけだ。

私は、子どもたちに、不条理とたたかう感性と知恵をもってほしいと願っている。だから息子（小学校五年生）が、たとえば教師の不条理にいかって教師をなぐるといえば、少なくとも不条理に憤っていることをうれしく感じ支援する気になり、教師をなぐることとも一般論としては肯定する、と思う。だが、だからといってけしかけるわけではない。一緒になって、たたかひ方（作戦）を考え、より有効で論理的なたたかひの支援を組むようにするだろう。不条理に憤っていることを励まし、たたかうためには学ばなければならず、



たたかうことで学べることを知らせたいと思う。子ども同士の差別やいじめも同じだ（念のために、去年もことしも息子の担任は信頼できる人だ）。

今、高校一年の娘が小学校六年の時、同級生の男子何人かの自宅の電話番号をメモした紙片を手に、抗議してくれといったことがある。一年生のきょうだい学級との行事の計画で、娘を含む女子何人かがいじめられるゲームが仕組まれ、押しきられた、というのだ。そこで親がのり出して、やめさせてほしい、というのである。

私はまず、「じょうだんじゃないよ、そんなことに親が出ていけるか。自分でやんな」と拒否した。そして「相談になら、のってやるから」といって、「担任の先生と話し合ったのか」と聞いたら、「先生はやさしいから、頼りにならないんだ」という。「そうか」というわけで、作戦を一緒に練りはじめた。

結局私がいったことは、いじめられる側の女子たちが話し合って、団結してたたかえ、ということにすぎない。あとは、たまたま一年生のクラスに弟がいて、担任教師もしっかりした人だったので、弟の「決起」計画や担任教師への「支援」要請の手紙などを「必要なら使え」と準備して、「ポスターを作って学校中に貼るという手もあるぞ。校長室の前の廊下の壁にも貼っちゃえ」といってやった。それまで、ちょっと「必死の形想」だった娘は、ニコッと笑って「バーカ。そんなことできるわけないでしょ、校長室の前なんて。でも、自分たちでやってみる」といって、ふとんに入った。

いく日かして「どうだった？」と聞いてみたら、学級会でひっくり返すのに成功したらしく、準備した「道具建て」は使わずに片付いていた。「みろ、自分でやればできるじゃないか。あんまり親を

頼りにすんなよ」と私はいった。娘はたぶん、自分でできる、という気持を多少はもったのではなからうか。

娘は、生まれて二カ月のときに、治療が少し遅れたら命にかかわるといふ眼病にかかり、良い医者に恵まれて大手術を受けた。そのため、父親に似て細い目が、手術したほうだけがパッチリと大きめになった。しかも視力が落ちて、アイパッチ（目をふさぐバンソウコのようなもの）を視力のいいほうの目に貼ったり、治療用のメガネをかけたたり、という日がつづいた。「目がびっこ」といじめられ、メガネをからかわれ、ずいぶんかわいそうなことがあった。

よく、いじけず、ねじれず、ちごこまらずに成長してくれたと思う。父親ができたことなど、思い返してみると、あまりなかったという気がする。ひとつ私を感じていることは、彼女の多少ズボラでアッケラカンとしてお調子屋で少しばかり気の強い性格が、プラスの効果をもってくれた、ということだ。ここにあげた性格は、必ずしもプラス評価を与えられないのがふつうかもしれないが、人間の性格はプラス・マイナス裏表だと思う。プラスに働くように、どう励ましたらいいか、が大事なのではなからうか。

ともかく、親は子育てに懸命だが、子どもは自分で育っている。子育てである。子育てのおしきせは、子育てを妨げかねない。ダメな親のほうがいイ親であることもあるが、それが弁証法なのだ、と私はダメ親に居直っているが、いじめやイヤな思いに耐えて育ってくれた娘には、ある種の敬意を抱いている。

冒頭のことばも、息子の育ちへの励ましとして、いつか語りかけたいと思う、私の気持なのだ。まあ、どっちかというと、親の私が励まされているほうが多いのかもしれないけれど。（教育評論家）



# 霞 通 信

武田 秀夫

## 家 の 中 の 教 室

「玲ちゃんのお父さん、ロシア語ができるんですってね」と近所の人に言われたと下の娘がきょんとしています。私も思いがけないことを言われてやはりぽかんとしていましたら、妻が、「武田さんのダンナ、ロシア語を教えてるんだねえ。お宅の前を車で通りかかったら看板が見えたよ」と同僚の教師に言われたと笑っています。どうやら霞国語教室という看板が遠目には「露国語教室」と見えるらしいとわかって合点が行きました。が、玄関の上のモルタルの壁に打ちつけられたその看板にはさらに小さく「子どもから大人まで」「少人数制」という二本のキャッチフレーズが書き込まれてあります。

その「大人」のグループは、「宮沢賢治」にひきつづいて「夏目漱石」を読みはじめているのですが、大正元年生まれの私の母もそのメンバーの一人で、金曜日の午前になると、すぐ裏の家から教室に顔を出します。「私のような年寄りが若い人たちの中に入っているのは照れくさいし、お邪魔でしようけど」と遠慮がちに言う母に、若いTさんやOさんが、

「そんなことないですよ。おかあさんの話をきいていると、ぼくらの知らない時代のことが具体的にわかって、とてもおもしろいですよ」と、あなたがち外交辞令や敬老精神からでなく応じる、そんなふうにしていつのまにか一年が過ぎようとしています。

母にしてみれば、不惑を過ぎた息子がなにを思っかわざわざ教師をやめ、二人の娘もまだ仕上がついていないのに人が集まるかどうかともわからない「国語教室」などというやくざなことを始めてと、さぞはらはらしていたことと思います。ですから私は、七十をすぎた母が息子の教室の「生徒」になる気になったのも、「枯木も山の賑わい」といったつもりで、——いや、わが母を枯木あつかいはいかにも不穩当ですから言い方をかえれば、よく街で見かける例の「祝御開店」という景氣づけの花輪を贈るようなつもりでだったろうとひそかに思っているのです。それかあらぬか、賢治を読みはじめた当初、母は、「なんだかこの人のものの感じ方って気味がわるいところがあって、好きになれそうもないよ」と言っていました。が、やがて、「宮沢賢治という人にこんないろいろな面があるとは知らなかった。勉強になるし楽しいよ」と言うようになり、とうとう一日も欠かさずに「銀河鉄道の夜」まで読み通してしまいました。

漱石は「三四郎」から読みはじめていますが、上京中の汽車で知り合った工員の妻と三四郎が名古屋で同宿し一つ蚊帳の中で寝るところで、三四郎が風呂に入っているとその女が「ちいと流ししましょうか」と帯を解き出す場面があります。私たちがいまの時代の感覚でああでもないこうでもない議論していますと、母が、「でもね、むかしは身分の低い女が男の人の背中を流すのはむしろ当然だった

ようなところがありましたからね。腰巻くらいは着けてでしようけど」と言ったりします。そういえば、つい先日観た映画「エポリ」の中でも、イタリア南部の貧しい村に流された主人公の画家の背中をイレエネ・パス扮する洗濯女が洗い流していたっけなどと、私もついつられて話題がそれていきます。

「三四郎」の第三章には、大久保にある野々宮さんの家でひとり留守居をしている三四郎が、夜更けに、轟と鳴って孟宗藪の下を通る汽車の音を聞き、女の轢死に遭遇する印象的な場面がありますが、牛込の大工の棟梁の娘として育った母の話によって、私たちは、その当時の「まるでララミー牧場のような」新宿駅周辺の様子、野々宮さんの家があったとされる仲百人町あたりの様子を知ったりします。賢治を読んでいた時にも、たとえば羅須地人協会の活動に関連して母から「あのころは東京にも青年の修養団のようなものがないぶんあってね、私なども子どもの頃、そこに行つて幻燈を見せてもらったり、合唱を教わったりしたものです」と言われると、東北の農村にあって孤立していたかに見える賢治の活動が、実はその当時のそうした社会的風潮に意外な臍（へそ）の緒をつないだものとして見えてきて、なるほどと思わせられたりしました。

こうして週に一度、国語教室という場で母の話を聞いていると、息子の私はじめて聞くようなことが次々と出てきます。そして、いかにいままで自分が母の話を少ししか聞いてこなかったかを思い知らされます。

思えば、すでに私は、同じことを父について感じたことがあったのでした。

私の父と、私は、多くの日本の息子が経験してきたであろうよう

な対立を、十代の後半に経験しました。しかしそうした対立の季節のある時期に訪れる小春日和のような和解的気分には満ちた日々に、私は、一合の晩酌に陶然となった父の思い出話に素直に耳をかたむけ、ひそかにそれをノートに記録したことがありました。天竜川のほとりの村に育った父の少年時代の興趣あふれる話は、一種の「話巧者」であった父の語り口とともにいまでも私の裡にあります。が、私は、あまりに少ししか父の話を聞くことができません、四年前、父をうしなしました。その後悔を母についてもやはり繰り返すことになるのでしょうか。それでも過に一度、こうして少々改まったかたちで母の話を聞くことができるのを、おくれげながら、たいへんありがたいことだと思っているのです。

私の妻もこの五月からもうひとつ別のグループに入つて日曜日の午後、漱石を読みはじめていますが、時々、作品批評に事よせてチラチラと男の好い加減さを衝いたりして、私をどきりとさせます。

下の娘はわが国語教室創設以来の熱心な生徒でしたが、六年生になった四月、いろいろやりたいことがあるからと退塾を申し出て、小中学生としては最初にしていまのところ唯一人の退塾生となりました。ただし、お茶の時間になると、ちゃっかり教室に顔を出してかつての同窓生とおしゃべりをしています。——。そうした中で、中学二年の上の娘だけは私の度重なる勧誘を歯牙にもかけず、いつも「いえ、御遠慮させていただきます」と丁寧な笑顔で入塾を拒んでいます。

ともあれ、私が塾を自宅で始めたことによつて、家族という私的な領域にもある変容が生じつつあるようで、私はそれを興味津々、今後も見守っていきたいと思っています。

「ねえ、きいてよ。オフクロったら、オレに台所の仕事いっさいやらせねえんだよ。男はしなくていいって妹にばかりやらせるんだ。オレ仕方ないからさあ、オフクロのやること盗み見てるんだ。いつか自分が自炊するときのためにサ」

——お母さんは専業主婦なの？

「いや働いてるよ。ウチはオヤジが中学のとき家を出てったからサ、母子家庭なんだ」

——だったら、手のあいた人が家事をやるようにしたら、お母さんもラクなのよね。

「ダメダメ。オヤジもオフクロも、家柄



だとか家系だとか長男だとかにこだわって生きてきたんだから、いったん身につけたものは変わらないよ。オレにしたらそこが一番ガンだと思っけどサ」

——そういうお母さんに育てられて、よく「オレは男だ」という意識にならなかったね。「いや、オレも子どものころは男に生まれたら何か特典があるとズーッと思ってきたよ。国から金が出るんじゃないかねえかとね。けど、オヤジが出てったときがオレの転換点だった。何かに縛られて自由にモノがはいえないのはオ

カシイじゃねえか、と中学時代は学校に教師にオトナにレジスタンスしたからね。男だつて、特典なんかない、ただの人間だってわかったよ」

H君。自由な校風を謳う都内の私立高校（男子校）の三年生。内申書裁判の原告である保坂展人さんらがつくる青生舎に毎日のように出役し、青生舎発行の「学校解放新聞」紙上でイセイのいい弁舌を披露する。ただし匿名。親にバレたらまずい。親はそういうと

ねえ、きいて……

家族を変えないと

ぶじしようもない

宮 淑子

ころに高校生が足を踏み入れるのを歓迎しないから、という。

「オレさあ、ジョン・レノンが死んでから、彼に急に興味をもったんだ。そして、彼の生き方を知って共鳴したんだ。あのヒト、主夫をやってたんだよね。スゴイよ。ホラ、「スターティングオーバー」という曲があるだろう？ 生き直すっていう意味なんだけどサ。七〇年代は男の解放で、女の解放はなかった。これからは女の解放だ、と彼はうたって

そんで死んじゃったんだよ」

——ホント。残念だね。でも、キミは学校の外でいろいろ学ぶんだね。

「ウン。オレの女性観変えたのも、青生舎に集まる女の子たちだぜ。だいたいオフクロ見ると、女ってこんなものかと思っちゃうけど、青生舎に集まる女の子って、型にはまっていけないからね。触発されるよ」

——じゃ、男と女の違いつてあんまり意識しない？

「しないね。男と女は、性という生理的な部分を除けば、あんまり違わないんじゃないか



と思うよ。家庭科なんかサ、この性のギャップを埋めていく方向へもっていったらいいと思うよ。オレ、基本的に家庭科の男女共修は賛成だけど、中身が問題じゃねえかと思う。技術的なこといくらやってもしょうがないよ。もっと、家庭とはなんぞや、家族とはなんぞやというところからやってもらいたいね。オレ、昼間、仕事もせずブラブラと街中を歩いているオバちゃんたちを見ると、ああ、家族を変えないとどうしようもねえって思うからね。

## 学習の 主人公たち



### 小・中学生の創作コトワザ

#### 〈老人〉

〈老人〉に関するコトワザといえは、「年寄りの冷や水」「老いては子に従え」「年寄りの繰り言」などというように、どことなく〈老い〉の消極面をとらえたものが思い浮かぶだろう。

しかし、さすがに前代の庶民は、〈老い〉の積極面を掬いあげることも忘れなかった。

たとえば、「年寄りの言うことは聞くものだ」「年寄りの言うことに間違いはない」「年寄り家の宝」という具合に。

むろん、全てに間違いがないのか?と問えば、一概にそうとばかりは言えないよという留保はつくだろうが、これらのコトワザの生まれた背景には、〈老人〉をめぐる前代庶民の無数の生活経験が横たわっているのであって、少なくとも、〈老い〉の諸相をうまく言い当てているといえよう。

つまり、経験の一般化されたものが、コトワザとして圧縮され、連綿と伝承されてきたというわけだ。

さてこのように、昔から伝えられてきたコトワザを、前代庶民の認識として、つまり現実認識の表現としてみたばあい、現代の子供たちは、〈老い〉をどのようにとらえ、どのようにコトワザ化するだろうか。

以下は、かつて小学五・六年の時にわたしのクラスで共にコトワザを学んだことのある中学二年生の何人かと、昨年のクラスの子供たち数人に、「年寄りや老人をテーマにして創作コトワザをつくってみてよ」と頼んで、創ってもらったものの。( ) は、わたしのコメントです。

植垣一彦(横浜市立日吉南小学校教諭)

石川正敏(中2)

● 老化気にして 廊下でこける  
あまり気にすると、かえってそれが悪い方になる。

(思わず笑いをさそわれる。「ハゲでなやめばまたはげる」は、石川君六年生の時の、ピッカピカに光る秀作)

● 年よりに冷や水

今の社会では、年よりに冷や水をぶっかけているようなものだ。

(伝承コトワザ「年寄りの冷や水」のみごとなパロディ化。しかもたったの一字、「の」を「に」に替えただけで、こんなに

鋭い現実批判をやったのけるとは、さすがなものだ)

● 老いても子には従えぬ

(これも、「老いては子に従え」をみごとに転倒させている作品。つまり、老人には老人の主体性があり、意地があるというわけ)

● ツエ贈る警察、ホームに送る息子

こつこつとツエを作って老人に贈る巡査もいるのに、老人ホームに親を送るやつもいる。

(石川君にとっては、老いた親を老人ホー

ムに入れるというのは、理念としては否定されているということなんだ)

前川正輝(中2)

●しわに厚化粧

その場だけを装うこと。

(いやはや、なかなかキビシイこと言うわい)

●老いてからの自殺

たいした違いはなく、むしろ何もしない方が結果はよい。

●老人、灰色に座らず

灰色とはシルバーシートのこと、老人の意地張りさを表した。

(シルバーシートというが、あれはどう見てもシルバー色には見えぬ。あまねく「灰色」に身をゆだねたくない老人の心根もわかる)

鈴木真由美(中2)

●老いるとうつる心のテレビ

年をとって一人になると、若い時のことや、あの時はもっとこうしておけば良かったなどと、いろいろ思い出すこと。

●老いるほど心細いことはない

(なるほど、鈴木さんにとっては、へおいゝる)ということとは「心細い」につながるん

だな。中2にして、いっきに老人の心境をとらえる——これ、経験主義の克服、コトワザづくりのプラス面なり)

●老いると思う次の人生

年をとると、今までの経験から考えて、今度生まれかわる時は、ああなろう、こうなろうと考えること。

(次の人生——輪廻の思想、子供は過去を保存する)

熊沢千晶(中2)

●老いてからの人生

これから第二の人生が始まるんだ。

(希望を与えるいいコトワザだ。その後ろには、人それぞれ、筆舌に尽くしがたいさまざまな苦労やできごとがあったということ)

本間律子(中2)

●老<sup>お</sup>り者の空は大きい

老人でさえ、空のような大きな夢や希望を持っている。私たちも負けずに、大きな希望を持とう。

(ポエジーを感じさせて、これもなかなかすてきなコトワザ。本間さんのおばあちゃんが、「大きな夢や希望」をいまだ語るのだから。「私も負けずに」ではなく、「私た

ちも負けずに」というところがいいなあ)

平沢 洋(中2)

(電話で)

——平沢です。今、新宿にいます。

……え!? なんでもまだ、こんなに夜遅く新宿に?

——今から、家族で尾瀬に行くところなんだけど、電車の中でコトワザができたから書きうつしてください。

……おつ、すごいじゃん。ちゃんとコメントも言ってくれよ。

●年をとっても荷は下りぬ

年とる前にもいろいろと苦労があるけど、年とってからやっぱり老後の苦労はある。

●年とってから金ためる

年をとったら、もうお金はためられない、つまり、手遅れっていうこと。

たかはし あき子(小3)

●年よりのもの知り

年よりは、長いあいだのけいけんで、いろいろなことを知っていて、さすがにもの知りだな。

●年よりも友だちあり

年よりも、ろうじんホームにすんでいる人

たちと友だちになったり、小さいときの友だちとかいる。

●（そういえば、あき子ちゃんは、元住吉のおばあちゃんの家に時々泊まりに行ったりしているナ。だから、あき子ちゃんのこの二つの創作コトワザは、いわば実感なんだろうナ）

岡村高志（小3）

●年よりにぬるまゆ

年よりには、おふろとか、どのくらいのおんががいいか、すきにさせろ。

（すきにさせろ——なるほどね。あまり干渉しすぎたり、強制したりするなってことね）

小森雄一郎（小3）

●若ものは老人には歯がたたぬ

若ものは老人に歯がたたない。つまり、若ものは老人よりけいけんが少ない。

（「けいけん」というコトバ、あき子ちゃんも使ってた。三年生で、すでに入っているんだな。たいしたもんだ）

寺戸麻実（小3）

●としよりにじまんはできぬ

としよりは、なんでもしているから、としよりにはえられない。たとえば、うちの

おばあちゃんとおじいちゃんは、ことわざもしってるし、いろんなことばも知っている。

白井章子（小3）

●としよりにらくはない

としよりは体がふじゆうで、らくなことはひとつもない。

（なるほど、「らくはない」とうつつているのか。でもね白井さん、そうとばかりは限りませんよ）

いかがであらうか。こうしてみると、

総じて、中学生が「老い」の内面世界にも思

## 原稿募集

①研究論文・実践報告（図表を含めて五千字まで）

②発言

▼学習の主人公たち——小・中・高生徒の率直な声を

▼市民として（二千八百字まで）

▼親もいたい（千三百字または二千八百字まで）

▼教師のつぶやき（千三百字まで）

③Weに、なんでも言おう、なんでも聞こう（本誌の内容・体裁などについての建設的な意見）

④わたくしからあなたに（読者・執筆者・編集者の交換室）③④は、はがきでお気軽に

りを視てはいない。評価すべきところや思いを寄せるべきところは、ちゃんと視ている。その意味では、伝統社会の庶民のまなざしと似通っていてもいい。

しかるに、使い捨てのわが産業社会は、まさに「年よりに冷や水」、これでいいわけがない。

「いま」を楽しむ

飯野 じゅん

「一九一九年信州に生まれ東京で育つ。大妻裁縫高等科卒業後、川崎市・保谷市・武蔵市で小学校家庭科教諭として教職通算三十余年、一九七九年三月に教育現場より退く。家庭科教育研究者連盟（家教連）前理事、現在は東京都教職員組合（都教組）の総合教育センター教育相談員として活躍中。

一九六一年以来小学校家庭科編集委員で、退職後も研究授業実践・講演に東奔西走、著書『家庭科でなにをどう教えるか』など。

これは昨年、東京書籍の社内報に頼まれて書いた「『白馬』往来記」と題する身辺雑記の著者紹介に編集部が書いてくださったもので、活躍中とか東奔西走とかは本人としてはいささかオーバーで面映いところですが、簡単なものでそのまます頭の自己紹介に拝借いたしました。

★信州白馬村往来の由来

さて、私は退職後の春に僅かな退職金をはたいて信州白馬村に小さい家を建てました。別荘と言えは聞こえはよいのですが、これは絵を描きたい主人のための居住家屋です。白馬との出会いは、信州大町に主人の妹が嫁入っていた関係で、毎年夏には小さかった子どもたちを連れて遊びに行くのが恒例になっていました。そんな関係から今から十一年ほど前に八方尾根の麓、平川の河川敷の松と石ころだらけの土地を名

鉄が別荘地として安く売り出しているところにつづかったのです。平川というのは名うての暴れ川で、毎年雪どけの頃には堤が破れて氾濫し、附近一帯を水びたしにしたそうです。ですから地元の人たちの間では、金をつけてもらい手がなかった土地だったと言われています。

私たち夫婦は戦災者であったためにやっと入居させてもらった東京都営の住宅が払下げになったおかげで、猫のひたいほどの小さい家を持つことができました。しかし、自分で選んで土地や家を購入するなどとは思っても及ばぬことだったのです。土地の売出しにぶつかった時、「この広い地球上のどこかに、自分の土地があるなんて素晴らしいじゃあないか、こんな荒地で将来住めるかどうかかわからなくても、思い切って買うことにしよう」と、まったく、いい年こいた夫婦が夢見たいなことを話し合い、五年のローンの払込みを頼みに乏しい家計を省みず買ってしまったのです。

それから毎年、大町に行く度にどうするということでもないこの土地に、足を伸ばしていました。見渡す限りの松林とすきばかりで、どれが自分の土地か探しあぐねることも度々でした。問題の平川はつい五年ばかり前から国による大がかりな治水工事が進んで、どうやら水の心配もなくなりました。主人は「一人でも暮らして見せる」と頑張るので、私の退職を機に小さい家を建てることにしたのです。

★白馬は夫婦の仕事場であった



思えば主人のこれまでの長い人生は、丈夫でもない体にむち打って、民主主義を旗印に、いつも権力に抵抗し、当局ににらまれ続けながら、教育に、組合活動に、そして市議会議員として働き続けてきたのです。妻としてその労苦に少しでも報いることができたらばという思いがありました。「白馬の家は、これまで何ひとつ欲しがらなかったお父さんへのおもちゃみたいなものね」と言い、子どもたちは「おもちゃにしては高いね」と笑いました。

主人は民主主義を実践する人でしたからいわゆる亭主閑白ではなく、家事・育児にもよく協力してくれていました。とはいっても年老ってからの一人暮らしは心配です。いつも電話で料理の仕方を問合わせてきていましたが、このごろでは料理のレパートリーも増え、煮豆もできるといばっています。もっともいつか大根はゆがいて煮ると教えたら、肉じゃがの煮汁もこぼして捨てたというのには閉口しました。小学生相手の家庭科より、亭主に教える家庭科のほうがどうやら難しいようです。

信州に生まれたと言ってもほとんど東京育ちの私には、ここは淋しくおっかなかったのですが、幸い主人がほとんど居住してくれましたので、ようやく白馬の四季の移り変わりの美しさ・楽しさに気付くようになりました。荒地だと思った地面にも、春にはすみれや名の知れぬ小花が咲き、満開の山桜に目を見張り、初夏にはふれたら染まりそうな若葉の緑、夏から秋には松虫草や女郎花、そして秋になると、うるしが真赤に燃えて、松林を華やかに彩ります。晩秋には枯松葉が道

路も庭も一面に敷きつめるのです。

こんな白馬から上京して、お茶の水の駅から神田へ教育センターに通う街の雑踏にもまれると、つい昨日までの白馬の生活が夢みたいに思われてくるのです。そして主人のために建てたつもりの方が、実は、私にとっても欠くことのできない仕事場になっていたことに気がつきました。若し主人が居住していてくれなかったら、私の仕事場にはならなかったでしょう。

### ★地域のくらしに根づくということ

東京―白馬間の毎月の通勤は特急あずさですが、松本からの大糸線は南小谷方面のローカル線になりますので、土地のおじさんやおばさんたちとの会話が楽しいです。「ほう白馬に行くんかい、今夜はどこに泊るけ?」「それじゃ父ちゃん待ってるわ、行ったらうんと御馳走作ってやんな、じゃあ氣いつけてな」といった塩梅です。

白馬通いも四年ともなると結構土地の顔なじみも増え、農協のスーパーへ一週間分の買出しに行くものですから、どっかの民宿の小母さんと間違えられて、土地の小母さんから今夜のおかずの相談を持ちかけられます。たまに訪れる土地の人などと茶飲み話に土地の情報を知ったり、買物の往復にタクシーの運転手さんから白馬の観光情報なども聞いたりして、いっぱしの土地っ子になりました。

私たち夫婦の様子を、桃太郎の昔話にたとえると、こんな工合になるのでしょうか。

「今、信州白馬村にお爺さんとお婆さんが住んでいます。お爺さんはいいつもベトナムの絵を描いています。お婆さんは、ときどき字を書いていきます。そして、東京と白馬をいったり、きたりしています」と……。

家族と老い

村岡 洋子

ついこの間まで、老いの大部分は家庭の中で女性の手だけに担われて来た。みとる側にもみとられる側にも、ほとんど選択を許さない既定の事実として。家庭の中でみとられることとしか知らない老人の介護を私たちが引受けるのは、ただ情に流されるからでもないし、仕方がないからでもない。先輩たちが人生の終わり近く、不満や嘆きを持つことが不当だと思ふからである。しかし、自分の老後をそこに重ねてみて、自分は家族の世話になるだろうか、と考えたとき、たとえすべての条件が整っていたとしても、ためらってしまふ。

第一の理由は、いうまでもなく、みとりのつらさである。女性たちがこの何年か、せきを切ったように語り始めた、さまざまのいまでのみとりの実態は、何の援助もない密室のあがきであると言われ、心身ともに疲れ果てた看護者にも、それを知りながらどうしようもないみとられ手にも、ひたすら耐えることを強い、双方から優しさや人間性を奪って行く。

特にみとり手の就業や社会参加など漸く模索され始めた女性の自立と引きかえになる場合、そのつらさは倍加される。

途中で絶えたまま、縁のなくなった仕事への思いを押さえつけるのに、私はしばしば全身の力で葛藤をくり返さなければならなかったし、今でもまだ、突然挫折感に責めさいなまされて飛び起きる夜がある。しかし、まだその時は、看護をす

ると心にきめていたから迷いはなかった。夫の祖母と父を見送った後、思いがけなく現在の職を得て二年目に姑が発病した時、私はどうしても職を捨て切れず、姑を病院に入れた。姑は脳軟化症で何もわからなくなっていたし、長い間放置していた長男に何かと問題もあり、家業の倒産によって借金も背負っていたから仕事はやめられない……等、言い訳はいくらでもできる。しかし、十二年ぶりに就職の話がきまって、ふわふわと宙をとぶような気持で歩いて帰った早春の畑道に、さんさんと降りそそいでいた太陽の光の眩しさを、私は決して忘れなかったのだ。弱気になろうとする時、その眩しさは私の前に必ず燃えたつ。今も後悔はしないけれど、私の老人介護の歴史は永遠に未完成になった、と唇を噛む思いだった。

こんな思いを、二度と若い世代にさせてはならない。少なくともさせる側に回ることだけは避けたい、そう思う女性是我的の周りにも多い。私も当時は、その思いにのみこだわり続けた。金銭的裏付けもなく、手近に福祉も望めない場合は生きて行く保証もないのにかかわらず。自殺すれば子供たちの立場がないから、うまくのたれ死にをすればよい、などと広言していた。しかし、やがて、私はその得手勝手な狭量さを自分にごまかせなくなる。ひとりのたれ死にすることは、自分一人のわがままでしかなく、何の解決にもなりはしない。“老い”とみとるということとは、人間だけのすぐれた営みであり、それを文化として伝えなくなったら、人は人でなくなってしまう。

まう。私の老人問題への思いこみは「のたれ死」から、全ての人が人間らしい誇りをもってみとりまもられる可能性を探ることへの転換に始まる。ひとを見送るということは、大変なことなのだから、皆、へとへとになるまでがんばればよい。しかし人間として大切な自立と老人介護が両立することなしには、老人も家族も犠牲にならず、ともに人間らしく生きられる社会は実現しないだろう。

現代の若いファミリーは、概して親にやさしくすることに臆病である、と言われる。もしそうだとすれば、第一の原因は、親を一人で背負いこみ、果てしなく苦勞しなければならぬという予測があるからではないか。即ち、老人をとりまく社会の福祉の貧しさである。昨年東京で開かれた「女性による老人問題シンポジウム」では、老人とともに、老いをみとる家族のための福祉が提起されていた。家族で担いきれない部分を社会レベルで援けようという福祉や連帯は、色々な試みがあるけれど、身近で多様なものには育っていない。

第二の要素は、老人と家族の人間関係である。結婚して新しい家族をつくり、子供を産む。順調に行けば残った二人のうちどちらかが先立って一人になる。これは極く普通の家族の歴史であって、このように考えて来ると一人残った老人は、ひとりでも歴史をもった一つの家族の代表である。老年をどのような形で暮らし、死をどのように迎えるかは、その人の長い間の生き方の集大成であり、さまざまな形を持っていて当然であろうし、そのためにこそ、ひとは懸命に納得のいく生き方を探り、自らの世界を豊かに開く人間関係をつく

って行こうとする。老人と子供の家族もまた、このような人間関係の一つであって、独立した二つの家族同士、大切にたえず気を配って育てて行かなければならないものではないか、と思う。

血縁に結ばれ、何年かをいづくしき育て、数かぎりない共通の思い出をもった、やさしく親しい支え合いの関係であるが、自分の心の幸せのよりどころを他人の好意の上に置こうとする甘えや、依存があるとき簡単に崩れてしまう脆さも内蔵している。

老人が一つの家族のごく自然な姿として、自立した個人であり、社会人であるとき、家族との間にも自然でやさしい思いやりが生まれて来る。老人と子どもの家族の関係は、老人の側に、あくまで自立して生きようとする精神と、それを可能にする社会の基盤が存在した上での、ひとつのすばらしい人間関係と考えたいのである。

このように考えてくると、家族を支える福祉は、基本的にはひとりぐらしの老人を支えるものと同じであることに気付く。

老いを支える家族のことを考えて来て、ひとりぐらしを可能にするものは何かという問題に行き当たり、私は少しとまどっている。一方から言えばごく当たり前のこともかも知れない。

家族介護を可能にするもう一つの大きな力は、家族全員の協力である。「家族の介護機能」は縮小しており、老いに接しないまま、過ごす家族も少なくない。「おばあちゃんの病氣」は非常事態宣言に充分な出来事であり、別居同居を問わず子供たちもまき込んで参加させたい。夜の看護への参加、留守番、食事のさし入れ、お使いいくらでも仕事はある。臨機応変で柔軟な生活能力と家族に協力する態勢、老人にやさしくしてあげる心など、得難い教育の機会になる。

(京都短期大学)

“老い”をどう迎える—私の場合

山香 雅子

老いをどう考えるか。実のところいまの私には自分の老いよりも、ここ数年老化のすんだ姑と今後どうかかわっていくことになるのが、さし迫った問題になっている。

わが家では七年前に舅を失い、その後しばらくして姑の急激な老化を経験した。ある朝、姑は突然脚が立たないといった。立ちあがろうとしても膝に力がいらない。高血圧症からきたものと私は覚悟したのだが、医師の診断は異状なしだった。しかし、ごく普通の動作がその日を境にできなくなってしまった。スナップやボタンがとめられない。わずかな段差でころぶ。立ったりしゃがんだりが大変なので、急いでトイレを洋式に変えたがよく汚した。二、三歳の幼児と同じだったのだ、と今思う。精神機能も退化したようだった。もともと無口で感情を表すことが少なかったが、家族との対話もほとんどなくなった。姑をおいてやむを得ず外出し、夕方大急ぎで帰ると、灯もつけずに暗い顔で坐っていて、胸をしめつけられながらこちらも暗い気持ちになった。

結婚後一年で私が姑と同居した時、姑は五十歳だった。若かったのだなと思うのは四十八歳になったいまの私で、当時は姑が「私たち年寄り」と何かにつけて自分を老人の枠に入れようとするのを当然のように眺めていた。二十年前の五十歳と現在の五十歳とは意識の上でかなり違うだろう。感覚

的にも体力的にも少し違っているかもしれない。それにしても、自分を年寄扱いしようとする姑の内心は、本音はどうだったのだろう、と今になって私は時々考える。

同居と同時に「食事の支度はあなたにまかせます」と姑はいった。高校の教師だった私は、時間に余裕のある講師になってその期待に応えようとした。長男が生まれ、三年後に次男が生まれて一時退職し、子どもがそれぞれ通学通園するようになってまた講師の職にもどったが、現在は専業主婦である。

姑がなぜあんなに急な衰え方をしたのかは今になってもよくわからない。姑は文字通り「家内」に徹した人だった。来客を喜ばず、他家を訪問することもめったになく、関心を自分の家族にだけ向けていた。現在の住所に戦前から住んでいるが、地域とのつながりは薄く、知人の数は少ない。浪費や遊びを疎み、出歩くことを嫌い、家族のために編物や縫物をするのが好きだった。いわばその世代の模範的主婦だったといえよう。私が留守番役になってから、舅と旅行するのが唯一の楽しみに見えたが、舅の死後は連れがないからと行かなくなった。編物や縫物も肩が凝るといつてやめてしまい、一日ぼんやり過ごすことが多くなった。そんな姑に私は同年輩の人の交わりをすすめ、幾つかグループを紹介したが、姑は気乗りせず、夫や夫の姉弟も「静かにしているのが好きなのだからそっとしておいてやってくれ」といった。

舅が死に、子どもはそれぞれの生活を営むのに忙しく、成長した孫たちも祖母の傍に寄ることが少なくなつて、姑は何かをする目当てを失つたのだから。いわゆるぼけになる前に身体が衰えが訪れたのは幸いだったのかも知れない。

一時よりかなり回復した姑は、午前は整形外科へ通い、午後は一キロほど離れている自分の娘の婚家まで散歩に行く。時折野菜などを煮るが、こまかく刻むことはしなくなった。

にんじんのようにかたいものは聞いていて胸の痛くなるような全身の力をこめた音で切る。ガスの火の調節がうまくいかずよく焦げつかせる。ガスのつけ忘れもある。週に一、二回洗たくする。それ以外の時間は自室でテレビを見ながらリハビリ体操をしたり、居眠りしているが全ての動作に非常に時間がかかる。

そんな姑の様子をそれとなく見ていただけで、体の具合の悪い時以外は極力私は手を出さない。最近私の外出の機会をできるだけ多くしているが、時間の拘束の厳しい仕事は引受けない。

十年、二十年先、私はどんな暮らし方をしているだろう。八十歳を越した姑、九十歳の姑はどのようだろう。何にしても私の本当の老後は姑を見送つたあとに始まる。その時、夫と二人でいるだろうか。私は一人になっているだろうか。それとも夫だけ残るだろうか。この先の経済的な変動はどうだろう。健康をどの程度保つていられるだろう。そして何よりも、いったい何歳まで生きるのだろう。考えれば考えるほど老後の予測はつきかねる。その点、夫の関心はいまのところ

経済的な面にしかない。あるいは今までいつもそうだったように、その面での分担を果たせばあとは私が何とかすると思つていられるのか。

ともあれ、私は将来私の存在が息子とその家族を束縛することのできるだけ少ないよう望む。できれば私の域となる小さい空間を確保し、私自身の手で衣食住を営みたい。それを維持する知力と経済力と体力を保ち続けたい。そのためのささやかな計画として、現在の次のようなことを心がけている。

国民年金や夫の加入している公的年金にどれほどプラスすれば必要最低限の暮らしができるかを考え、そのための貯えを努力する。年老いても働いて収入が得られればすばらしいが、それは生活費として計算せず、ゆとりと考える方が確実だろう。

私の住んでいる世田谷区では健康体操が盛んで、地域と結びついたグループがたくさんできている。息子たちが卒業した中学の体育館にも週一回様々な年代の人が集まって、思い思いのペースで汗を流していて、私もそこに参加している。また、若い時から関心を持っている短歌と謡を細々ながら続けている。そしていまは月に一度だけ行っている老人ホームのおむつたたみのようなボランティア活動をもっとひろげたい。そこでは私よりずっと年配の人々が、「私もいずれお世話になるんだもの」などといいながらせっせと手を動かしている。さらに月に一度出席している婦選会館の古典講座で、女学生のように目を輝かせている白髪の人たちに、自分の未来を重ね合わせているのだが、人間の立てる計画にはどこかに穴があるだろう。そこはもう神の意志にまかせて、私はいまできることをひとつずつ片づけ積み重ねていこうと思つている。

子供の生活から制服を考える

大隈 明美

この春、夫の転勤に伴い五年余の慣れ親んだ高松から大阪へと移り住みました。彼地で生まれた二人の娘も既に五歳、三歳と育ち、長女は高松の幼稚園で年少組を終え、こちらの幼稚園に即転入致しました。そして数日もたたぬうちに、この娘が帰るや否や歓声をあげたのです。「T幼稚園っていいね。上っぱり脱ぐだけでも遊びに行けるんだから!」と。このごろでは、毎日の徒歩通園でたちまちに出来た友達と遊びの約束をし、玄関にカバンをなげ込まんばかりにして上っぱりを脱ぎ、遊びに出て行く始末。数ヶ月前までの姿よ今いずこといった風なのです。

またある朝には、夫にこうも言ったそうです。「T幼稚園っていいよ。上っぱりの下はね、好きな洋服着ていいの。あたし、今日は桜の花と同じうすいピンクのブラウスにするわ」。そして、桜塚という町名をそのままに桜の咲きほこる道中、風に舞う花びらにみとれながら登園するのです。新しい環境に子供が慣れるだろうか、友達出来るだろうか云々といった母親の危惧をよそに、子供のこの変貌振りは目を見張るほどでした。

そう言えば……。かつて結婚と同時に移り住んだ高松での最初の驚きがあの制服姿だったのです。幼、小、中、高と見事な制服のオンパレードは、東京に生まれ育ち、しかも地元

の公立学校に過ごした私にはかなり縁のないものでしたから。それでも、五年余りをそういう土地柄の中に暮らしてしまうと、いつのまにか、驚きは薄れ、何も感じなくなっていたのです。むしろ昨春新入園の我が子の制服姿に「まあ、何と大きくなって……」などと感激したくらい。

三年保育にするか、二年保育にするかという問題も、結局マンションの子供がみんな幼稚園に行ってしまうので、遊び相手もないし云々でGOサイン。結果は長時間保育、給食、バス送迎、それぞれの事の意義、是非は別として、母親にはまことに「都合の良い」状況でした。

マンションの玄関に横づけになるバスに乗っての登園では、雨の日でも傘は不用。否それどころか、車の中がぬれてすべるので持ち込み厳禁でした。雨の多かったこの四月、長女は雨が横にふる日はビニールカップを着た方がよいこと、そしてカップの日にはトレーナーを着たらすぐ暑かったから、カップの日は薄いTシャツにした方がよいということを体験的に学びとったようです。

このように毎日の身仕度を注意深く観察していると、その日の天候やら、気分やら、小さな子供ながら、精一杯の心を尽くして、決して多くない持ち数の中から選んでいるようです。ある朝は、「このワンピース着たいけど、体そのの時手がいっぱいにながらないんだよね。ヤメトコ。帰って着るワ」と別のTシャツを着込む。

そして、又ある朝は「今日はS幼稚園のスカートとブラウスにしよう。F先生や○○ちゃんはもうしてゐるかなあ……」。

スカートとブラウスというたったこれだけの衣服選びに子供のいろいろな心の動きや成長が見えるこのごろ、制服って……と数年ぶりに考えてしまうのです。

制服——高松の私の友人は三人子供をすべて私服で小学校に通わせている。他のみんなは制服だけれど。

制服——七〇年安保の時代、学校は大きく揺れ都立高校の多くが私服になった。ただ、私の母校は伝統的に私服が認められており、その校風を誇りとしていたので、服装については本当に地味でさえあったと思う（今は知らないが……）。

制服——初夏の陽ざしの中、生徒がフーフー真赤な顔をして、塾の教室に飛び込んだ。重いランドセルをおろし、黒のつめ衿を脱ぎ捨てたその下はランニング一枚。制服の裏

地は汗でびっしょりぬれて光っていた。明日もその服を着る。夏服の日まで。

制服——やはり学校紛争のさ中。私の母校である女子大の付属高校の制服が問題になった。「チャンピオンベルト」という愛称を持つその制服は、ひと目でO大付属高とわかるもの。一体何のチャンピオンなのか。東京郊外の地元公立高校に学んだ私には驚きだった。

制服——塾に来る中学生が言った。「転校して来て、教科書や制服が変わるのはわかるけど、なんで、ここではセーターやオーバーを着るのに先生の許可がいるのんか？」

とりとめのない制服をめぐる思い出と想い。子供の生活を見つめる中で、本当は何か一杯重要なことがあると思えて、Weの読者の皆様と共に、もっと広範囲から、そしてもっと深くこの問題を考えたいと問題提起するものです。

## \*ひと\*

### 「新しい家庭科を創るために」

#### —中学校では—の

#### 大森嘉子さん

先日のお電話では習い事で遅くなるとか、何をやっていらっしゃるんです？「ええっ！ああ、お茶をね。友人が教え始めたばかりなので、一緒にお菓子を食べに」パンツルツクの目の前の方が茶道をね。私の予想ハズレ。「去年の夏休みは友人と中国の雲南省に行き

ました。米や味噌、豆腐などの文化がこの辺から日本に来たという説があるんですよ。昆明のあたりに一週間、バンガローみたいな一軒しかないホテルで。夜は土地の人と食事したり、踊りを見せてもらったり、景色が日本と似ているんですよ。琵琶湖みたいな湖があって、ベトナムに接している南だけど高原だから気候がいいんです」今年の夏はどちら？

一年を担任。今春、近くに新中学校ができ、マンモス校の生徒数も九百弱になった。おかげで家庭科専任は一人になってしまった。「機織り部をつくっているんです。できたら

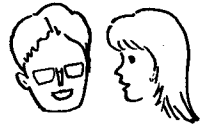
染めや織りの全過程をやってみたいと思って。藍の葉を乾燥し、発酵させてね。素人にはむずかしいので昨年は生葉で染めたんです。水色に染まりました」それから機にかけて……気が遠くなりそうな話。私は花で染めるのだと思込んでいた。

教師であるおつれあいと二人の生活。双方ともやりたいことを自由にやり、協力できることをして、日曜日は音楽会や観劇に。

帰りがけ二年の女子に聞いた。一年の時は男女共修、二年になって別学になってどお？「よかった！」ウソネかな。

（中野敬子）

# くに なんでも言おう なんでも聞こう



◆六月号の川名提言に対して――

We が二年目を迎えるに際して、購読更新をしなかった読者層に教師が多いなら、私はそこに背後の圧力を見るような気がします。内容に不満足だったためとは、今のところ思えないからです。しかしもし一般市民であれば、私は次のようなことを考えられるのではないかと思います。

「新しい家庭科」というタイトルの本は、印象として、やはり家庭科教師のための専門書、いわゆる「教師の友」の一種なのです。実際に読んでみれば、授業の具体的なページ以外は「自立した男と女を、人間らしい生活を、差別の

ない社会を」願う者たちにとって、「まさに自分の問題」としての関心を持って読めるページばかりです。

けれど、タイトルと共に、この本が活字も小さく、どのページもギッシリ字に埋まっている地味な本であることも加わって、「教師の友」という印象は拒めません。

「教師の友」の第一読者は「教師」であり、「一般市民」は第二読者だという気持を持つことになります。そして様々な運動にもかかわり、カンパの訴えも一段と増している今日の厳しい状況にあって、サイフのひもをしめる必要を感じた「一般市民」がどういう決断を迫られるか。それはやはり、(中略)家庭科教師たちの奮闘を期待しつつ、良い本ではあるけれど、ひとまず自分は自分の場ががんばろうということにならざるを得ない、ということだと思えます。

そんなわけで、私は川名提言のように、タイトルを変え、対象を

教師と一般市民が対等な「第一読者」である感じを持てるようにすることは、内容が今と全く同じであっても、購読者数を増すために有効だと思えます。それと同時に、余白やカット等も多くして、「入りやすい本」「目に優しい本」にしてほしいという願いもあります。でも、記事の甘辛については読者数をふやすための考えても、私は現状肯定です。家庭科という独自の足場を失わず、今の辛さも失わず、活字の大きさ、余白などにより、印象のみ、少し甘くというところでしょうか。

教師の読者たちが、圧力などのために購読をストップするような厳しい現状であるならば「We」を読む家庭科教師の孤立状態は、ますます厳しさを増していると言わざるを得ないでしょう。そうであるならば、当面は「We」の一般市民読者層を広げて、孤立した教師たちを、外から支援する輪を広げてはいかげでしょう。そして圧力のためにストップした教師たちも「私」の立場ででも、この輪に加わってこられるような「時の充実」を待っては？

でも、こんなふうに考えたりもするのです。創刊に際しては、新聞等にも結構取り上げられ、読者数が多くなったけれど、年間予約が切れるところで、少々ゼイニク(？)が落ちて当たり前。二年目のスタートが本当のスタートと思うほうがよいのでは？

タイトルも中身もこのままで続け、少々の変動にビクついて方針を変えることなく、少し長い目で、地道な読者数の伸びを育てては？と。

けれど、私は、ここで次のことをしっかり確認しておきたいと思えます。川名提言に「まずはじめにWeは運動の中から生まれてきた雑誌である」ことを確認したい」とありました。これはまさにその通りなのですが、その「運動」の中身は何なのか、これを再確認し



たい、ということです。(以下略)

(岩見沢・山口里子)

◆六月号では、川名はつ子さんのご提案と、荒井利春さんの文に一番ひかれました。川名さんのご提案に対して、私もひと言。

・身内意識について

これは、本誌を通じてのみ感じることしか書けませんが、Weでは身内のように、非営利的に他の方と結びつける、多少のワガママは許してもらえ、何でも気軽に話せる、という点でプラス。身内のように、何となく緊張感が薄れてきてしまう、同じニオイの「文集」になってしまふ、言葉の省略が進んでしまふ、という点でマイナス。といったところでしょうか。

私は「We」の皆様と「We」に参加したらおもしろそう、と思つてとびつくように購読を始めたものですから、今まで通りの「身内意識」を、「身内」の方が何ら改める必要はないと思います。確かにわからない言葉は沢山「We」の中に

出てきます。でも、わからないことがあったら質問すればいい、と思つています。(それで思い出しましたが、「ヒープ」って何ですか?) 時間をかけて読む者皆が「身内」になり「身内の言葉」で話せるようになったら、一番いい。

・具体案について

①甘辛の比重は、今が一番いいです。(中略)日本各地の方言で書かれた文章にもっとお目にかかりたいです。

②対象は、市民でいいのではありませんか。教師も常に市民である自分をさらけ出してから、その後に「教師の立場」をふまえてほしいと思います。

③身内の情報をWeの会便りにしたい込むのはやめて下さい。どんな載せたいかと思ひます。

④テーマを設定し、投稿を募集することに賛成 (中略)

荒井さんの文章を読んだら、とても胸がほのぼのとしました。暖い方じゃないかって思ひま

した。私の頭には歩くことのできない父親がいるという、無意識の不安があったのだと、この文章を読んで意識できました。こういうお仕事を、こういう考え方でしていられっしやる方が日本にもいるんだととても心強く安心しました。

(ニューヨーク・大西麻里子)

◆(前号72頁に続く) 82年10月号吉田氏の文章に、色色とお尋ねしたいことがありましたが、今頃やっと書いてみる気になりました。

氏の結婚「家庭」もたれあい「緊張がない」好ましくない、という図式は、結局、ご自分だけ(あるいは、ご自分の周囲のケースだけ)を見て、判断なさっているように思えて、読む者には不快です。人間は、あらゆる情報を、自らが生きる環境社会から得ているものです。現代社会には、相互に对立葛藤する主張が渦巻いています。都合のよいことに、情報システムが、それらの情報を絶えず流してしてくれます。その中から、

なんとなく自分に都合のよい、自分に合ったものを選んで、これが自分の好みだ、主張だ、と叫ぶことは、いとも簡単です。(中略)

私は、同棲、結婚、出産を経過しました。同棲中は一種の通い婚でしたから、現在の家庭生活とは違った不安や緊張感が二人の間にあったことを経験しています。しかし、むしろそうした緊張やカマエは、お互いの消耗でした。その消耗が、個別の時間や生活にも悪い影響を出し始めた時、現在の生活形態に移行しようと決心しました。つまり、通い婚はレクリエーション(再生)にはなりえなかったのが、私の場合です。(中略)また意識的にか無意識的にか、氏の結婚には、生命の誕生に関する部分が省かれていたようですが、人間の自立を論ずるにあたって、他の生物に比し自立できていない子が生まれるという生物学的事象をどう見るかも、ぜひうかがいたいです。(土浦・高瀬和子)



② どんじさ めぐすり

藤田健次

「どんじ」は尻のこと。「尻さ目薬」。尻に目薬をさすこと。これを転じて、見当ちがいの動作のことをいう。

「なんだって？ 煮豆とは作るのに、砂糖と間違っって塩とばドバツと入れてしまったずのが？ それだば、まるで、どんじさめぐすりだばな」などと。

人間誰でも、見当ちがいや失敗をできるだけくり返さないように努力して生きているわけだが、ミスも取りちがいのなく、完全無欠のひとがいたとしたら、これまた魅力がない。

かといって、いつもミスばかりおかしければ、職場では役に立たない。コツとしては、小さいミスはおかしても、大きい、重要なミスをださないようにすれば、世の中を生きてゆける理

くつだが、いつもそううまく具合にゆくかどうか。

私は、時々ミスをおかし、よく他人に迷惑をかける。だからどんな小さな用事でもまずメモにする。そのメモは、用事が完結するまで、机の上の透明なプラスチック板の下に広げられる。よって、私の机の上は、百花りよう乱。万艦飾。私は、それでも、物忘れして他人に迷惑をかけるよりはいいと思う。

物忘れしない秘訣——それは、まず自分が忘れん坊だと自覚することから始まるようだ。頭をかきかき笑顔であやまり、まわりから、「こいつめ？」などと言われて、お尻のあたりをつねられる程度の失敗でありたいし、そんな人間関係でいられたらと、いつも思う。

死ぬまでの賭け

栗原 実抄

障害者の女の子に好かれる男の子は  
かわいそうと友はいった

私は なぜ自分をそんなに卑下するんだ  
と彼女にいった

人を好きになるのに

どんな制約があるのだろう

しかし その制約が平気でまかり通る世  
の中なのだ

あれから十年近い月日がたって

その間に何回も人を好きになった

あまりにもいちずに想いすぎる私は

いつも途中で息苦しくなって

相手に気持ちを打ち明けてしまう

たいていの男は そこで背中をむける

やさしい言葉が 親しい笑いが

冷たい言葉に 氷のような笑いに変わる

惨めさと 悔やしさと 怒りと 悲しみが  
交り合った疾風が 私の心を吹き抜けた

友にいった私の言葉は

やはりきれいごとではなかったか

たてまえではなかったか

気の強い私は 自分の弱さを出すのが

負けにつながると 意識のどこかで感じていた

私だって自分の障害を卑下している

ただそれを人に気づかれるのがいやなのだ

自分の弱さと醜さに気づいた今

それでもいいという人が現れるまで

私は待つしかない

それは 死ぬまで続く賭けかもしれない

多摩市における「女性の意識実態調査」の報告書（57年版）によると、今働いていないけど、将来働きたいと思っている女性が、団地で五八・四％いる。「なぜ働きたいのですか」という問いに対する理由のトップは、生活の張りや生きがいのためであり、次は趣味能力資格を生かす、となっている。今働いてない人は働くための理由が甘いといえはいるが、私もかつてそうだったように、働かなくてもすむ身分という自分の立場が見えないのである。

夫の給料でなんとか家族が食べて行けるとき、働きに出ることによって今までの手作り食品、無農薬野菜の購入、市民活動、趣味やおけいごなどをやめてしまうことは、家庭生活にとってもものすごい損失と感じてしまうから、それなら少々経済的に苦しくても、検約することと、手作りによってカバーしようと思ってしまう。人間のくらしを豊かにするためにと文化活動や、生協活動をしているとなおのこと、女が働きに出ることで失うものの大きさに、女の自立と引き換えることはできないと考える。そこにはたとえ働きに出ても、家事はすべて自分が引き受けなければならぬ、という思い込みや、今更長年暮ら

して来た夫や子供たちとの関係や習慣は変えられないという、絶望的なまでの役割分業意識があるから、けんかしてまで夫や子供に今までの主婦の役割を半分担ってもらおうとは思わない。こうして家庭は一見平和に、お互いに寄りかかりながら成り立っている。

### 団地の風景



遠藤和枝  
(カット・由紀)

私みたいに何が何でも自立するんだと、昼も夜も働いて、その上ミニコミも出して女たちを扇動し、〇〇反対運動に出かけて行き、夫や子供を粗末に扱い、ときには争い、ときには泣いて、ウロウロと落着かない生き方をしている人間は、あまり得する生き方ではないのは確かである。

「主人はおだてて働いてもらって、昼間好きなことをすれば良いのよ」という人もいるけど、おだてられて働いている男たちの職場には、必ず一緒に働いている女もいて、妻のおだてに乗って甘やかされた男たちが、害をばらまいているものなのだ。

会社につとめる友人の職場に、同僚の奥さんから電話があり、「今主人が出ましたけど、着るのをいやがっているコートが無理に着せましたから、そちらに着いたら似合うと言皆さんでほめて上げてください」といったそうである。

「バカバカしくていやだったけど、仕方ないからその人がドアを開けたとたんに、コートも見ないで顔だけ見て、そのコートお似合いですよ、っていつちゃった」

家に帰ったらその奥さんは、「女の子からコートのことほめられたでしょう？」なんて聞いたに違いない。

男が頑張ってあんなに夜遅くまで働けるのは、健気な内助の功を発揮する女が傍にいて、又それに協力する女も職場にいて支えているからだろうけど、女が働くことを、ヨイショ、ヨイショと支えておだててくれる人って少ないだろうナ……。

日ごろとりたててのぞかない他者とかかわりが、あることをきっかけに思いがけなく鮮明に浮かびあがってくることもある。

人は、思いこみが強かった分だけ、予想外の対応が出てきたときに驚き、うろたえ、では「はぐらかされた」と怒りさえする。が、心が通っていると思う者と、ほんとうに分かりあっていたのだろうか。依然分かりあえぬところを残したまま、思いこんでいた

——ということとはなかったらうか。

私たちは毎日の生活の場において、家庭・職場・地域という共同体、組織の中で、他者とかかわり合って暮らしている。夫婦の間、親子の間、あるいは職場の同僚、近隣の人、運動の仲間と、互いにわかりあうための努力をどのように積み重ねてきているだろう。自分がわかってもらいたいように、他者をわかってもらうとする努力を。

このことを、一人のすぐれた実践家であり、作家である山代巴が解説する『叢書・民話を生む人々』(全十巻中、四巻まで刊行中)を読んで、考えさせられている。

治安維持法下に囚われの身となった山代巴は戦後、出獄後の再出発を郷里広島に帰り、大地に根を下ろした人権確立のための民主化

運動に取り組んだ。山野の、人のいないヤブのかげで、小さな葉の下に実を三つ四つつけるやぶごうじのように、どの村や町にもいるあたりまえの女たちが、ひとりひとり自分の実をつける世界を求めて(…「山代巴を読む会会報創刊号・やぶごうじのように」)。

そうした山代巴の仲間が、生み出したのが



『叢書・民話を生む人々』である。

そこにあるのは、軍国少女だった自分を見つめなおし、本を読む時を持つようになった一人の女性の足どりであり、過重な農作業と農政の矛盾にあえぎ、回路を求めて必死で記録をつづける農婦の姿、部落推薦選挙をめぐるの悩みや相互批判——など、ごくあたりまえの暮らしを営む中でぶつかった壁を、自

分の内部にある矛盾を追いつつ破ってゆこうとする女たち一人一人の歩みである。

それらは時にはモタモタと、曲がりくねった山道をたどるがごとくの文章で、表現もうまいとはいえない。しかし、自分を刻むような文章なのだ。

一人の書き手一巻ずつに添えられた山代さんの「解説」は、書き手の細かな心のひだをたどるために、その人の生い立ちや家族の歴史をさかのぼり、風土や先祖伝来の生活姿勢の中にしみついた感受性にまで光をあてている。その光に照らされて、書き手の試行錯誤や発見や、書かれなかったことまでをも読みとることが可能になるのだ。

迂遠なようでも、こうした「手だて」を尽くす努力を続けてこそ、現れたことだけにとらわれず、思いこみを排して、人が人を理解し、分かりあう——ということにつなげてゆけるのではなからうか。

『叢書・民話を生む人びと』解説・山代巴

①一九四五年八月からの出発②まちの選挙

③主婦専従農業④平木屋三代の女たち

(1) ③ 1200円、④ 1500円・而立書房)

。山代巴を読む会：年会費千円(会報三回分)

振替、東京7-47473

## 女の目でみた中国

野村 康子

職場と自宅と保育園の点を結ぶ三角形から一步も出られなかったころ、全日制の保育所や食堂が完備している中国にとっても憧れた。その後、育児や家事についての考え方が私自身の中で変化したこともあって、憧れこそなくなったが、中国に生きる女性の思いや行動に関心を持ち続けていた。

ドキュメンタリー特集「女たちの現代中国——0才から90才までを追って」は、長江の南に位置する無錫市にカメラを据え、「生まれ育つ」「青春」「結婚」「再会」「老後のくらし」といった人生の節目をとらえながら、中国の女性たちの生涯をスケッチする。デートする若いカップル、結婚相談所でひきあわされる男女、家事を分担しあう共働き夫婦、夕食の仕度をする男の子、一八年もの間単身赴任していた小学校の副校長で定年（五五歳）になった女教師、あるいは老人ホームのお年寄り。市井の人々の日常的な表情と生まの声がとらえられている。解放前・中・後の中国を体験してきた九〇歳の女性は、インタビューに「いま、中国には希望があり、前途は輝いています。日々向上し、言ったことは必ず実現します」と穏やかにだがキッパリと答えていた。きつとそうにちがいない。しかし女性にかかわる問題に限定してみても、その解決は中々困難のように思われる。レポートでは、指導的地位にある女性が少ないこと、失業問題にからんで「女性は家に帰れ」という声が必ずしも小さくないこと、女性の性に合っ

像残テレビ像残テレビ像残テレビ像残テレビ像残テレビ像残テレビ像残テレビ像残  
ガイドのシネマほくガイドのシネマほくガイドのシネマほくガイドのシネマほく

## 『家族ゲーム』

名取 弘文

「家族って何だろう」と書くとき、ますのきよしさんの本のタイトルになってしまふ。子どもたちに聞くと、「安心できる人」「血のつながりのある」「同じ家に住んでいる」などと答えてくる。今年の六年生は、「家族の一員と認め合ったら家族」と言っていた。その六年生が「生活時間調べ・だんらんの時を持とう」のところでは、「仕事を家事を早く片付けて話し合えばいい」「たくさんだんらんをやる」と発言した。なるほど、教科書にはそんな感じに説明してある。でも、そうやって何を話し合うのだろうか。お尻がムズムズしないのだからかと家族意識の薄いぼくは心配してしまふのです。

森田芳光監督の『家族ゲーム』はとにかく面白い映画だ。

勉強をしない中学三年生に家庭教師がつけられた。松田優作扮するこの教師は大きな団地を指さして、「沼田君はあれですか」と通行人に聞く。このシーンで観客は爆笑してしまう。あとは笑いが笑いを呼ぶ。沼田君は問題児だとその父親に聞いた先生と沼田君の会話はこんな具合である。

「かわいい顔してるね、問題児だってね」「受験生はみんな問題児ですよ」「おもしろい言うじゃない」

そして、いきなり沼田君の顔にキスをするのです。松田優作って、どことなくホモっぽいので、観客は「やっぱり」と思ってしまうのですが、どうなんでしょう。

「気持ち悪いですよ」「俺だって、気持ちが悪いよ」「おまえ

なお、このドキュメントは、構成・演出・報告共に一人の女性が荷っていたことを特記しておきたい。（日本テレビ）

苦しみも悲しみも上昇志向も家族関係も教育問題も観客席からは『家族ゲーム』『のよなもの』と森田監督は視点を示しているのかな。

# 波

老いを考える

——「檜山節考」から——

半田 たつ子

緒方拳の辰平が坂本おりんを背負って、楡山を一步一步登って行く。禿げ山のような岩場には、白骨が転がり、黒猫のようなからすが群がる。死骸のない岩かげに下ろしてもらうと、おりんはこの日のために作っておいた筵を敷き、堅く辰平の手を握りしめてから、今来た方向に向かせ、背をどしんと押す。

大粒の涙をぼろぼろ落としながら、酔っぱらいのようによろよろと下りていった辰平が楡山の中腹まできた時、雪が舞い始めた。おりんが「わしが山へ行く時アきつと雪が降るぞ」と力んでいたその通りになった。

「おっかあ、雪が降ってきたよう」。その一言が言いたくて、辰平は楡山まじりの誓いを破り、ましらのように禁断の山を登る。

前髪にも、胸にも、膝にも雪を積もらせて、おりんは白狐のように一点を見つめながら念仏を称えていた。南面を思わせる幽玄な

世界。からすは一びきもいなくなっていた。

「おっかあ、雪が降って運がいいなあ」

「おっかあ、ふんとに雪が降ったなア」

辰平は叫び終わると、脱兎のように山を駆け降った。そして見た。銭谷の倅が、荒縄でがんじがらめに縛った又やんを、芋俵のように転がし、足で蹴落すのを。四つの山に囲まれて、どのくらい深いかわからない地獄の谷の底から、竜巻のように、黒煙のようにからすの大群が舞い上がってきた。又やんは谷のどこかにあるからすの巣に落ちたのではないのか——。舞い乱れていたからすは、だんだん谷底の方に降り始める。又やんはからすの餌食になるのか——。映画「檜山節考」のラストに近い鬼気迫るシーンである。

同じ日に楡山まじりをしながら、おりんと又やんのこの違いはどこから来たのだらう。

深沢七郎は「檜山節考」に書いている。

「銭屋の老父は又やんと云って今年七十である。おりんとは隣り同士の上、同じ年頃だったので長い間の話し相手だった、おりんの方は山へ行く日を幾年も前から心がけているのに、銭屋は村一番のけちんぼで山へ行く日の振舞支度も惜しいらしく、山へ行く支度など全然しないのである。だからこの春になる前に行くだろうと噂されていたが夏になってしまい、この冬には行くらしいのだが行く時はこっそり行ってしまおうと、陰では云われていた。だがおりんは又やん自身が因果な奴で山へ行く気がないのでと見ぬいていたので、馬鹿な奴だ! といつも思っていた」。

おりんは、嫁に来ては村一番の器量よしといわれ、亭主が死んでもからも嫌なうわさ一つ立てられず、まめまめしく働いて老いを迎えた。七十になった正月には楡山に行くつもりで、丈夫な歯をわざわざ石臼にどかーんとぶつけて欠き、辰平の後妻にきた玉やんには、いわなをとる秘伝を教え、何もかも片づけて楡山まじりを目標に、その日のことばかりを胸の中で描いていた。

「わしが山へ行く時は祭りのときと同じぐらいの振舞い出来るぞ。白萩様も、椎茸も、いわなの乾したのも家中の者が腹一杯たべら



れるだけ別に用意してあるのだ。村の人に出す白萩様のどぶろくも薄めては作ったが、一斗近くもこしらえておいたのを、今は誰も知らないだろう。わしが山へ行つたそのあした、家中のものが、とびついてうまがつて食うことだろう。その時になって『おばあさんがこんなに！』ってびっくりするだろう。その時わしは山へ行つて新しい筵の上に、きれいな根性で坐っているのだ」。

●

坂本スミ子のおりんは、まことに聰明できれいな根性のおばあやんだつた。残酷で哀切きわまりないこの物語に、ある安らぎを感じるのはなぜなのだろうか。

人間を生物の一つとして、自然との深いかかわりを出しながら、四季が織りなす優しさと厳しさを描き、貧しく飢えてはいるが生きる意味を語つた作品などと評されるこの映画を、「老いと死」の一点に絞つてみる。おりんの「きれいな根性」を、私たちはどう考えたらよいのだろう。

土地は狭く、飢えは甚しく、一人生まれれば一人死ななくてはならない村。そこで自然に従い、自然と調和を保つために生まれた掟と。その掟の世界とおりんはうまくいって

た。その掟を受け容れる自分自身ともうまくいっていた。苛酷な掟ではあるがおりんにとっては、課せられた役割を立派に果たすことが自己実現なのであつた。隣の又やんのよう「因果な奴」とは異なり、又やんにはできないやり方で掟に従うことが、おりんの誇りであつた。せめて雪が降れば、雪は周りを淨化する。雪の中で眠るように死にたい。雪は、人生の終幕を飾る願つてもない舞台装置であつた。幸せなことに、その雪まで降つたのである。

掟を持つ世界を受け容れることができず、掟になじめないまま七十に達した又やんには地獄の谷に蹴落とされる悲惨な末路が待っていた。又やんの悲劇は、納得できないままに追いつめられる人間の、「自分とうまくいかぬ自分に対する不信」にあるのではないか。今村昌平監督は言う。

「現代を振り返つて見る時、管理社会の一片の歯車と化する人間の姿は、残酷ではないと言ひ切れるだろうか。福祉社会の恩恵は、人間を真に幸福にし、生を充実させているだろうか。老人ホームのありようは、人生の終幕を飾るのにふさわしいか。世界的な環境汚染と、人口急増は……一人生まれれば一人死な

ねばならぬこの村とどう違ふのか。おりんの死と生を追求することによって、私は人生の意味の究極を知りたいと思う」。

●

私には人生の意味の究極などわからない。いつまで生きても、おりんのように従容として死につくことはできそうにない。又やんのように、掟を疑ひ、掟になじめぬ自分をもて余すのだからことがはつきりしている。

二〇〇五年には、日本の六十五歳以上の人口比率が一五・四％に達するという。あらゆる英知を結集して、社会保障を急ぎ充実させなければならぬ。だが、老後の男女平等な経済的保障、地域社会における福祉サービスの充実強化など、基礎的な条件が確立されたとしても問題は解決しない。

山へ行く日を自分で決め、人を集めて酒を振舞ひ、山へ行つたそのあした、家中の者をびっくりさせる馳走まで準備して生を全うしたおりん。私の感じた安らぎはそこにある。私たちは山へ行く日を知らない。愛する者に迷惑をかけながら、その日を便便と待つ人生の終焉には、どんな社会保障も救いにならないことを知っている。私たちの「老いと死」への恐怖は、ここにあるのだ。



この春も、華やかな話題をまいて次々と美しい女性雑誌が誕生しました。細かい活字がびっしりの「We」は、なんとささやかで地味なのだろう、とわれながら思います。でも、この「We」の誇りは、多くの方々の支援の中に生まれた雑誌であること。何の規約も拘束性もない「Weの会」がユニークな活動によって、本誌を支えていること。各地に「We」の読者会が芽を出し、「We」を読みながら語り合ってきていること、です。三月五日に、創刊一周年を記念して公開セミナーを開くことができたのも、これから催す夏季フォーラムの準備も「We」と「Weの会」との「いい関係」によって可能でありました。これからもそのかわりを大切にしていきたいと願います。

本号では、特に「Weの会だより」の頁を増して、各地の読者会の様子、「Weの会」最近の話題をお知らせします。

(編集部)

83年一、二・三月号の中で一番心に残った

〈Weの会の会より〉

記事について話し合おうということで、第一回の「Weの会」を開きました。当初は中嶋里美さんを迎え、広く他の人々にも呼びかけて集会をもつ予定だったのですが、中嶋さんが急病のため、予定を変更して、石川女性会話会の会員七名だけで、例会も兼ねてやりました。「We」についての話し合いは四十分間ほどだったのですが面白かったです。

話題は一月号の寿岳章子さんの文「夫の呼称」に集中しました。

ある人は、「主人と呼ぶ方が都合の良い場合もありますから、ことばの表現にはあまりこだわらず、実質を大切にしたい」と思いますが、『主人に相談しないと何とも言えません』と無理難題を言われたとき断ることができる場合もありますから……と言われたが、私は反論しました。「主張が本物ならば、表現と内容の不一致は許せるものではありません。『主人』という語は、その意味を考えるとき、男女平等論者ならば夫の呼称に使えないことばではありません」と……。

そこで「主人」が駄目ならどう呼べばいいのかと話しあいました。「旦那」も富や身分を匂わせることばで不適格であり、使いたくありません。結局、「つれあい」が対等な関

係を示す一番良いことばではないかということになりました。法律の介入を感じさせず、人生の苦楽を共に分つ相手としての語意をもち、しみじみとした庶民性のある良いことばだと私も思います。もうさわようこさんもこれを使っていらっしゃるし、わが会の三石久江さんもこの語を日常のものとされつつあると私は見えています。

けれど「つれあい」という語は長過ぎるように思われ、もつれあいの悲哀みtainなものも感じます。私は、もっと明るくて行動的な語感をもった「夫の呼称」を別に欲しいと思っています。

一年前の広島での日教組全国教研集会のときでした。夕食の席に「国際婦人年をきつかけとして行動を起こす女たちの会」のメンバーが寄ったとき、坂本ななえさんが主人の呼称について「オカレサマ」と言って私を面くかわせ、次の瞬間、「お彼様」だとわかって爆笑したことがあります。

中国では「愛憐」、日本の昔なら「背」、それでは世界の各国ではどう呼んでいるのでしょうか。殊に開発途上国、例えばアマゾンネスタちは夫のことをどう呼んでいたのでしょうか。Weで音頭をとって調べてみて下さいませ

んか。

私は数年前から「新しい思想には新しいことばを造る方がよい」と考えています。アメリカで、ミス・ミセスの区別を無くすためにミズという語が造られたように……。

このWeの会で私は「フリー」、「フー様」を、配偶者を呼ぶ語として提唱しましたが、誰も賛成してくれませんでした。「夫婦」という語の同音に目をつけて「夫・「婦」・「夫様」・「婦様」と書いて、いずれも「フリー」・「フー様」と読むのであります。「私のフーが」とか、「あなたのフーさんお元氣？」とか使うのです。どなたか私の意見を支持して下さいませんか（でも、「夫婦」ということばには愛情よりも法律の枠を感じさせる欠点があり、その点、「つれあい」や「妹背」に劣るかとも思います）。

Weで一度読者の皆さんから夫の呼称を募集してみして下さいませんか。造語ミズが市民権を得たように、私たちも衆知を集め、夫の呼称を造り出し、市民権を得させたいものです。

（古田勵子）

#### 〈We名古屋の会より〉

一月から、名古屋で、Weの読書会を毎月一回

開いています。Weを利用して、新しい家庭科

について話し合いをし、学ぶだけでなく共修にむけて運動できる会にということで、三つの柱を立てて、会をすすめています。一つは、Weの特集を中心にしての話し合い、もう一つは、日常実践（授業実践）の発表、そして、各自が男女共修に関する情報をもちよっての情報交換。会で話し合った内容を、多くの人に知ってもらい、集まってもらうために、毎回「Weの読書会だより」と「家庭科に関するニュース」を出しています。

家庭科の教師だけでなく、他教科の教師、タイピストの方や公務員、主婦の方たちと、いろいろな立場の男女が集まっていた話し合いは、ときには、家庭のこと、職場での出来事などに話題が及び、いつも時間が足りなくなってしまうのが残念です。

高校の家庭科の教師になって六年、知らず知らずに、枠にはまった考え方しかできなくなっていた私にとって、Weを読むことによって、この読書会で、いろいろな人や、考え方や、実践に触れることによって、自分の中で何かが変わっていくような気がしています。そして、Weという本をなかだちにして、もっと多くの方と出会えたら……と思っ

す。（伊藤厚子）

連絡先（〇五二）四二一九五八三

宮崎世津子方

#### 〈We湘南・三浦の会より〉

五月二十八日、藤沢でWeの会が開かれました。初夏を感じさせるさわやかな一日でしたが、悲しいことに、ちょうどこの日、WeのすてきなTシャツ・トレーナーを作ってくださっていた根本さんの告別式でした。お元氣なら、いつもの優しい目で、控えめに、それでいて時々、心はずしんとくる厳しいこともおっしゃる根本さんも出席してらしたことでしようが、本当に残念です。その上、小・中学校の婦人部の定期大会とも重なっていたため、総勢六人という少ない人数でしたが、その分それぞれの方が、家庭のことなど、私的なこともざくばらんに話せる雰囲気ができあがりました。自分が少しずつ変わっていくと同時に、相手も少しずつ変わっていく様子など、それぞれの家庭の様子を聞かせてもらいましたが、女の人は、相手を徐々にうまく変えていってしまう、なかなかこわい存在なのです。また、五月号・六月号の産む・産まぬ、はたらくことをめぐっても話題になりましたが、これは、一回の話し合いではつきぬ

問題でもあり、また、次回にもひき続き話題に出ると思います。女の人の問題だけではないはず。男の人は、どんなふうに考えているのか聞きたいな、と思います。又、その問題の発展として、はたらく女の人や男の人にとっても、もっと地域の人々との関わりが必要では、という話もできました。

(中村美和子)

#### 〈We 城北の会より〉

We 城北の会も二年目を迎えました。東京北区十条出張所二階へ、常連と入れかわり集まる人で毎回十数人がにぎやかにおしゃべりしています。五月二十一日(土)、私は二度目の参加でしたが、半田さんに会えて感激。二時半から、会のこれからのあり方を考えたり、職場や家庭のできごとを出し合って、あっという間の三時間でした。

「私は、いつも家にいるので、この会で子供のことや学校の先生のことを話すのをとても楽しみにしているのだけれど、みんなは家庭科の専門的なものを望んでいて、こんなささいなことなんか話してはいけないうかと思ってしまう」「授業の教材研究をしに来るわけではなし、何でも話し合えるのが会のよさ。あなたが言われたのはささいなことではな

く、本当はとても大切なことで、中にはいろいろな問題や真実がかくされている。話し合う中で真実が見えてくるのだし、これからも思っていることをそのままに出し合える場にしていこう」「職場に、生徒を人間とも思わないような言動をとる教師がいる」「女教師に對しても差別的な態度をとるその教師に、まぢがいを気づかせていくべきである。負けずがんばって」

このように、日ごろ考えていること、直面している問題を出し合いながら、よりよく生きていこうと真剣に語り合っています。「奇数月の第三土曜日」を原則として集まり、お茶やお菓子をつまみながらワイワイやっています。二度目でも昔からの知り合いのように大きな顔して話せてうれしいなあ。

(磯部幸江)

#### 〈We 埼玉の会より〉

五月二十九日(日)、柴田栄子さん宅で20歳から70歳までの、12名の参加で開かれしました。柴田さんのダンナさんの腕によりをかって作ってくださった柴田家秘伝の手打ちうどんや中嶋里美さん手作りのきれいなグリーンのキWeののった、Weの文字入りケーキ、手製の押し寿司などの御持参もあり、心のこもっ

た豊かさの中でのステキな集まりでした。今回は「高校生に愛と性をどう語るか」を主なテーマとした話し合いでしたが、愛も性も人間としてどう生きるかが土台になる。自分の子供、生徒にどんな生きざまを見せるかが大切ではないかという話。その他、学校のこと、家庭科の男女共修のこと、社会のしくみのことなど次から次へと鋭いおもしろい意見ができました。次回は七月末に中嶋里美さん宅(所沢)で開く予定です。(村松雅子)

We の会のパンフができます！

芦谷薫、小田亜佐子・福留美奈子三氏の担当で、「うす型見る、パンフ」「大きな文字で見やすいレイアウト」の方針のもと製作INGです。夏休みの各種集会などでぜひご活用下さい。パンフ刊行のねらい・目的は左の通り。「ウィ書房と共に歩み、助け、助けられて」Weの会の活動を記録として残し、新たな問題提起、企画に役立てるとともに、Weの会、Weを広め、Weの仲間を増やすための宣伝パンフとする。パンフ第一号として、これまでのWeの会、3/5公開ゼミ、各地読者会とウィ書房スタッフ紹介の三部構成とする。

頒価 二〇〇円。お問い合わせ、ご注文はウィ書房へ(03・326・1380)

# わんて+お

## ★中教審、教科書小委員会報告★

教科書制度の見直しを進めてきた第13期中央教育審議会（会長・高村象平慶応大名誉教授）の教科書小委員会（座長・吉本二郎大正大学教授）はこれまでの審議結果をまとめ、5月30日、総会に報告、了承された。

報告は①教科書検定の機能を充実させ、検定基準を明確にする②義務教育教科書は都道府県教委がまず選定し、その中から市町村教委が採択するとともに、採択地区は都道府県教委の教育事務所単位へ広域化する③義務教育教科書の無償給与制度は維持する、などが骨子。「密室検定」との根強い批判には、検定結果の一部公表を検討するよう提言しているが、検定非公開の原則を改めて強調。

このほか①教科書の手引きである教師用指導書の内容に対する行政指導②教科書をよくするための継続的研究、評価③小、中学校と同じく資本金や編集者数の条件を設ける高校教科書発行者の文相指定制度④「一面的な見解だけに偏らない」立場での著作、編集と実際の執筆に応じた著作者名の表示、などの必要性を提言している。

報告内容は統制色の濃いものとなっており、日教組や執筆者らから強い批判が出ている。同報告は6月30日の総会で瀬戸山文相に答申される。（朝日、5・31付）

## ★「文化と教育に関する懇談会」発足★

教育制度のあり方を幅広い立場で話し合う中曽根首相の私的諮問機関「文化と教育に関する懇談会」が6月14日発足。首相周辺は、将来は「教育臨調」といった権威ある機関に発展することも期待している。

14日の第1回会合では「六・三・三・四制」に対する疑問が続出。今後、具体的には他に、偏差値重視教育、入試制度の改善、非行防止対策などがテーマになる。会合は月1回。（委員）座長—ソニー名誉会長・井深大、座長代理—元文部事務次官・放送教育開発センター所長・天城勲、慶大塾長・石川忠雄、NHKアナウンサー・鈴木健二、作家・曾野綾子、京大名誉教授・田中

美知太郎、評論家・山本七平の諸氏。

（毎日、6・14付）

★「荒れる教室」の初の全国実態調査★  
文部省による初めての「荒れる教室」の全国実態調査が6月2日までまとまった。

調査は、都道府県教委を通じて全国の公立中学10,252校、同高校3,954校全部に調査用紙を送り、4月中旬までに記入を求めた。

調査によると、'82年度の校内暴力は①公立中学の13.5%、同高校の10.5%で起こり、特に関西の高率ぶりが目立つ②対教師暴力の発生は中学校が1,404件（657校）、加害生徒2,810人（全国の中学生の0.05%）、被害を受けた教師1,715人。高校では159件（118校）で加害生徒238人（全国の高校生0.007%）、被害教師165人③総発生件数は警察庁調べと比べ、少なくとも2.6倍にのぼることが分かった。

調査の第2の柱である非行中学生の出席停止措置については①'82年度は延べ287人と前年より倍増②法律によらない自宅謹慎などの登校停止も同546人と4.8倍増。出席停止や自宅謹慎が急増した理由は、文部省が'81年度後半に生徒指導担当主事の全国会議や、同省発行の指導資料で出席停止の意義を説明した結果、これまでちゅうちょしていた教委が積極的に踏み切ったことや、社会問題化したので「もぐり処分」していた部分が表面化したものとみられている。

（朝日、毎日、6・3、8付）

## ★十代の妊娠中絶、史上最高に★

5月30日、厚生省統計情報部がまとめた'82年度の優生保護統計によると、優生保護法に基づく指定医が日本母性保護医協会の県支部を通じて都道府県知事に届けた人工妊娠中絶の総件数は59万299件（前年比6270件減）。1952年以来の史上最低で、史上最低数は11年連続の更新。子供の出生数を抑える最近の夫婦の傾向や避妊法が普及して計画出産が徹底したことなどの反映とされている。

しかし、20歳未満は24,478件と、前年より2,399件（10.9%）もふえ、4年連続で史上最高数を更新。特に15～19歳の少女千人に対する中絶経験者数の割合は、'65年2.5人、'75年3.1人、'81年5.5人だったのが'82年は6人にハネ上がった。性行動の早熟化を裏づけている。（朝日、5・31付）

## ★初の女性地裁所長誕生★

6月1日付の最高裁人事で、寺沢光子氏（57）が東京高裁判事から徳島地裁所長へ。初の女性地裁所長誕生！

◆二年間受け持ってきた子どもたちには、教師としての私がゆさぶられました。体罰も必要悪と思ってきた私が、教職11年目にして、そのあまりの粗暴ぶりに、「先生もひっばりたいりするのをやめると約束するからみんなも他の子を平気でこずいたり、ひっばりたいりするのをやめてほしい」と言わせる子たちです。でもやめてみると、それは子どもたちとの交換条件でやるべきものではなく、私自身の人間性としてやるべきだった、とつくづく反省させられています。席と当番も、もっともつと彼らに任せたら、楽しい自主的な生活が送れたかもしれませ

ん。関連して昨年連載の児玉すみ子さんのカウセリング入門は、今受け持っているワンパク坊主たちを一部しか受容していない私には、重い問題をつきつけられる文章でした。前の日に吐いた子のそばを通りながら「キタネー」とさげすむ子を許せないと思い、母親の自殺した子を、けんかの腹いせに「お母さんが死んだことジマンすんなよ」とやりこめる子を、許せないと思っ

てしまう私です。小学校の二年生で、毎日三、四人がネズミがネコにおもちゃにされるような形で泣かされる。やっぱり私の在り方がおかしいんでしょうか。彼らは三無主義とは逆の、やる気もあれば、エネルギーもあり、帰宅後も基地づくりをしたり、小屋づくりをしたり、探検ごっこをしたりという、恵まれた遊びのできる子どもたちなのです。それがなぜ、教室の中で、こうもぶつかり合うのか、せめぎ合うのか。おもしろい顔も、おもしろい姿もたくさん見せてくれる子どもたちなのですが……私のどこが失敗

だったのかと考えさせられています。何か心の奥の人間らしさに訴えかけても、もう一つ届かないもどかしさを痛感するのは、やっぱり私の訴えかたがまずいのでしょうか。私自身がカリキュラムにせよ。子どもたちを追いつける管理職だから、彼らのやさしさがうまく引き出せないのでしょうか。確かにそうだ、との声がしきりにするのです。(清瀬・福田緑)

◆「団地の風景」おいに共感します。私も団地の五階に住んでいます。私もお話をお話をひきとつ。先日、最上階のお家が階段の天井付近にあるすずめの巣から、ヒナが巣立ちそこねて、次々と四羽階段に落ちてきました。私が箱に入れて巣の真下においてやったけれど、親鳥はビチビチと騒ぎ立てるのみです。それを聞いて隣の階段の鳥の世話名人がかけて、その人に一日世話をしてもらいました。中に一羽、虫の息のヒナがいて、これは三階と四階の奥

さんの共同のあたためあい(初めは両手の中に入れ、あたため、これでは手がふさがるといので、とあるところに入れ：谷間です)で、九死に一生を得ました。その後、夜はわが家で、昼はあちらこちらの家庭で(少なくとも六軒)めんどろを見てもらい、一〇日目の本日に至るまで元気で、エサをやるごとにくらいついています。

このヒナたちのおかげで、私は二軒の家と知り合いになりました。こういうこともあるんですね、団地って。(山口・友定啓子)

◆六月号の「はたらくことをめぐって」は、私個人の能力を別にしても、不条理なことが多い毎日だけに、共感の多い読みごたえの内容でした。また、視点「しかる」と「おこる」(長谷川孝は全くだ、ととてもうれしく思いました。私自身に最も不足しているもの「不条理をつかみ、それを論理化して言動に表せる力を育てる」「考える力と判断力」―学校に親

に望みたいことはこれなんだ、と思い、自分自身に息子に、そして二人の孫にこの秋生まれる三人目の孫に望み続けていきます。

(新潟・山口久子)

◆大室君子さんの絵と文に心惹かれ、栗原実抄さんの文章が大好き、野村さんの「なんてうまいんだろう」といつも感心……という訳で、結局は毎月すみずみまで読ませていただいていますので、もう一年は続けて購読することになりそうです。六月号は、ヤンソン由実子さんの文章、一番読みごたえがありました。

(東京・小山田美智子)

◆「はたらくことをめぐって」いろいろな場にいる方々が、ほかの場にいる方々に届く言葉で語っていらっしゃることに、大変感銘しました。

(東京・曾田蕭子)

◆台所症候群とか、主婦症候群について、テレビで報道されていたが、大変興味のあることです。きちんと家事をやっていた人に多いとか。社会問題ともからみあっている一種の時代の歪ともいえるような気がします。主婦としてわかるような気がしますが、孤独な主婦の立場、社会的に未熟な女性の立場、主体性のない生き方、時代の変化に対応しない家庭や家族のあり方、性別分業に対する一種のストライキ等々、いろいろな家庭をとりまく問題が考えられます。

反面、サラ金地獄に陥った家族が、最後に立ち直ることができた原因は、何がなくても家族があるということだったというのを聞き、家族を捨てる人の多い一方で家族を何よりの生きる支えとしている人も多いことに、感動を覚えました。

(北上・押切郁)

◆中国へ二週間の旅をしてきました。日本とは体制の異なる社会に

身を置き、その中でいろいろ考えることができたのは貴重でした。スバラしい中国の女性たちにも何人も会いました。あたたかで、前向きで、理的で、ほんとうにうれいし出会いでした。それに付けても、日本で「当たり前」と考えられていたことの中に、何とつまらないことが多いことでしょう。

(葉山・鈴木みどり)

◆過日、富士山のながめられる高原で、分会の仲間とバーベキューをしながら、話し合いを持ちました。はじめはバーベキュー、ブラス飲み会でしたが、昼から始めるので、無理に「共修」問題の討論を組み入れてもらいました。前回

◆ラジオのスイッチを入れ、何気なく聞いていたのが、何と岐阜なずな学園の尾藤操先生の「人生読本」でした。「暮しの手帖」には、秋山ちえ子さんが「かにた婦人の村」について書いていらした。

わが分会は私以外すべて男、しかも共稼ぎの人は一人だけ。そのため、性役割分業を性差別とはとらえない人たち、という印象を強く受けました。そのためか「男女同権、男女平等はもう達成されつくしている」とか「要するに女を大切にすればよいのだ」というオチがついてしまいました。社会科の教員は「まず体制が変わらなければ仕方がない」と言います。時間もなく、私の説明不足もありましたが、根本的な「ここ！」というところが押さえられない、そして理解してもらえない。そのため話し合いが深まらないもどかしさを感じた次第です。「どのように切り込むか」大変難しいことです。(三島・梶原公子)

◆「(中略)『人間って不思議』の中で紹介された「美しいひとたち」と、私もまた出会えるのか、と喜びました。(敦賀・高嶋みどり)

# 十字路

北海道・留辺蘂町議会が意見書

網走支庁留辺蘂町議会は「歴史教科書の書き換えに関する要望意見書」を満場一致で採択した。内容は「政府は、歴史教科書の執筆者から提出されている正誤訂正の申し入れに対し、直ちに応ずるよう強く要望する」というもの。同町では戦時中、朝鮮人・中国人の強制連行後の酷使、多数の死をみている。同町労働組合協議会は①政府は太平洋戦争が日本の侵略戦争であったことを認める②教科書検定は誤字などの訂正にとどめるなどの陳情書を町議会に提出していた。(朝日、3・17)

・道高校長協会が指導事例集

登校拒否や校内暴力、家庭内暴力など、生徒の非行に取り組む現場教師からの報告をもとにした生徒指導の事例集がまとまった。事例集には四十五例が掲載され、指導の方法、結果、反省の項目もあり、貴重な手引書として指導に悩む先生たちに喜ばれている。問い合わせは、札幌市中央区北四西四加森ビル、北海道高校長協会事務局(☎〇一一二二二二—一三八六)へ。(朝日、5・15)

・離婚相談相手は、悩みの先聲

ことし一月、札幌に住む三栖満紀子さん(43)が「家庭裁判所の離婚調停は、依然として古いモラルのもとに進められている」と訴えた。その声が大きな反響を呼び、五月一日の「女性の自立を支える会札幌支部」発足へと発展した。会の活動の第一歩は離婚相談部の設立。相談を受ける側も、同じ悩みで苦しんだ人たちで、お互いに体験を打ち明けながら、解決の糸口を探っていくことを目指す。(朝日、5・24、山口里子)

千葉・拘禁二法案に反対

警察の留置所、拘置所の管理強化につながる問題になっている拘禁二法案(刑事施設法、留置施設法)に反対する弁護士会主催の「県民の集い」が十三日午後六時から、千葉市民会館で開かれる。同問題での一般県民対象の集会は初めて。自由事件をテーマにした演劇の上演、総監公舎爆破未遂事件で自由を強制されたという福富弘美氏らが体験報告をする。(毎日、5・12)

・難民の子の姿―「野の花の家」が写真展

木更津市真里谷、花崎みさをさんが主宰している「野の花の家」の主催で「インドシナからやってきた子どもたち」が十三日から市

社会教育センターギャラリーで始まった。難民の子ら六人を里子として引き取っている花崎さんや、ボランティアの小林忠博さんらの子の表情を中心にしたパネル写真百点、実態やキャンプの様子、各国の受け入れ状況などの説明、子どもたちの絵や作文、難民キャンプでつくった民芸品などが用意されている。(朝日、5・14、木田直子)

新潟・中学生全寮塾

県内で初めて西浦分水町に現役中学生の全寮塾「新潟青雲寮」が開設された。塾生は群馬、福井、埼玉県のほか、栃尾市、北浦水原町、地元分水町から合計六人。六人は古沢恒栄所長の自宅に寄宿し、地元の分水中に通学夜は「塾授業」。町長は「町内の学校間の越境入学にも厳しく対処しているのに、法律的には住民登録を拒否できないんです」と渋い顔。「高校受験は原則的には遠慮してもらいたい」(県高校教育課)とやかいになりそう。(新潟日報、5・5、山口久子)

群馬・非行―甘い育児から

県は本年度から県内三百三十四の全公立保育所で「子育て相談」を開設した。社会問題になっている少年非行の防止対策として、幼児期にしっかりした育て方をし、健全育成し



ようというのが狙い。相談には、所長や主任  
保母が当たり、適切なアドバイスをする。県  
児童家庭課は利用を呼びかけている。

(下野、5・30、坂本昌子)

兵庫・高等数学漫画で解こう

兵庫県立神戸商大の木村良夫講師(34)が  
漫画をふんだんに盛り込んだ型破りの数学書  
を出版した。「目で見る線形代数」八十四ペ  
ージである。同講師は担当している一般教養  
課程の数学の受講生が学期末に三分の一から  
四分の一に減ってしまったため、考えたのがこ  
の教科書。今年の新入生が使っているが、授  
業を休む学生が減り、受講態度も熱心とい  
う。

(中国、5・13、国重美恵子)

・薄くなった夫の影

妻の「生きがい」に占める「夫」の比重が  
低下。尼崎市立勤労婦人センターは利用者の  
意識調査結果をまとめた。生きがいを持って  
いる女性のうち「夫」を挙げたのは11・8%  
五十四年の調査を7・8ポイント下回った。

「子供ができたら職業は辞め、子供が大き  
なったら再就職」は52・1%、「子供ができて  
も続けるべき」が19・9%、全国平均はそれ  
ぞれ43・5%、18・0%で尼崎の女性は就労  
志向が強い。

(神戸、5・17)

・一日で43万円もらえないわ

「議員になったのは四月三十日、四月分の報  
酬四十三万円をまるまるもらえない」と全額  
受け取りを拒否しているのは、新市議、広田  
陽子(46)さん(無所属)。市の条例では「そ  
の職についた当月分から支給する」となっ  
ている。同議員は「今の条例では新旧両議員に  
四月分をダブって払うことになる。不合理な  
ので六月議会に条例の改正を要求したい」

(説売、5・22、由良サダコ)

広島・ボケに思いやりを

ボケは自然な老化、まず思いやりを。広  
島市衛生局はボケ症状の老人への接し方、介  
護の心構えなどをまとめた手引書「ボケ老人  
の介護」をつくり市内七保健所で相談に訪れ  
る家族らに配っている。手引書はB4判、十  
四ページで、ボケとは何か、ボケる原因、老  
人への接し方、市内の相談機関など八項目に  
分けて、カラーイラストをたっぷり使って分  
かりやすく説明している。市は四月から「ボ  
ケ一〇番」(254)3154(月一金  
曜)を設けた。(中国、5月、国重美恵子)

福岡・「国際男性年」必要です!!

「男女の平等を」「女性の社会参加と自立を」  
と婦人問題は、もっぱら男性社会の「壁」に

攻撃の矢が放たれるが、男性の側は幸せな毎  
日を送っているのだろうか。福岡市教委の調  
査では、仕事に忙殺され、仕事以外の時間は  
自宅でゴロゴロしていることがわかった。調  
査結果を諸岡和房教授(九大社会教育学)は  
「男性は経済的自立に責任を持ち、働きづめ  
で、他の社会参加はゼロに近い。精神的にも  
幼児に近い。女性は経済的自立の面で男性に  
劣るが、社会参加、子育て、趣味の面で満足  
すべき結果をみており、幸せは女性が上。国  
際男性年が必要」と言う。

(毎日、5・30、友定啓子)

熊本・増え続ける臨探講師

県高教組(託徹夫委員長)は五月一日現在  
の県立学校職員・生徒数調べを行った。この  
調査でここ数年、臨時採用職員数が百人を超  
え、本年度は百八十九人であることが明らか  
になった。県教組では「本来なら当然正規採  
用されなければならない部分も臨時採用で穴  
埋めされており、その傾向が恒常化してい  
る。そのため他の職員に校務などのシワ寄せ  
があり、生徒指導面など教育環境の悪化も懸  
念される。『安上がりな教育』を行おうとし  
る姿勢に大きな問題がある」と指摘してい  
る。

(熊日、5・23、中山そみ)



◆「いま、人間として」創刊以来、高史明氏の『歎異抄』との出会いを一番心待ちにしている。「歎異抄」はずっと以前に勧められたが、とても読めそうになく、でもいつか心が欲する時があるかなと思いつつ、今日に至った。

一人称で書かれているので私は単純に「私」高氏」と読んでいた。人間というのは何と悲しい存在だろうと思わずにはいられない。生まれることに意志を関与させ得ない悲しさ。しかし「過酷な生の条件」の中の生き方には、かつて感じたことのない衝撃を受けている。まだ「一人」を一步も出ることのない「私」は、今後どんなふうにもめぐり合っていくのだろうか。

私「歎異抄」に出会う日も近そう。(中野) ♠継続の手続きをされる方がだいたい落ちついた状況ですが、二・三月号時に比べ、約千人のダウン。来年は今のボリュームで大きい活字に願っています。そのためには五千人の読者が必要で、もう一度、お友達などに声をかけて下さいませ。 ♠新しいチラシができました。各種の集会で配っていただければ幸いです。ご連絡いただければ、お送り致します。

♠WeのトレーナーやTシャツを作って下さっていた根り、本昌宥さんが、ご病気でお休みになり、初秋にお届けする十月号は「今、教科書問題を問う」です。 ♠老いを考えるポイントとは老いをどう迎え、どう生きるかという自分の問題と、老いを抱える周りの問題の二点につきまします。周りは家族、地域住民、施設、病院、政治を指します。順序からいえば、人はまず周りの人として体験した後に自分の問題に直面します。ところが、日本では「老いを抱える周り」の中に自分を位置づけない人、老いを抱える体験の希薄な人が非常に多いのです。嫁・娘・妻のみを「老いを抱える周り」として、改めなければなりません。

♠Weの告知板 ♠家庭科の男女共修をすすめる会は、昨夏初めての全国交流会を開き大成功でした。今年「動き出した男女共修—いま中学校で—」のタイトルで、8月4日、10:00AM~5:00PM、目黒のみやこ荘で開きます、中学校の共修実践報告が各領域にわたって5本ぜひご参加を。お問い合わせはウイ書房へ ♠「女性差別撤廃条約とわたしたちの暮らし」と題するスライド（学習の手引き、カセットテープ付）が完成。カラー6部構成約30分、くらしに生かそう—教育の中で—で、条約と家庭科の問題も取り上げています。分譲価格5万円。お問い合わせは下へ大阪市浪速区久保吉1-6-12 社団法人部落解放研究所 Tel 06(568)1300 ♠71頁の大西麻里子さんの質問ヒープとはHome Economists In Business (HEIB) 厳密には「企業で働く家政学土」の意味です

新しい家庭科—Wk 発行所/(有)ウイ書房 Vol. 2 No. 5 1983年7月20日発行 〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14 〒500 (年間購読料 ¥5,000) ☎03(326)1380 振替 東京6—59867 編集兼発行人/半田たつ子 印刷所/(有)若佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

引き続きWeの仲間になって下さい

Weの仲間をふやして下さい

——Weの取り扱い店一覧—— お近くの書店に、ぜひお声をかけて下さい（6月20日現在）

川	富貴堂 京栄堂書店 東山堂 こどもの本の店 プーの家 八重洲書房 ポラン 萩書房 ホビット館 加賀屋書店 八文字屋 岩瀬書店 西沢書店 深川第二書店 十字屋書店 太月店 松文堂 川島朝日堂 初心堂 アルプス社 近江書店 ツルヤB.C 岩瀬書店 新井書店 文泉堂 黒田書店 比企文化社 山屋 前原かつば 原勝書店 日東寺支店 元山書店 大和屋書店 露書店 計文堂 ビッピ 日成堂 書肆アクセス 三省堂本店 書泉グランデ 飯田橋書店 鈴木書店	〈杉並〉 柏木堂書店 木風舎 新愛書店 ブラサード書店 たつみ書房 みどり書房 〈新宿〉 模索舎 ブックスミヤ 〈葛飾〉 宏精堂 〈世田谷〉 やまべ書店 江崎書店 〈練馬〉 かじか書店 〈北〉 愛京堂 〈墨田〉 業平堂 〈三鷹〉 第九書房 〈府中〉 国府書店会 〈国分寺〉 青野書店 〈国立〉 東海書店 〈立川〉 石井書店 オリオン書房 和中書店 くまざわ南口 マルオカ書店 飯田書店 日南書店 久美堂 北野書店 ブックス上溝 たらば書房 相模書店 相模大野 豊元書店 東松堂 伊勢治書店 太洋堂 百町森書店 吉見書店 森上書店 中田島書店 谷島屋書店 文正堂書店 ウニタ書店 ポランの広場	名古屋 日比野泰文堂 谷口正文館書店 江崎 南 青雲堂 文教書店 耕文堂 鈴彦書店 豊田 栗山書店 白石書店 島谷書店 新潟書房 うつのみや セールスセンター 富山 清明堂書店 清文堂 岡谷 笠原書店 新光堂書店 ひまわり書店 じっぷじっぷ 吉川隆文堂 春江書店 品川書店 宝島 海老山書店 尚古堂 旭屋書店本店 ユーゴー書店 増田書店 樋口書籍 米原十六堂 西村書店 ヒバリヤ かつらぎ 昌文堂 松香堂書店 大久保京都書院 恵文社神足店 流泉書房 ヒカリ書店 日進堂 明文館 宣文堂書房 姫路丸善	岡山 山 弘栄堂 今井MC本店 今井書店 武田書店 やまびこ書店 いづみ書店 草間書店 岡田書店 白藤書店 去来社 タカハシ書店 雄徳堂徳野書店 依光書店 北九州書店 白石書店 日新堂 文光堂 紅屋書店 三章文庫 片桐書店 開書堂 スズキ書店 札幌、新潟、 新宿、渋谷、玉川、住友、 吉祥寺、川越、船橋、梅 田、岡山、広島、松山、 福岡、熊本														
盛岡	田形	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
仙台	岡台	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
秋田	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
山形	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
福島	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
郡山	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
藤岡	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
前橋	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
桐生	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
水戸	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
浦和	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
川口	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
上尾	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
東松山	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
和光	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
船橋	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
浦安	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
千代田	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
東京	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路
文京	山	山	松本	福井	岐阜	奈良	尾鷲	大阪	東大	阪和	豊中	京部	宇治	長岡	京戸	神	尼崎	姫路

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。